

第1回 生活の質に関する調査結果(インターネット調査)(検討用資料)

平成24年9月28日
内閣府経済社会総合研究所
幸福度研究ユニット

目次

1. 調査の概要	2
2. 調査結果の概要	5
(1) 主観的幸福度	5
①現在の幸福感	5
②家族の幸福感	8
③理想の幸福感	10
④将来の幸福感	12
⑤幸福を判断する際に重視した項目	14
⑥生活満足度	15
⑦協調的幸福感	17
⑧昨日の感情経験	20
⑨過去数週間の感情経験	22
⑩幸福とかかわる様々な心の動き	24
⑪ここ一週間の気持ち	26
(2) 様々な主観的指標	27
⑫生活の局面別満足度	27
⑬不安	30
⑭子育て経験	33
⑮組織への信頼	35
⑯社会への信頼	37
⑰人と付き合う上での信頼感	40
⑱自己有用感	41
⑲身の周りから受ける援助への期待	43
⑳ニート・ひきこもり	46
㉑こころの健康	49
㉒自己申告の健康状態	52
㉓配偶状況	55
㉔こどもの数	58
㉕社会的接触頻度(直接会う場合)	59
㉖社会的接触頻度(電話、電子メール、手紙など)	65
㉗別居している子どもの居住地	71
㉘別居している親の居住地	72
㉙両親も子どももない方にとって、最も交流のある親族の居住地	74
㉚困難時に助けてくれる人の数	75
㉛介護等	78
㉜介護等の負担感	80
㉝抑うつ尺度	83
㉞希死念慮	86

1 調査の概要

(1) 調査目的

本調査は、幸福度指標試案には含まれているものの、同時並行的に行われる生活の質に関する調査(訪問留置法)には含まれなかったニート・ひきこもり尺度、うつ尺度等を測定するとともに、それらの指標と主観的幸福度との関連を検討するため、インターネットを利用して実施したものである。

モニターを利用したインターネット調査については、調査の実施が迅速であるというメリットがある反面、年齢や年収、職業などにおける代表性、さらには調査方法の信頼性も疑問視されており、慎重な検証が必要とされる(たとえば本多・本川¹, 2005; 大隅・前田, 2008²; 内閣府, 2010³)。インターネット調査においてはより批判的的回答が集まりやすいことも指摘されている(NHK 放送文化研究所 2010)。そこで以下の分析においては、適宜、訪問留置法調査結果との比較や、他の統計調査結果と比較し、本調査の限界を暫定的に指摘する。また、結果の参照時にはインターネット利用率が90%を超える39歳までと、それ以外の年代についてはサンプリングの段階で信頼性に大きな違いが発生していることを念頭に置く必要がある。実際様々な指標において訪問留置法とインターネット調査での差異も確認されているが(詳細は各項目の結果を参照)、この点が調査手法によるものか、サンプリングの違いによるものかは不明であり、今後のさらなる検証が必要である。なお、サンプルの偏りなどについては、別途公表する「生活の質に関する調査(インターネット調査、訪問留置法調査)と他の統計調査との比較」において詳細な分析を行っているので、そちらを参照されたい。

(2) 調査項目

①主観的幸福度、②協調的幸福感尺度、③生活満足度、④感情バランス、⑤心理的機能に基づく幸福度、⑥生活領域での満足度、⑦不安感、⑧子育てに対する感じ方、⑨制度への信頼、⑩一般的信頼感、⑪自己有用感、⑫一般的サポート、⑬ニート・ひきこもり、⑭うつ尺度等

(3) 調査対象

- ①母集団: 全国の15歳以上69歳以下の者。
- ②標本数: 10,000名。
- ③抽出方法: 受注者が保有するモニターに対して調査への参加を勧誘するメールを配信し、回答者に都道府県、性別、年齢、職業の産業分類を回答してもらい、回答順に地域ブロック別、性別、年齢階層(5歳)別、国勢調査の産業大分類別に割当、必要数に達するまで続ける方法にて抽出。

¹本多則江、本川明(2005)「インターネット調査は社会調査に利用できるか— 実験調査による検証結果 —」、労働政策研究報告書

²大隅昇、前田忠彦(2008)「インターネット調査の抱える課題 —実験調査から見えてきたこと—」,「よろん」日本世論調査協会報, 第101号, P79-94

³内閣府(2010)「世論調査におけるインターネット調査の活用可能性～国民生活に関する意識について～(平成21年6月)」

(4) 調査時期

平成 24 年 3 月 13 日～3 月 16 日

(5) 調査方法

専用ウェブサイト作成し、インターネットアンケートを実施。

(6) 調査実施機関: 株式会社インテージ

登録モニター数: 160.3 万人(2012 年 3 月末) 男性 45.8%、女性 54.2%

モニターの年齢構成

	男性	女性
10 代	2.2%	2.5%
20 代	17.2%	21.6%
30 代	29.0%	37.6%
40 代	28.2%	26.1%
50 代	15.1%	9.4%
60 代以上	8.3%	2.9%
合計	100%	100%

(7) 回収結果

① 性別・年齢階級別

性・年齢別回収結果

	実際の回収数		国勢調査人口比に基づく期待回答者数		期待回答者数との差		乖離率	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
10 代	356	322	365	347	-9	-25	-2.4%	-7.1%
20 代	738	687	816	793	-78	-106	-9.6%	-13.4%
30 代	1078	943	1076	1051	2	-108	0.2%	-10.3%
40 代	1122	986	989	979	133	7	13.5%	0.7%
50 代	1065	894	950	963	115	-69	12.1%	-7.2%
60 代	1217	1061	1037	1103	180	-42	17.3%	-3.8%

②労働力状態

労働力状態	産業大分類	期待回答者数	回収数	期待回答者数との差
就業者	農林業	203	113	-90
	漁業	20	5	-15
	鉱業	3	5	2
	建設業	592	622	30
	製造業	1,173	1,242	69
	電気・ガス・熱供給・水道業	31	32	1
	情報通信業	182	190	8
	運輸業	349	371	22
	卸・小売業	1,194	1,270	76
	金融・保険業	172	187	15
	不動産業	83	90	7
	飲食店、宿泊業	352	371	19
	医療、福祉	593	622	29
	教育、学習支援業	298	323	25
	複合サービス事業	76	55	-21
	サービス業(他に分類されないもの)	956	1,005	49
	公務(他に分類されないもの)	253	246	-7
分類不能の産業	121	133	12	
失業者		430	137	-293
専業主婦・主夫		1,680	883	-797
学生		782	467	-315
無職		580	598	18
分類不能*			1,502	1,502
合計		10,000	10,469	469

*)期待回答者数は、2010年国勢調査における15歳以上69歳以下人口における産業大分類別人口から計算した比率に基づく。客体を選定する際に用いた設問と、実際の調査の時点の設問に違いがあり、就業者以外のデータが乖離したところ、ここでは調査結果のデータを優先し、分類したため分類不能者が多く発生している。

2 調査結果の概要

(1) 主観的幸福度

① 現在の幸福感

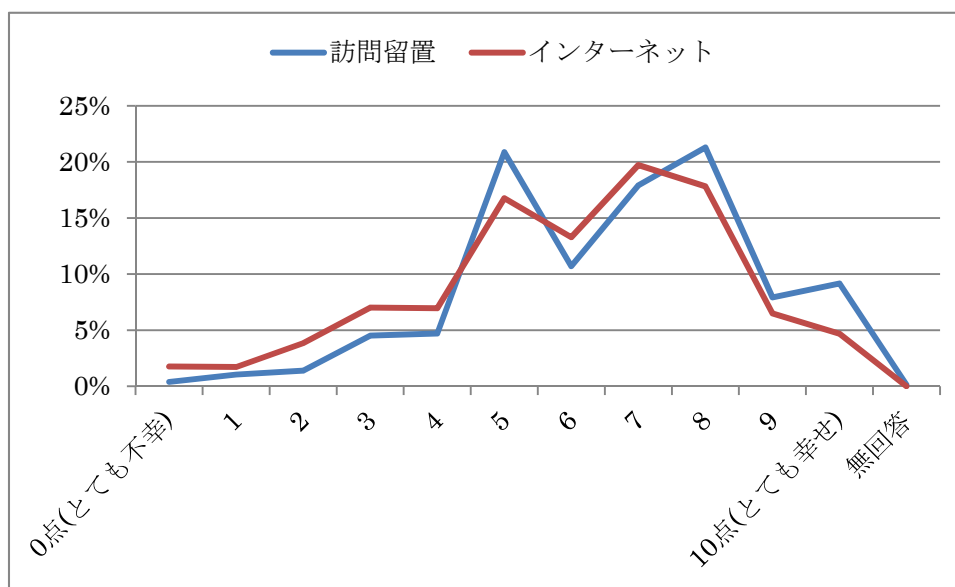
0点を「とても不幸せ」、10点を「とても幸せ」とする0点から10点のスケールで主観的な幸福感を聞いたところ、平均で約6.1という点になった。同じく24年3月に実施した訪問留置法による平均6.6と比較し、やや低い結果となっているが、22年12月に実施された若年層を対象とするインターネット調査も約6.2と低くなっており、標本の抽出方法や調査手法等の影響が大きいものと考えられる(表1)。

表1 他の調査との現在の幸福感の比較

調査(調査時点、調査手法)	現在の幸福感の平均値
生活の質に関する調査(平成24年3月、インターネット)	6.1
生活の質に関する調査(平成24年3月、訪問留置法)	6.6
若年層調査(平成22年12月、インターネット)	6.2

分布をみると(図1)、5と7の二つにピークがあり、訪問留置法と比較し、ピークがやや低く、さらに低い層の回答が多い。

図1 現在の幸福感の分布



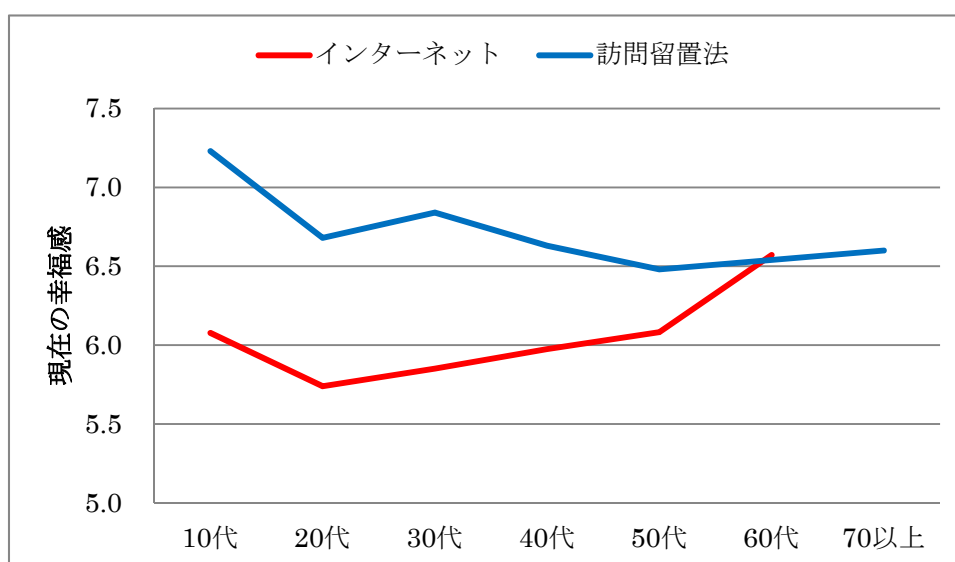
男女別には男性が 5.8、女性が 6.4 と女性の方が高い(表2)。男女差は訪問留置法と変わらない。

表2 男女別の現在の幸福感 平均点

	平均	標準偏差	回答者数	訪問留置法平均
男性	5.8	2.2	5576	6.3
女性	6.4	2.2	4893	6.9
全体	6.1	2.2	10469	6.6

年齢別には、10代から20代にかけて低下し、その後上昇するというJ字形となっている(図2)。

図2 年齢別の現在の幸福感



以上のような違いを統計学的に検定するために(以下、統計学的検定に関する詳細な結果については、添付資料の1を参照)、幸福感を従属変数として調査形態(訪問留置法とインターネット調査)x性別(男女)x年代別(10代~60代の6群)での分散分析(交差項あり)を行ったところ、調査方法の主効果、性別の主効果、年代の主効果ともに有意であったが、調査形態の主効果はかなり大きく、今回の調査の解釈上の注意を要することを示している。また、調査形態と年代の交互作用もあることから、年代によって調査形態の効果が異なるといえる。性別と年代の交互作用も有意であったが、調査形態と性別の交互作用は有意ではなかった。

就業状態別には(標本数はインターネット調査における分類不能を除く 8967 人)、完全失業者の主観的幸福感が4.6と非常に低い一方、専業主婦・主夫が6.8と高い(表3)。業種別には、農林業で幸福感と世帯所得がともに低いが、現在の幸福感を従属変数に、就業形態、年代、性別、世帯所得を独立変数とした分散分析、回帰分析の結果(添付資料の2. 参照)からは、業種別に有意な差は、教育、学習支援事業にのみ見られた。

表3 就業状態別の主観的幸福感、世帯所得(指数)、平均年齢(回答者、分類不能除く)

	主観的幸福感	世帯所得	年齢
失業者	4.6	3.8	41.2
専業主婦・主夫	6.8	6.0	50.3
学生	6.0	4.9	18.3
無職	6.2	4.5	60.6
有業者	5.9	6.3	44.0
農林業	5.4	5.3	45.1
(漁業)	6.6	4.8	48.8
(鉱業)	6.8	5.0	50.6
建設業	5.7	6.3	46.0
製造業	5.9	6.7	43.1
電気・ガス・熱供給・水道業	5.7	6.5	44.2
情報通信業	5.6	6.2	39.8
運輸業	5.7	5.9	44.3
卸売業	5.9	5.9	43.9
金融・保険業	6.3	7.4	44.0
不動産業	6.0	7.6	49.8
飲食店、宿泊業	5.7	5.3	41.8
医療、福祉	6.1	6.8	43.1
教育、学習支援業	6.4	6.9	45.2
複合サービス事業	6.1	6.8	44.2
サービス業(他に分類されないもの)	6.0	5.9	44.3
公務(他に分類されないもの)	6.2	7.3	44.8
分類不能の産業	5.9	5.6	47.5
合計	6.0	6.1	44.4

* 世帯所得指数は、世帯所得が100万円未満を1、100万円～200万円を2と数字を割り当てて計算した指数。但し、1000万円以上については、1000万円～1200万円を11、1200万円～1500万円を12、1500万円～2000万円を13、2000万円以上を14として計算した指数。

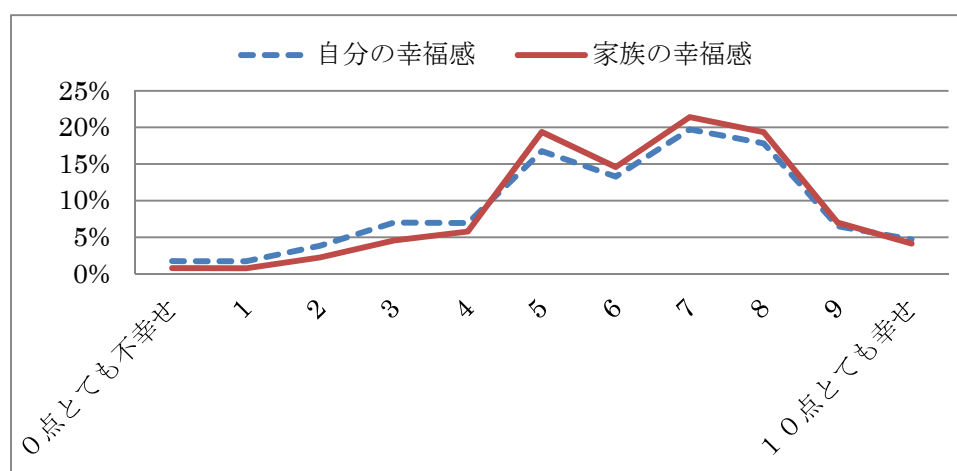
** 漁業と鉱業は標本数が極端に少ない。

②家族の幸福感

他の同居家族の幸福感を聞いたところ(同居家族のいる回答者数は9303人)、約6.4と、本人の幸福感よりやや高い点になった(図3)。半数以上の方が自分と同程度と回答している。男女別には、両方とも他の家族の方が高いと回答している(表4)。訪問留置法と比較すると、やや、自分と家族の幸福度格差が大きく判断されていた。図54、自分の幸福感の得点別に家族の幸福感がどの程度と回答しているかを見たものであるが、自分の幸福感がゼロの人は、平均して家族の幸福感が3ぐらいと回答しており、自分の幸福感が低い人が、家族の幸福感が自分よりやや高いと回答する傾向があることが分かる。格差(家族-本人)を年齢別にみると、30代で格差が最大となる逆U字形となっている(図5)。訪問留置法のデータ(69歳以下のみ)をあわせて、自分の幸福感を従属変数、独立変数に家族の幸福感×性別(男女)×年代別(10代~60代の6群)×調査形態(訪問留置法、インターネット)の分散分析を行うと(添付資料の3.参照)、家族の幸福感、性別、年代別のそれぞれが有意である上に、家族の幸福感と年代、家族の幸福感と調査手法、性別と年代、年代と調査手法の4つの交差項も有意となった。

自分の幸福感を幸福感格差、性別、年齢、調査手法により回帰分析すると(添付資料の4.参照)、説明変数すべてが有意で、幸福感格差の拡大は現在の幸福感の縮小につながるという結果であった。しかし、現在の幸福感と幸福感格差の関係から回帰式の誤差項に内生性があると考えられるので、幸福感格差を操作変数とする一般化積率法で推計したところ、幸福感格差の係数が-6を超える大きな負の値となり、(幸福感格差が1広がると現在の幸福感が6以上下がることを意味する)、自分の幸福感に与える世帯内格差の影響が非常に大きいという結果となった。操作変数の推計方法により相当程度推計値に幅があること、及び現在の式の精度が低いことが分かっており、解釈には慎重さが必要であるが、幸福感格差を詳細に分析する価値は高いことを示す結果である。ただし今回測定している幸福感格差は個人の認知(個人による自分と家族の幸福に対する判断)から生じており、実際の幸福感格差を検討するための世帯調査の必要性を示唆している。

図3 家族の幸福感と自分の幸福感の分布



(注:家族の幸福感の分布は、同居家族がいないという回答者を除いて集計した分布)

表4 男女別の家族の幸福感と自分の幸福感の差 平均点

	平均	標準偏差	回答者数
男性	0.21	1.39	4919
女性	0.17	1.46	4384
全体	0.19	1.42	9303

図4 自分の幸福感と家族の幸福感の関係

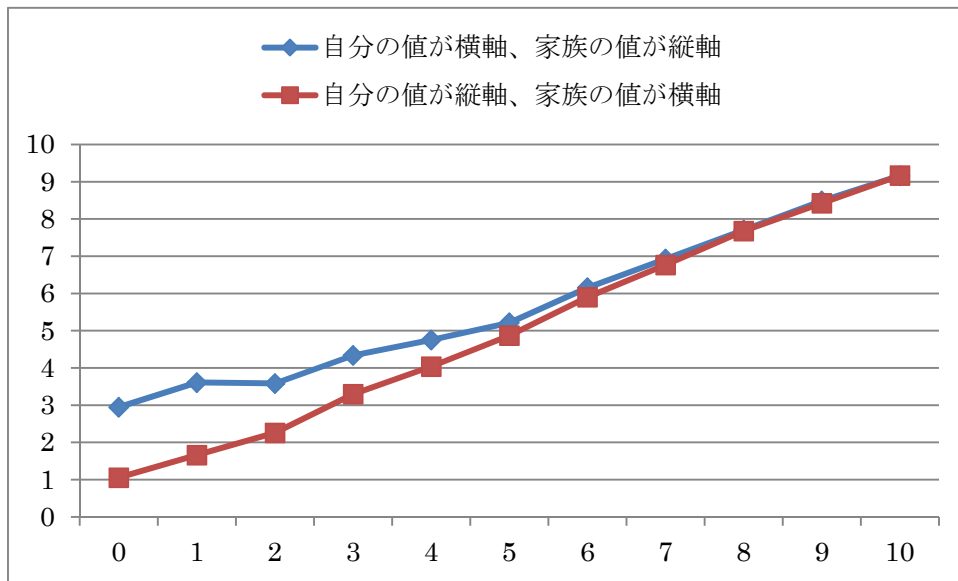
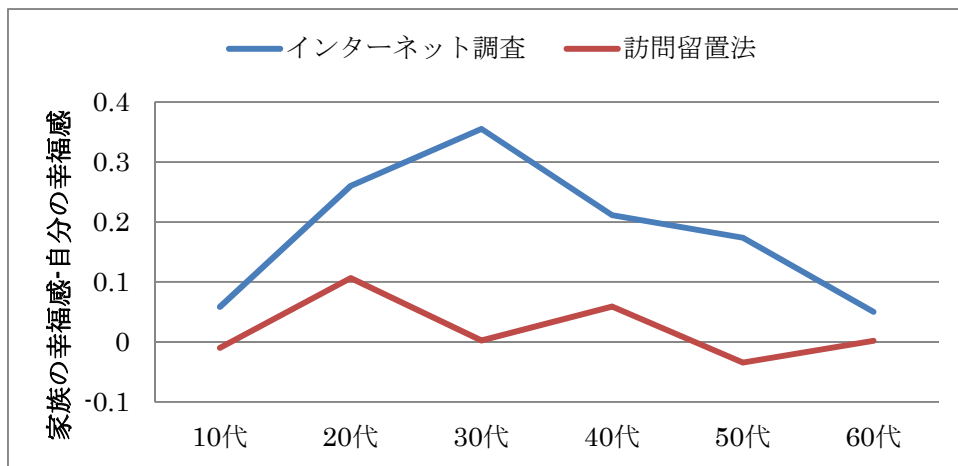


図5 年齢別家族の幸福感と自分の幸福感の差



③理想の幸福感

0点を不幸せだけを感じている状態、5点を幸せと不幸せが半々、10点を幸せだけを感じている状態として理想的な状態を聞いたところ、約7.2と現在の幸福感より1.1ポイント高い結果となった(表5、図6)。インターネット調査では、理想とする幸福感は、年代を追うにつれ、上昇しており、訪問留置法とかなり異なる結果となっている(図7)年代別現在の幸福と理想の幸福の相関係数は、インターネット調査で10代0.36; 20代0.44; 30代0.43; 40代0.43; 50代0.48; 60代0.46(いずれも1%水準で有意)であった。現在の幸福感を従属変数に、調査方法(訪問留置法とインターネット調査)×性別(男女)×年代別(10代~60代の6群)での分散分析を行ったところ(添付資料の5.参照)、主効果としては理想とする幸福感、年代、調査形態が有意であった一方、男女差は有意ではなかった。二次の交互作用では、理想の幸福感と性別、理想の幸福感と年代、理想の幸福感と調査方法が有意であった。三次の交互作用も、性別・年齢・調査方法は有意であった。

表5 理想の幸福感と現在の幸福感 平均点

	インターネット調査			訪問留置法		
	理想	現在	差	理想	現在	差
男性	7.0	5.8	1.2	7.0	6.3	0.7
女性	7.4	6.4	1.1	7.5	6.9	0.5
全体	7.2	6.1	1.1	7.2	6.6	0.6

図6 理想の幸福感と現在の幸福感の分布

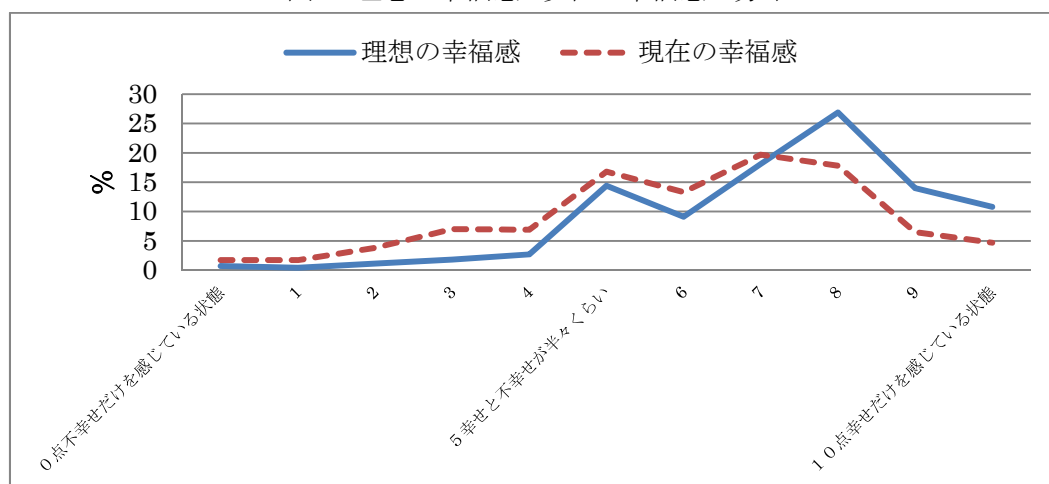
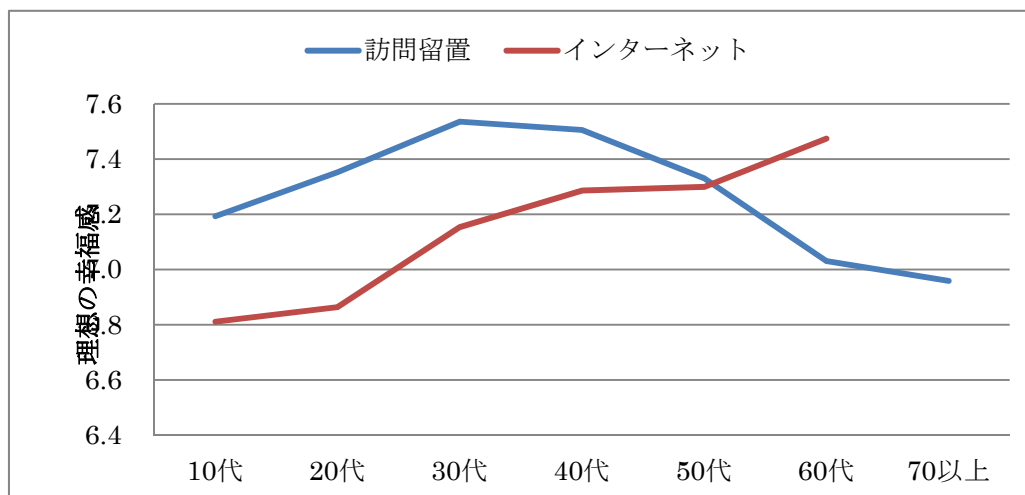


図7 年齢別の理想の幸福感



自分の幸福感を、理想と現実の幸福感の差、性別、年齢、調査手法により回帰分析すると(添付資料の6. 参照)、説明変数すべてが有意で、理想と現実の差の拡大は現在の幸福感の縮小と関連するという結果であった。しかし、現在の幸福感と理想の幸福感格差の関係から回帰式の誤差項に内生性があると考えられるので、理想と現実の幸福感格差を操作変数とする一般化積率法で推計したところ、幸福感差の係数が-1.86 と大きな負の値となり、(幸福感差が1広がると現在の幸福感が2近く下がることを意味する)、自分の幸福感に与える理想とのギャップの影響がかなり大きい結果となった。家庭内の幸福感格差同様、操作変数の推計方法により相当程度推計値に幅があること、及び現在の式の精度が低いことが分かっており、解釈には慎重さが必要であるが、家庭内の格差同様、理想の幸福感を詳細に分析する価値も高いこと示す結果である。

④将来の幸福感

5年後の幸福感を現在と同じ場合に0とし、今より幸せの場合最大プラス5、今より不幸せの場合最小マイナス5で聞いたところ、平均は0.6となった。将来の幸福感を従属変数として調査形態(訪問留置法とインターネット調査)x性別(男女)x年代別(10代~60代の6群)での分散分析を行ったところ(添付資料の7.参照)、性別の主効果は有意であった調査形態との二次の交互作用はなく、男女差は調査方法によらない)、女性の方が高い(表6はインターネット調査の値)。また、将来の幸福度の判断には訪問留置法とインターネット調査との差はみられなかった(図8)。年代の主効果は有意であり、年代と調査形態との二次の交互作用も見られた。インターネット調査では10代、20代が約1ポイントのプラスを回答し、年齢に応じてプラス幅は縮小している(図9)。訪問留置法と比較すると、年齢の影響が小さい。

表6 5年後の幸福感(現在と比較して)平均点

	インターネット	訪問留置
男性	0.5	0.3
女性	0.8	0.5
全体	0.6	0.4

図8 5年後幸福感の方向性の回答者の分布

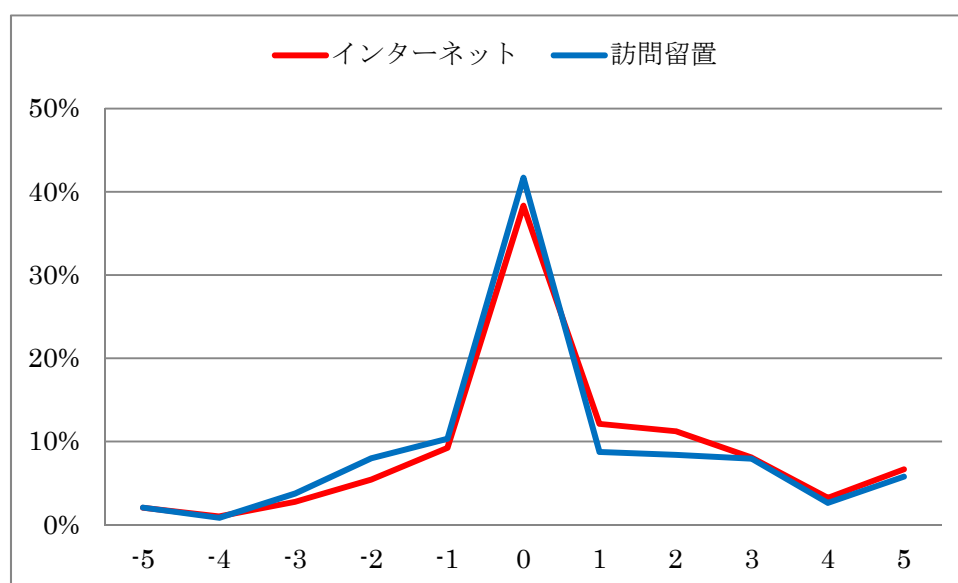
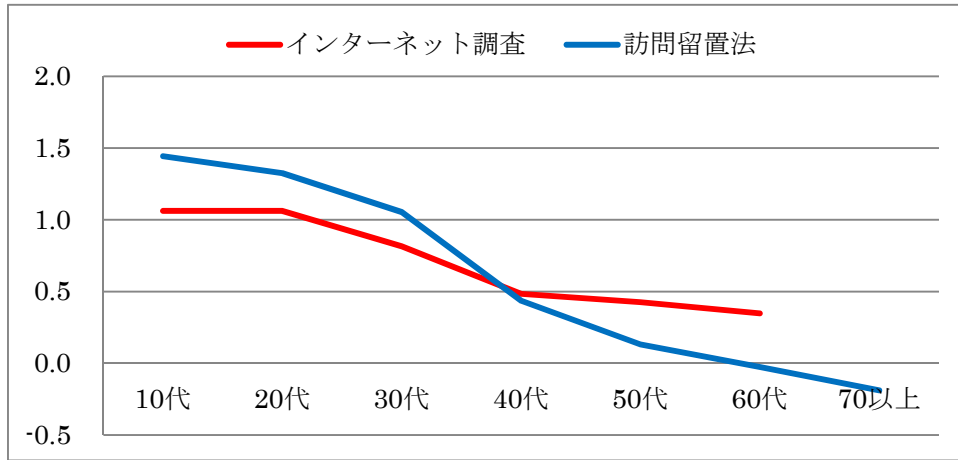
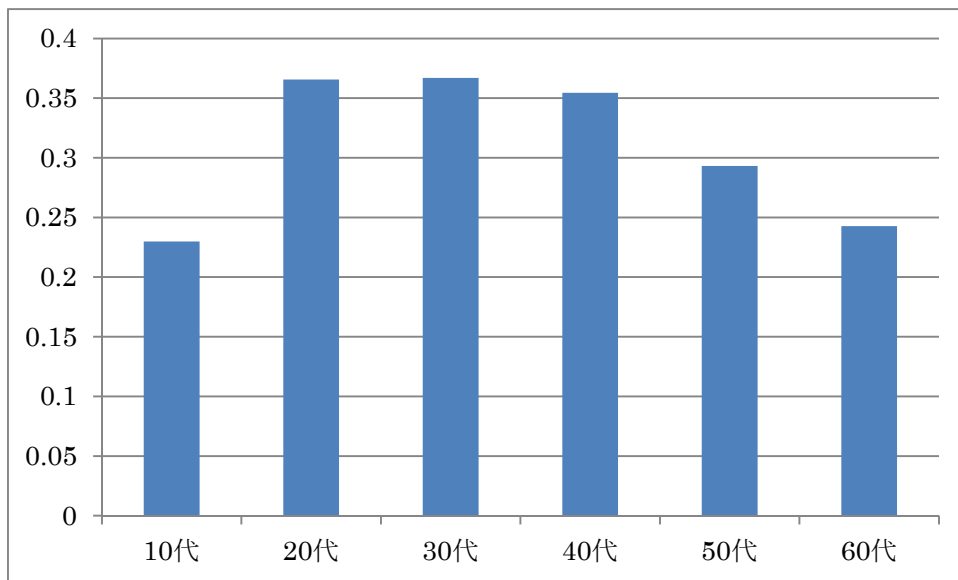


図9 年齢別の幸福感の方向性(縦軸は上昇幅)



将来の幸福感と現在の幸福感の相関係数は、インターネット調査で10代0.23;20代、30代とも0.37;40代0.35;50代0.29;60代0.24となっており(いずれも1%水準で有意)、現在の幸福感が高い方がやや将来の判断も肯定的な傾向があることがわかる。現在の幸福感を従属変数に、調査形態(訪問留置法とインターネット調査)、性別(男女)、年代別(10代~60代の6群)を独立変数とする回帰分析でもこの点は確認できる。さらに将来の幸福感を操作変数とする一般化積率法による推計では、将来の幸福感が現在の幸福感とより大きな相関関係にあることが示されている(添付資料8)。

図10 将来の幸福感と現在の幸福感の相関係数



⑤幸福を判断する際に重視した事項

幸福を判断する際に重視した項目を聞いたところ(いくつでも選択可能)、家計の状況が最も多く、次いで健康、家族関係となった(図11)。項目ごとに選択した人と、選択しなかった人の幸福感を比較すると、家計の状況や就業状況を選ぶ人の幸福感は低く、家族関係、健康状況や自由な時間を選ぶ人は高いという差があり、これはいずれも統計的に有意であった。(仕事や趣味、社会貢献のみ5%水準、他は1%水準で有意であった(その他は除く)(図12)。

図11 幸福を判断する際重視した事項

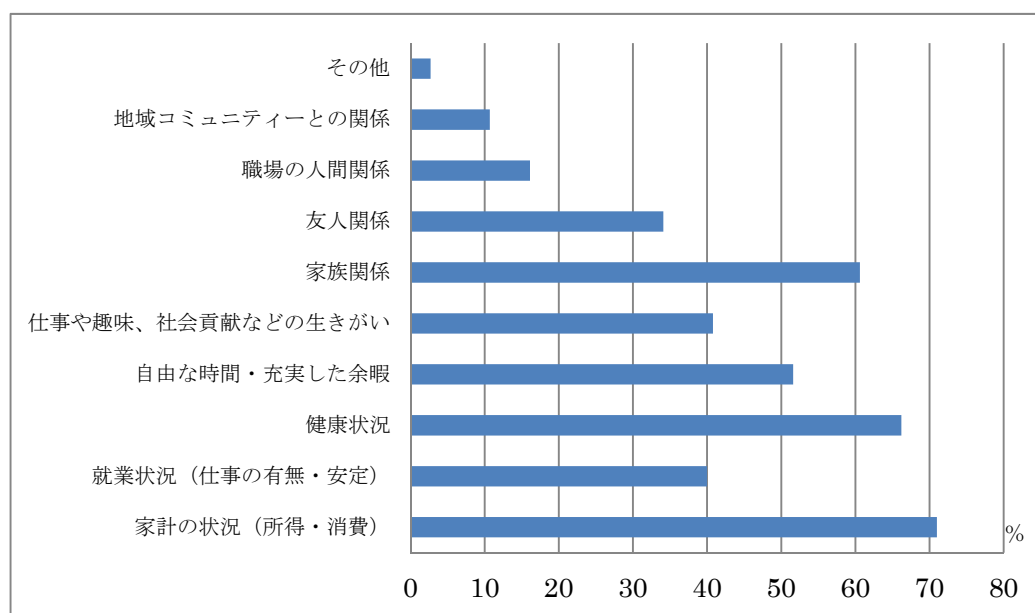
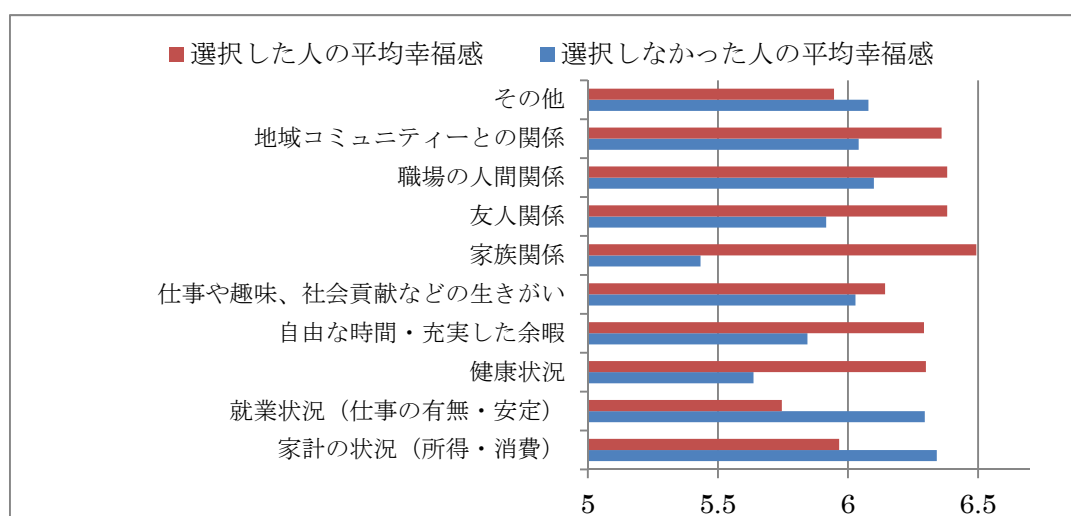


図12 項目の選択と現在の幸福感の関係



⑥生活満足度

0 から 10 点という主観的幸福感等と同じスケールで生活満足度を聞いたところ、高い点の回答がやや少なく、平均点は約 5.7 となり、幸福感よりも低く判断されていた。幸福感と生活満足度の平均値について、t 検定を行ったところ、平均値は有意に異なっていた(添付資料の9.)。インターネット調査の方が、その差も大きい。年代別には、インターネット調査では訪問留置法と比較し、若年層の生活満足度が低く、高齢層は高い(図 13)。一方で、インターネット調査における生活満足度への回答の分布は、訪問留置法における生活満足度への回答の分布と類似しているだけでなく、インターネット調査における現在の幸福感とも似ている(図 14)。幸福感と生活満足度の相関係数はインターネット調査で 10 代 0.71; 20 代 0.75; 30 代 0.76; 40 代 0.79; 50 代 0.79; 60 代 0.75 とかなり高いものであった(いずれも 1% 水準で有意)。

表 7 生活満足度

	インターネット	訪問留置
男性	5.4	5.6
女性	6.0	6.3
全体	5.7	6.0

図 13 年代別・調査別の生活満足度

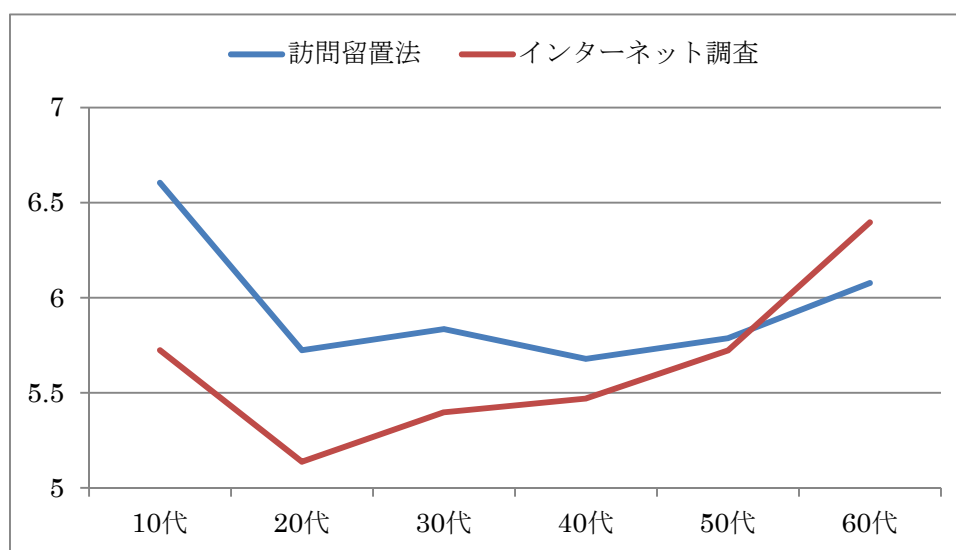
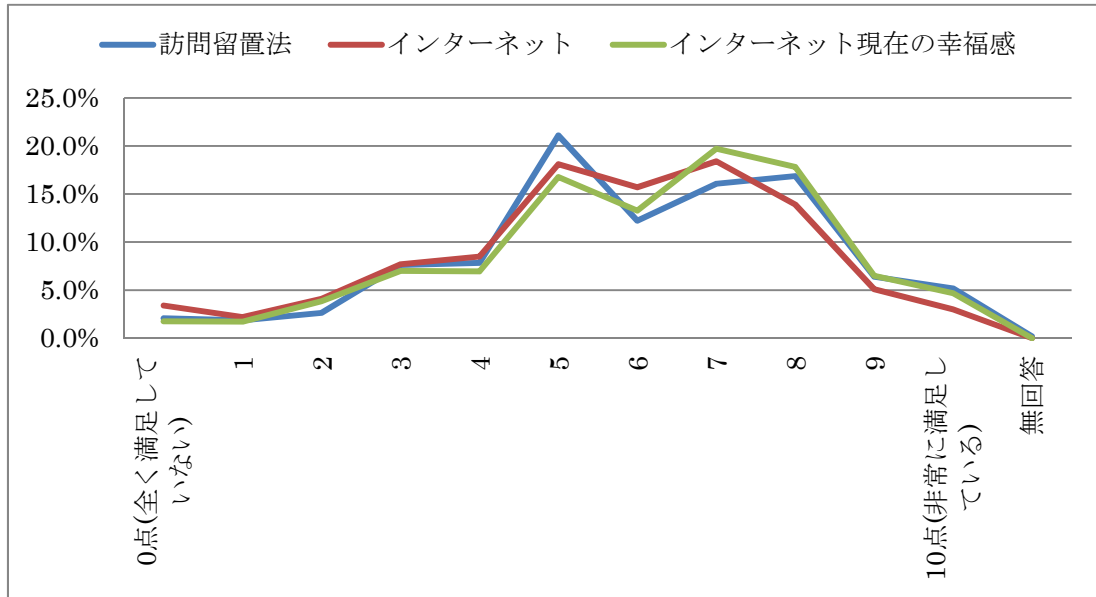


図 14 現在の生活満足度と幸福感の回答者分布



⑦ 協調的幸福感

協調的関係性、穏やかさ、人並み感等を聞く9つの設問項目を0点から10点のスケールで聞いたところ、全体の平均は5.4ポイントだった。「平凡だが安定した日々を過ごしている」という項目でポイントが高く、「大きな悩みごとはない」という項目で、ポイントが低いという結果となっている。男女別には他の幸福感同様、女性の方が得点が高い(表8)。

表8 協調的幸福感 平均点

	男性	女性	全体
自分だけでなく、身近な周りの人も楽しい気持ちでいると思う	5.1	5.6	5.3
大きな悩みごとはない	4.8	5.0	4.9
周りの人たちと同じくらいうまくいっている	4.9	5.4	5.1
周りの人に認められていると感じる	4.9	5.3	5.1
平凡だが安定した日々を過ごしている	5.7	6.3	6.0
周りの人たちと同じくらい幸せだと思う	5.1	5.7	5.3
大切な人を幸せにしていると思う	5.2	5.8	5.5
周りの人並みの生活は手に入れている自信がある	5.2	5.7	5.4
人に迷惑をかけずに自分のやりたいことができている	5.6	6.0	5.8
協調的幸福感	5.1	5.6	5.4

質問項目ごとの回答の割合は表9のようになった。主観的幸福感と比較し、より5と回答する人の割合が多い。

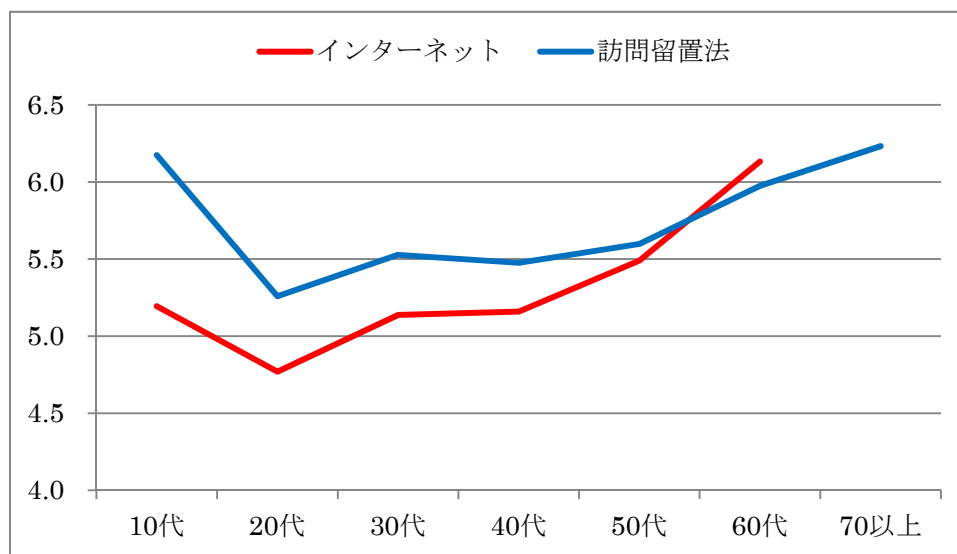
表9 協調的幸福感の回答者の分布(%)

	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
自分だけでなく、身近な周りの人も楽しい気持ちでいると思う	3.5	1.6	3.6	7.6	8.5	33.0	14.6	14.2	9.0	2.2	2.4
大きな悩みごとはない	10.1	4.0	7.9	11.1	8.8	16.8	9.8	11.2	10.9	4.7	4.7
周りの人たちと同じくらいうまくいっている	5.4	2.8	6.0	8.5	9.5	27.2	11.7	13.2	9.7	3.4	2.5
周りの人に認められていると感じる	5.3	2.5	5.5	8.0	8.8	29.4	13.2	12.6	9.4	3.2	2.1
平凡だが安定した日々を過ごしている	3.3	2.2	4.2	5.8	7.8	19.1	12.9	14.9	14.8	7.3	7.8
周りの人たちと同じくらい幸せだと思う	5.1	2.9	5.3	7.6	8.4	25.7	11.8	13.2	11.8	4.5	4.0
大切な人を幸せにしていると思う	6.2	2.8	4.8	6.3	8.1	23.1	12.1	13.1	12.8	6.3	4.5
周りの人並みの生活は手に入れている自信がある	6.0	3.1	5.1	7.0	9.1	22.3	11.9	12.4	12.1	5.5	5.6
人に迷惑をかけずに自分のやりたいことができている	4.9	2.5	3.7	5.9	7.4	21.5	13.2	14.2	13.4	7.5	5.9
協調的幸福感	1.7	2.7	4.8	7.2	12.2	24.3	17.3	14.9	10.1	3.7	1.2

*協調的幸福感とは、上記の9項目すべての平均値として計算。個人レベルで計算した上で、四捨五入して0から10のスケールに当てはめている。

協調的幸福感を従属変数、調査形態(訪問留置法とインターネット調査)x性別(男女)x年代別(10代~60代の6群)での分散分析を行ったところ、調査形態の主効果が1%水準で有意であり、訪問留置法でより得点が高かった(訪問留置法の平均は5.67)。年齢別には、訪問留置法と同じく20代を底にするJ字形であるが、インターネット調査の方が若年層の水準が低い(図15)というように、年代と調査形態での交互作用が有意であった。

図 15 年齢別の協調的幸福感



なお、ここまで集計してきた各種の幸福感相互の相関係数(インターネット調査のみ)は以下の表 10 の通りである。全て1%レベルで有意であるが、協調的幸福感は、現在の幸福感より生活満足度との相関係数が高い。

表 10 幸福感相互の相関係数

	1	2	3	4	5	6
1 現在の幸福感	1.00					
2 家族の幸福感	0.77	1.00				
3 理想の幸福感	0.44	0.47	1.00			
4 将来の幸福感	0.30	0.29	0.22	1.00		
5 生活満足度	0.76	0.68	0.41	0.27	1.00	
6 協調的幸福感	0.69	0.65	0.38	0.29	0.77	1.00

⑧昨日の感情経験

昨日に経験した「幸福感」、「満足感」という肯定的な感情、及び「怒り」、「悲しみ」という否定的な感情について 0 点から 10 点のスケールで聞いたところ、肯定的な感情については昨日経験した「幸せ」、「満足」とも 5.5 という結果となった(表 11)。昨日経験した「幸せ」、「満足」の回答にほとんど差がなく、同様のものを捉えていると考えられる(相関係数は 0.92)。「怒り」と「悲しみ」はそれよりは弁別性があり、相関係数は=0.65 であった。幸せと満足の平均を肯定的感情得点、怒りと悲しみの平均を否定的感情得点として、これらを従属変数とし、性別(男女)x年代別(10代~60代の6群)での分散分析・回帰分析を行ったところ(添付資料11.)、否定的な感情は、肯定的な感情より経験しない人が多く(表 12)、その傾向は特に女性においてみられた。年代別の効果も有意であり、肯定的な感情経験は20代を底にしたJ字形であるのに対し、否定的な感情経験は60代までは変動せず、60代でのみ下がる傾向にあった。怒りと悲しみを別にみると、怒りは60代を除いて同じであり、悲しみが年齢に応じて下がっていた(図 16)。肯定的な感情経験の平均値から否定的な感情経験の平均値を引いた感情経験バランスをみると、平均値は 2.1 と、肯定的な経験の方が多いという結果になっている。男女別には女性のほうがやや肯定的で、年齢別には、20代を底とするJ字形となっている(図 17)。幸福感との相関を見たところ、肯定的感情経験とは10代 0.54; 20代 0.65; 30代 0.65; 40代 0.69; 50代 0.67; 60代 0.62)、否定的感情経験とは10代-0.16; 20代 0.19; 30代-0.24; 40代-0.24; 50代-0.13; 60代-0.27)、感情バランスとの相関は10代 0.48; 20代 0.62; 30代 0.60; 40代 0.62; 50代 0.60; 60代 0.54)となっていた(いずれも1%水準で有意)。幸福感と昨日の肯定的感情経験の相関は高いものであったといえる。

表 11 昨日の感情経験 平均点

	幸せ	満足	怒り	悲しみ
男性	5.1	5.2	3.7	3.3
女性	5.9	5.9	3.5	3.2
合計	5.5	5.5	3.6	3.3

表 12 昨日の感情経験の点の回答者分布 (%)

	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
全体として、あなたは昨日どの程度幸せに感じましたか	5.4	2.5	4.5	7.3	7.0	23.8	13.1	14.5	12.2	4.8	5.0
全体として、あなたは昨日どの程度満足を感じましたか	5.1	2.4	4.6	7.0	7.3	23.2	13.6	14.1	12.7	5.0	4.9
全体として、あなたは昨日どの程度怒りを感じましたか	15.5	11.8	12.9	10.9	8.6	17.9	8.2	6.1	4.4	1.4	2.4
全体として、あなたは昨日どの程度悲しみを感じましたか	21.3	11.9	12.0	10.2	8.0	18.1	6.3	4.8	3.4	1.5	2.4

図 16 年齢別昨日の感情経験の平均点

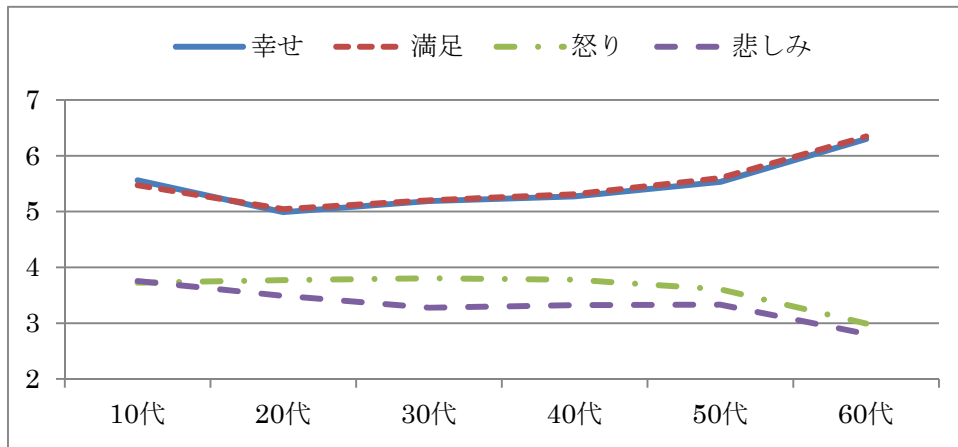
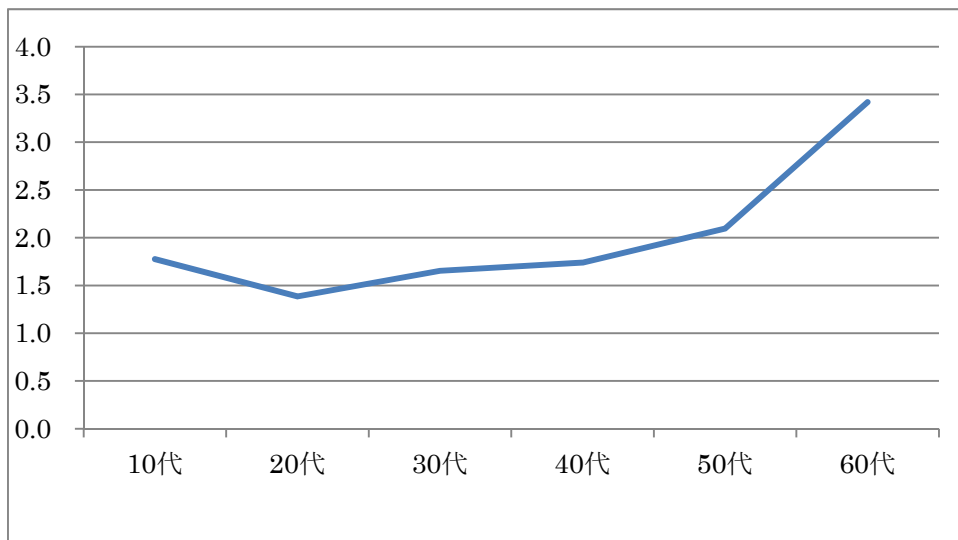


表 13 昨日の感情経験バランス(肯定的・否定的経験の平均点の差)

男性	1.7
女性	2.6
全体	2.1

図 17 年齢別昨日の感情経験バランス



⑨過去数週間の感情経験

様々な感情について過去数週間の経験頻度を聞いたところ、肯定的な感情の中では「穏やかさ」、「共感・思いやり」、「やさしさ」などが「しばしば」経験されている一方、否定的な感情としては、「ストレス」、「心配」、「怒り」の経験頻度が高い(インターネット調査の集計は表14)。「全くない」を0点、「まれに」を1点、「ときどき」を2点、「しばしば」を3点として、感情別に指数化し、訪問留置法の調査データとあわせて因子分析(主成分因子、直行回転)を行ったところ(添付資料の12)、2因子解が得られた(因子負荷量の高い順に、否定的感情:失望、悲しみ、負い目、恐怖、罪悪感、心配、恥、ストレス、怒り、欲求不満、嫉妬、利己、;肯定的感情:やさしさ、共感・思いやり、親しみ、寛容さ、穏やかさ、心のやすらぎ、充実感、満足感、誇り;いずれも因子負荷量.37-81)。その上で肯定的な経験の平均値と否定的な経験の平均値を算出した。感情(肯定、否定それぞれ)を従属変数に、調査形態(インターネット、訪問留置)x性別(男女)x年代別(10代~60代の6群)での分散分析・回帰分析を行ったところ、分散分析によれば、肯定的経験では調査形態、性別、年代それぞれの主効果が有意であり、回帰分析と組み合わせると、訪問留置法、女性、高齢層が経験頻度が高いという結果となっている。否定的経験では、分散分析では性別と調査形態の主効果は有意ではなく、性別x年齢、調査形態x年齢の交差項が有意であった。回帰分析では、訪問留置法、男性、若年層が高いという結果になっている。感情経験バランスを計算すると、全体では、0.5と肯定的経験が否定的経験を上回っている(表15)。男女別には、過去数週間の感情経験バランスは女性の方が男性より高い。また、訪問留置法と比較し、平均値ではほとんど差がない。年齢別には、20代を底とするJ字形であり、訪問留置法と比較すると、若年層が低い(図19)。幸福感と感情バランスの相関係数については、インターネット調査では10代0.48;20代0.61;30代0.59;40代0.61;50代0.59;60代0.81と高いものであった。

表14 過去数週間の感情経験の回答者の分布 (%)

	しばしば	ときどき	まれに	全くない
誇り	25.6	42.9	26.9	4.6
穏やかさ	4.9	24.8	46.1	24.1
共感・思いやり	4.2	25.3	51.0	19.5
寛容さ	6.2	31.1	47.5	15.3
心のやすらぎ	7.4	29.0	44.6	19.1
やさしさ	4.2	25.0	51.7	19.2
親しみ	5.0	25.7	49.8	19.5
充実感	9.9	32.2	41.8	16.1
満足感	10.3	32.6	41.7	15.4
負い目	23.1	44.0	21.3	11.7
失望	27.9	41.3	19.5	11.4
悲しみ	18.4	48.1	24.6	8.8
ストレス	7.9	33.6	32.1	26.5
恐怖	37.7	40.5	16.1	5.7
心配	7.4	38.7	34.2	19.7
恥	28.4	47.1	19.1	5.4

怒り	13.6	44.8	30.3	11.2
罪悪感	34.3	42.9	17.0	5.7
利己	24.3	51.0	20.7	4.0
嫉妬	39.4	41.0	15.2	4.4
欲求不満	22.8	43.7	23.3	10.3

表 15 過去数週間の感情経験バランス

	インターネット調査			訪問留置法		
	肯定的経験	否定的経験	バランス	肯定的経験	否定的経験	バランス
男性	1.6	1.2	0.4	1.8	1.2	0.6
女性	1.8	1.2	0.6	1.9	1.1	0.8
全体	1.7	1.2	0.5	1.8	1.2	0.7

図 18 感情経験の調査による違い(70代のデータを除いたもの)

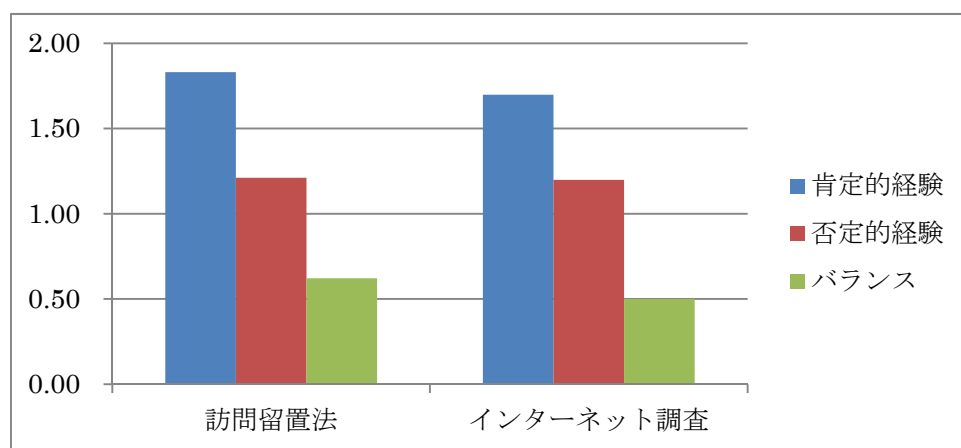
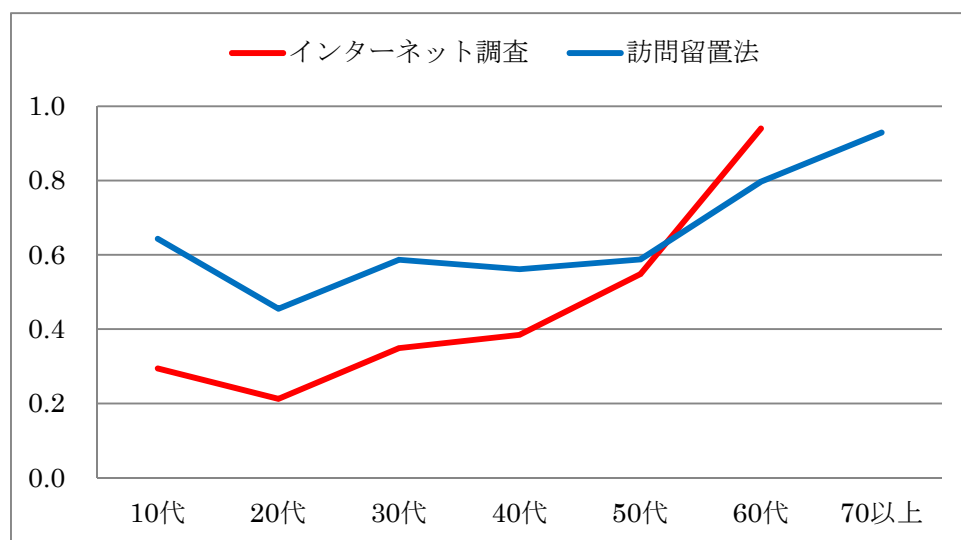


図 19 過去数週間の感情経験バランス



⑩幸福とかかわる様々な心の働き

前向きさや楽観、生き方の自由度、精神的回復力、自分の行動の価値、達成感などの幸福とかかわる様々な心の働きについて、0点から10点のスケールで聞いたところ、「悪いことが起きても概して時間がかかれば正常な水準に復帰する」という問への回答は比較的ポイントが高い一方、毎日の達成感はポイントが低いという結果になった(表16)。男女別には、女性が高く、男性が低い。年齢別には、「自由に生き方を決められる」以外はJ字形が観察される(図15)。OECDはこれらの調査項目をエウダイモニア(ギリシャの哲学者アリストテレスが定義した最高善としての幸福からとられた言葉であり、価値観を強く反映する幸福を指す)を捉える指標として、現在の幸福感・生活満足度・感情経験とは独立した項目として各国における調査を推奨しようとしている。他の幸福感・感情経験と合わせて因子分析を行うと、エウダイモニアの質問項目の因子負荷量が多い因子は現在の幸福感、生活満足度、感情経験とは別に存在し、エウダイモニアの質問項目が捉えているものが幸福感や感情経験から、ある程度独立していると考えられる(添付資料の14)。

表16 幸福とかかわる様々な心の働き 平均点

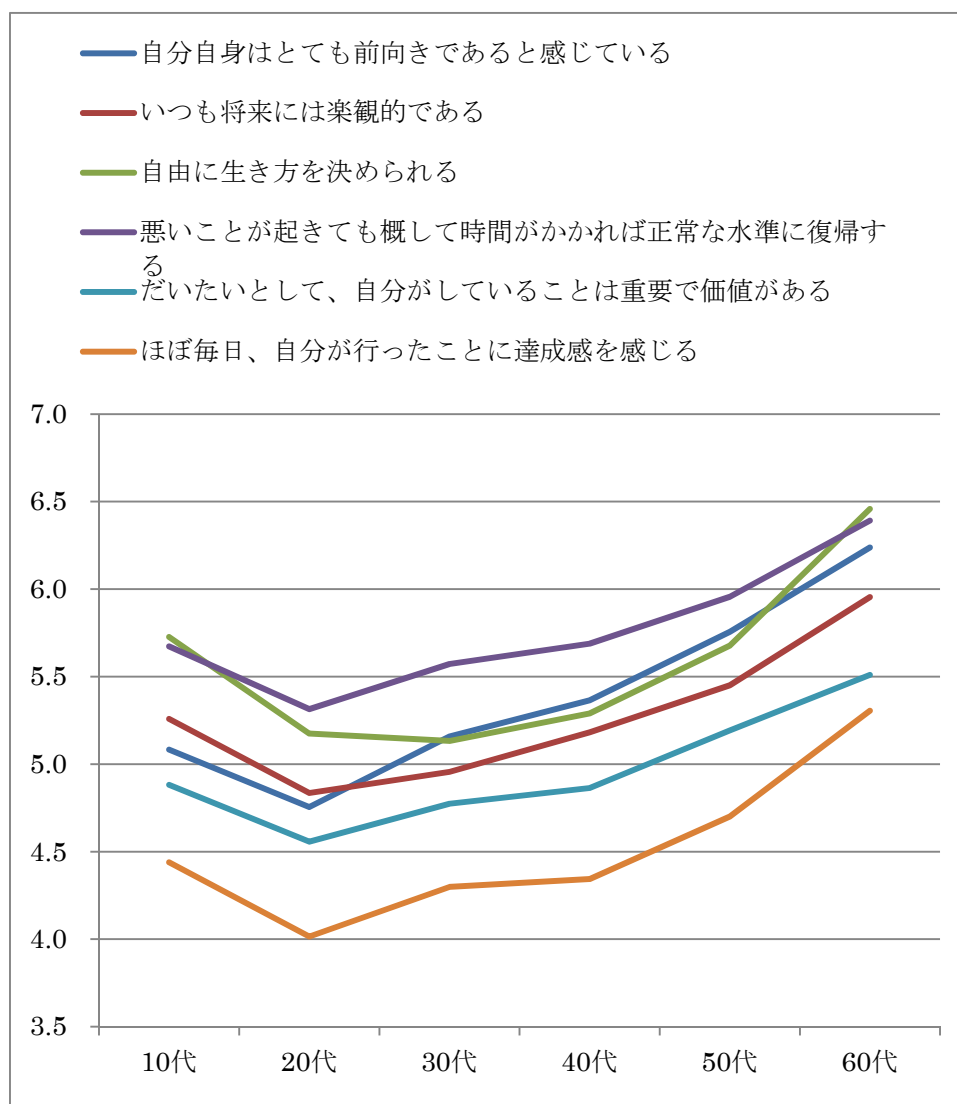
	男性	女性	全体
自分自身はとて前向きであると感じている	5.3	5.7	5.5
いつも将来には楽観的である	5.2	5.4	5.3
自由に生き方を決められる	5.5	5.7	5.6
悪いことが起きても概して時間がかかれば正常な水準に復帰する	5.7	6.0	5.8
だいたいとして、自分がしていることは重要で価値がある	4.9	5.1	5.0
ほぼ毎日、自分が行ったことに達成感を感じる	4.5	4.7	4.6

表17 幸福とかかわる様々な心の働きの回答者分布 (%)

ポイント	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
自分自身はとて前向きであると感じている	4.0	2.7	5.3	8.9	8.8	21.6	13.6	13.3	10.8	4.6	6.3
いつも将来には楽観的である	4.8	3.1	5.8	8.9	10.1	20.6	14.4	13.0	10.4	4.2	4.9
自由に生き方を決められる	3.9	2.7	5.0	7.2	8.3	22.2	14.4	13.4	11.3	5.5	6.2
悪いことが起きても概して時間がかかれば正常な水準に復帰する	2.9	2.1	3.8	5.8	7.5	22.9	15.6	15.7	12.4	5.6	5.7

だいたいとして、自分がしていることは重要で価値がある	4.9	3.2	6.1	8.6	10.1	29.2	13.9	10.7	7.4	3.0	2.9
ほぼ毎日、自分が行ったことに達成感を感じる	6.0	5.7	7.9	11.1	12.2	25.3	12.5	9.3	5.8	2.3	2.1

図 20 年齢別の幸福とかかわる心の働き 年齢別



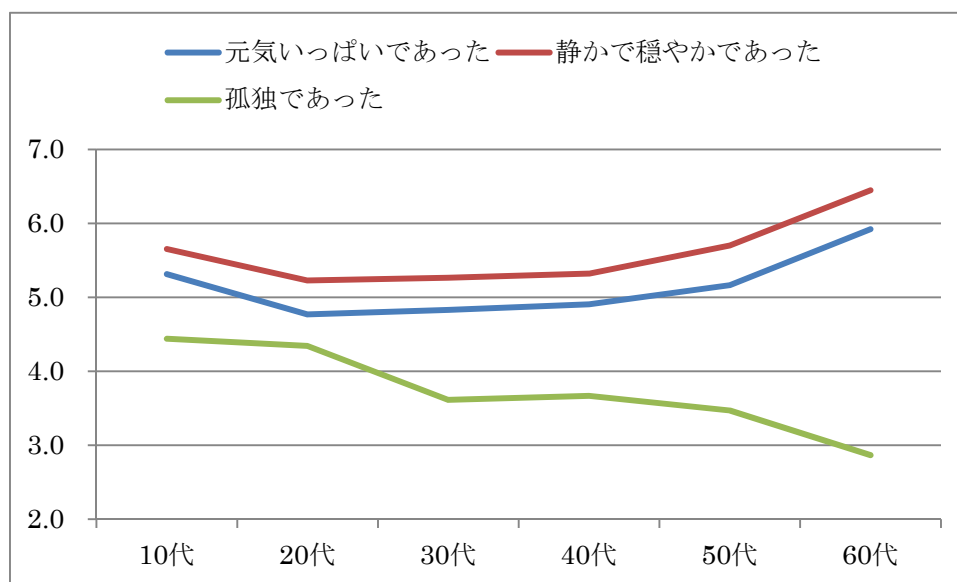
⑪ここ一週間の気持ち

ここ一週間に元気さ、穏やかさ、孤独感という気持ちをどの程度経験したか聞いたところ、「元気いっぱいであった」、「穏やかであった」という肯定的な感情経験の方が、否定的な感情経験である「孤独」と比較し、回答者の得点が高いという結果となった。本項目も OECD がエウダイモニアの一側面として測定することを推奨しようとしているものである。添付資料の 14 の因子分析から分かるように、「孤独」は否定的感情経験と相関が高い。年齢別には、肯定的な経験は、他の項目同様、20代が底になっているが、否定的な感情である孤独感については、10代が最も平均点が高い。ただし年齢の違いはサンプルの代表性の歪みに依存する可能性があり、今後さらなる検討が必要である。

表 18 ここ一週間の気持ち

	元気いっぱいであった	静かで穏やかであった	孤独であった
男性	5.0	5.5	4.0
女性	5.4	5.7	3.2
全体	5.2	5.6	3.6

図 21 ここ一週間の気持ち 年齢別



(2) 様々な主観的指標

⑫生活の局面別の満足度

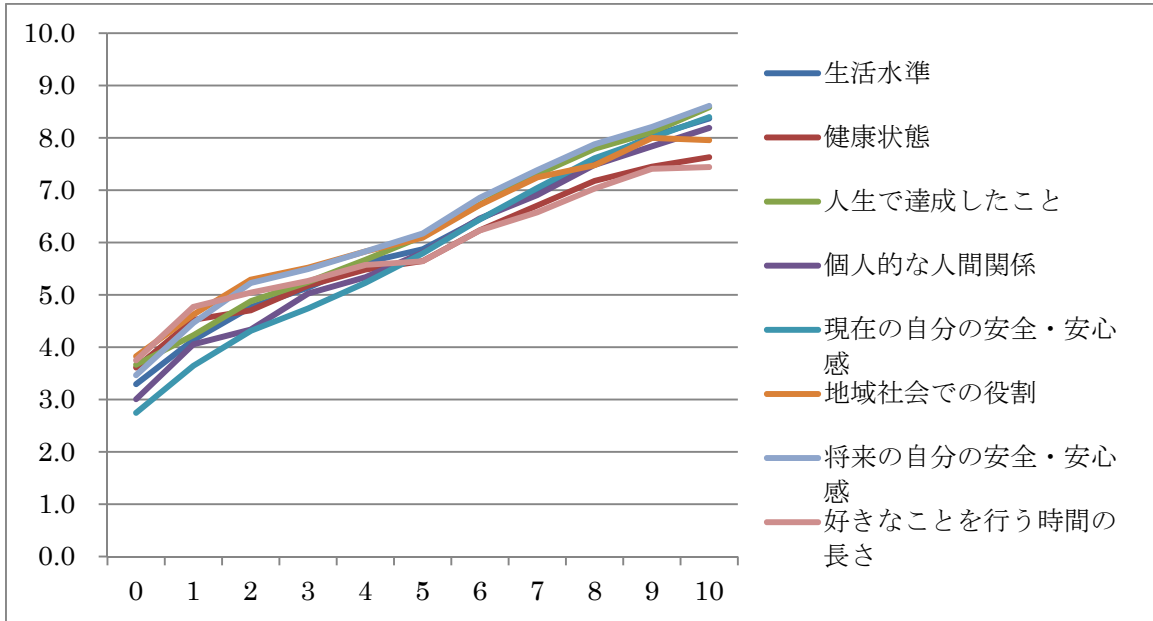
生活の各局面における満足度を0点から10点のスケールで聞いたところ、相対的には「好きなことを行う時間」、「健康状態」で満足度が高い一方、「将来のあなたの安全・安心」、「人生で達成したこと」、「地域社会での役割」で低かった（表19）。局面別の満足度と現在の幸福感の平均点との関連を見ると、満足度が上昇するにつれ、幸福感が改善する様子が見え、密接な関係の存在が示唆される（図22）。特に、「現在のあなたの安全・安心感」との相関関係が強い。

表19 生活の局面別の満足度

	男性			女性			全体			
	平均	標準偏差	回答者数	平均	標準偏差	回答者数	平均	標準偏差	回答者数	相関係数*
生活水準	4.9	2.5	5576	5.4	2.5	4893	5.2	2.6	10469	0.57
健康状態	5.4	2.5	5576	5.8	2.5	4893	5.6	2.5	10469	0.45
人生で達成したこと	4.6	2.4	5576	4.9	2.4	4893	4.7	2.4	10469	0.54
個人的な人間関係	5.1	2.3	5576	5.7	2.4	4893	5.4	2.4	10469	0.54
現在のあなたの安全安心感	5.2	2.5	5576	5.7	2.5	4893	5.4	2.5	10469	0.63
地域社会での役割	4.5	2.3	5576	4.8	2.3	4893	4.7	2.3	10469	0.43
将来のあなたの安全安心感	4.4	2.5	5576	4.7	2.6	4893	4.5	2.5	10469	0.56
好きなことを行う時間の長さ	5.4	2.6	5576	5.9	2.7	4893	5.6	2.7	10469	0.42

*現在の幸福との相関係数

図 22 局面別の満足度(横軸)と現在の幸福感の関係



因子分析を通じて、質問項目を3つに分類し、年代との関係を示したのが以下の3つの図である。満足度が低い人生で達成したこと、地域社会での役割、将来の安全安心は10代を除くと年齢が上がるほど上昇している。一方、健康状態、生活水準、好きなことを行う時間の長さは、U字形となっており、現役世代の満足度が低い。個人的な人間関係と現在の安全安心はW字形となっている。

図 23 ①年代別の局面別の満足度(人生で達成したこと、地域社会での役割、将来の安全安心)

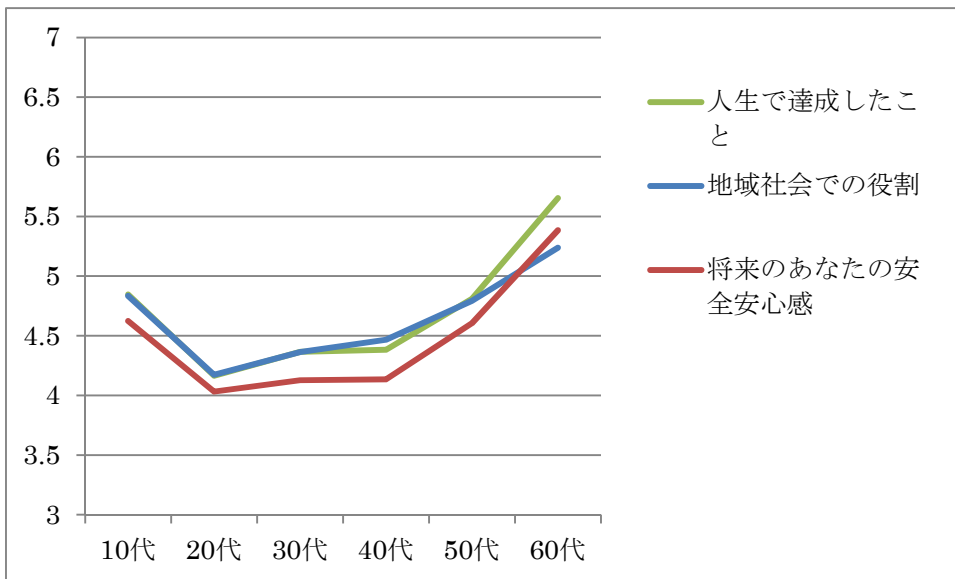


図 23 ②年代別の局面別の満足度(生活水準、健康状態、好きなことを行う時間の長さ)

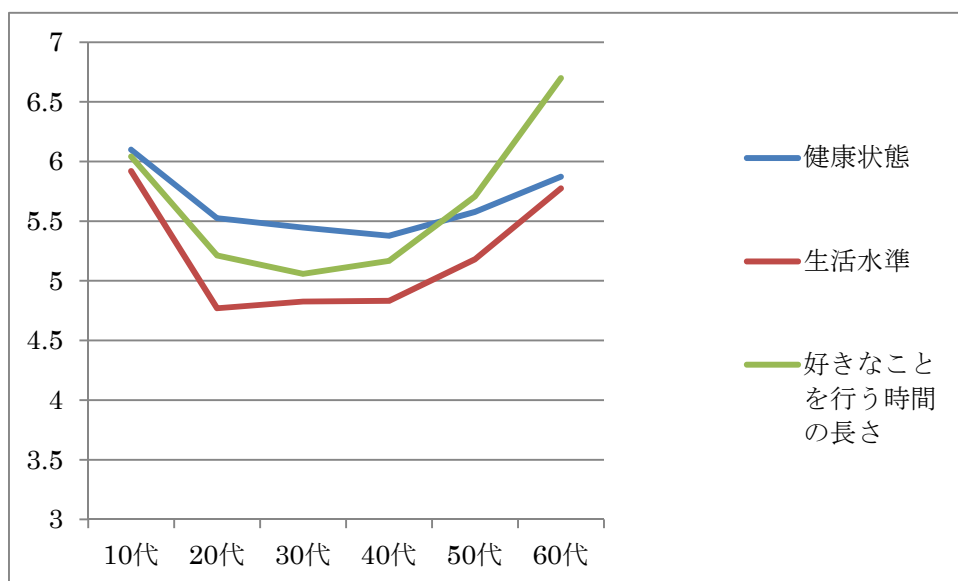
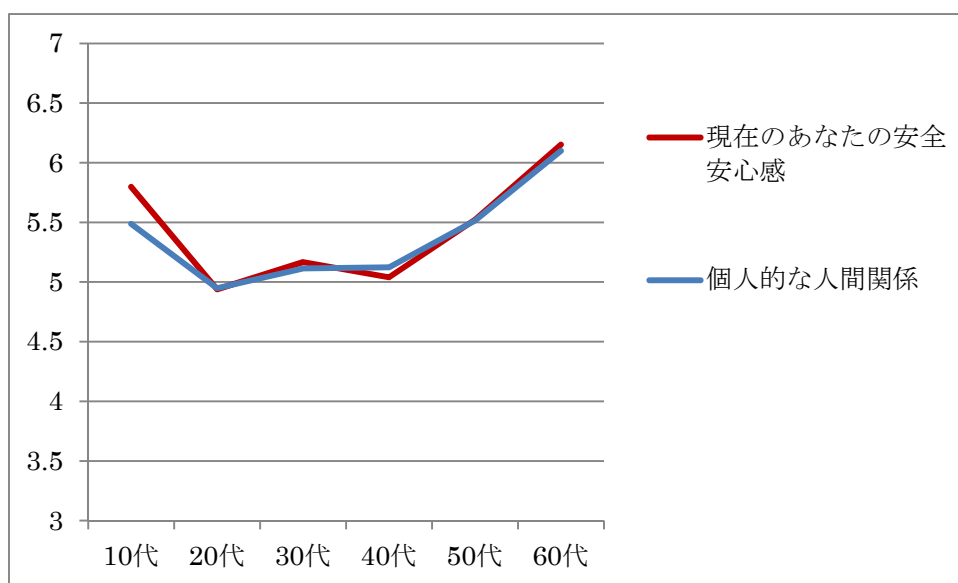


図 23 ③年代別の局面別の満足度(現在の安全安心、個人的な人間関係)



⑬不安

孤独死や治安、自然災害、老後の生活費など、不安を感じやすいと思われる事項についてどの程度不安を感じるか聞いたところ、常に不安を感じると回答した人の割合が大きかったのは、老後の生活費、自然災害、放射能汚染であった(表 20①)。訪問留置法における回答結果と比較し、幸福度とは逆にインターネット調査の方が不安感が低いという結果になっている(表 20②)。

表 20① 不安を感じる人の割合 (%)

	常に感じる	少し感じる	どちらとも言えない	あまり感じない	全く感じない
過労死	2.9	11.7	17.7	33.7	34.1
孤独死	8.5	20.7	20.0	28.0	22.9
失業	12.7	21.4	23.5	21.9	20.6
食品の安全	8.7	28.7	30.8	22.7	9.1
子どもの将来	14.2	26.1	25.3	12.2	22.2
治安	6.9	30.5	30.8	22.8	8.9
自然災害	23.2	40.5	21.1	11.0	4.2
放射能汚染	15.0	33.0	25.3	17.8	8.8
老後の生活費	33.1	35.0	16.9	10.5	4.6

表 20② 訪問留置法における結果との比較 (%)

	インターネット調査		訪問留置法		差	
	感じる	感じない	感じる	感じない	感じる	感じない
過労死	14.5	67.8	23.4	52.6	-8.8	15.2
孤独死	29.1	50.9	30.8	46.9	-1.6	4.0
失業	34.1	42.4	34.7	41.2	-0.6	1.2
食品の安全	37.4	31.8	47.0	28.9	-9.6	2.9
子どもの将来	40.3	34.4	52.6	22.0	-12.3	12.4
治安	37.5	31.7	40.2	30.3	-2.7	1.5
自然災害	63.7	15.2	68.9	14.6	-5.2	0.5
放射能汚染	48.0	26.7	53.3	26.4	-5.2	0.3
老後の生活費	68.1	15.0	72.3	13.4	-4.2	1.6

年代別の不安の違いを見るために、常に感じると4、少し感じるを3、どちらとも言えないを2、あまり感じないを1、まったく感じないを0として、不安の項目別に指数化し、年代別の平均点をグラフ化したのが、図 24 である。不安の平均点が最も高かった老後の生活費は、40代で不安のピークを迎

えている。このほか、失業、過労死、孤独死で40代で不安がピークを迎えている。自然災害、放射能汚染、食品の安全、子どもの将来、治安は年代が上がるとう不安が増大している。

図 24 ①年代別の不安指数(老後の生活費他上位4項目)

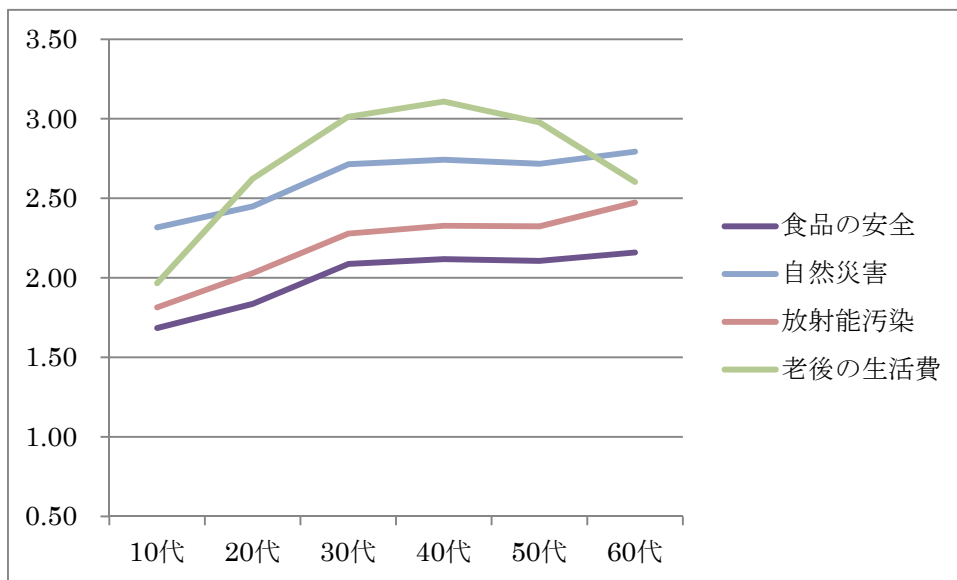
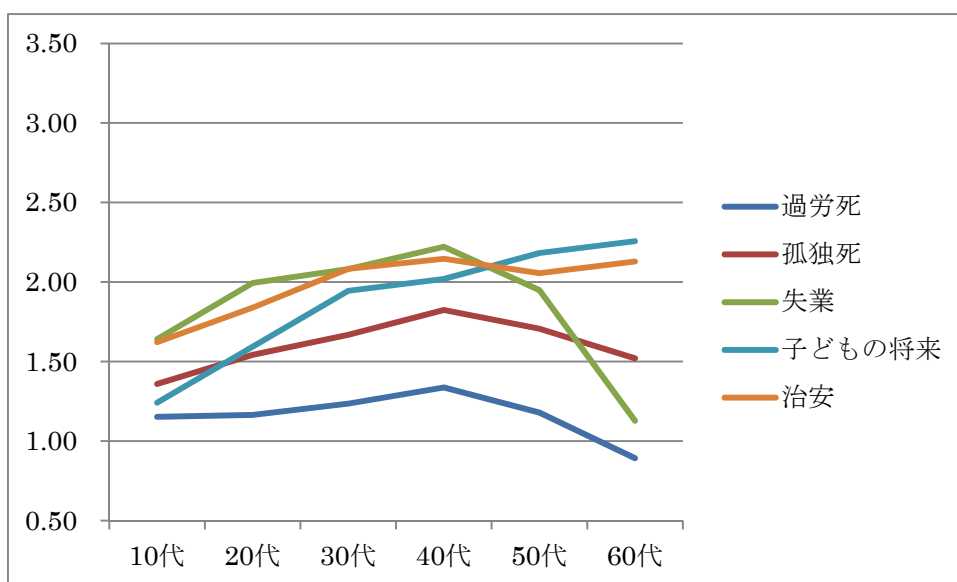


図 24 ②年代別の不安指数(治安他下位5項目)



本調査においては、698名の回答者が罹災、被災証明を受けたか現在も避難と回答していた。このどちらか、もしくは両方に当てはまると回答した人を仮にここで被災者として、被災者とそれ以外の人で不安に差が出るか、先ほど定義した不安得点で検討した。すると、放射能汚染、自然災害、

子どもの将来、食品の安全でt検定で有意な差がでており、これらの項目で被災者の間で特に不安が大きいことが分かる⁴。

表 21 被災者と被災者以外の不安の差

	被災者	被災者以外	差	統計的有意性
過労死	1.22	1.15	0.07	
孤独死	1.56	1.64	-0.08	
失業	1.86	1.84	0.02	
食品の安全	2.18	2.04	0.14	1%有意
子どもの将来	2.16	1.97	0.19	1%有意
治安	2.00	2.04	-0.04	
自然災害	2.93	2.66	0.27	1%有意
放射能汚染	2.76	2.24	0.52	1%有意
老後の生活費	2.89	2.81	0.07	
総数	698	9771		

⁴ 現在の幸福感、家族の幸福感、理想とする幸福感、将来の幸福感、生活満足度、感情経験では、平均値に統計的な有意な差（t検定）は存在しなかった。

⑭子育て経験

子育て経験について聞いたところ、子育ての経験がある人は約6割であった。年齢が増えるに応じて増加している。経験したことのある人のうち、半数以上の人を楽しいと感じる(感じた)と回答した一方、回答者全体の約6%の人がつらいと感じる(感じた)と回答した。性・年齢別にみると(図25)、10代、20代で子育て経験がつらい、もしくはどちらでもないという回答が多い。子育ての満足感も現在の幸福感と密接な相関関係がある。子育てを常によいと感じる(感じた)回答者の幸福感の平均値が7を超える一方、常につらいと感じる(感じた)回答者の幸福感の平均値は、3程度と非常に低い(図27)。子育て経験が常につらいと感じる(感じた)を1、どちらかというにつらいと感じる(感じた)を2、どちらでもないを3、どちらかというによいと感じる(感じた)を4、常によいと感じる(感じた)を5として指数化し、現在の幸福感と相関係数を計算すると、0.32(サンプル数 6368)と、有意であった。

図 25 性・年代別子育てを経験したことのある人の比率

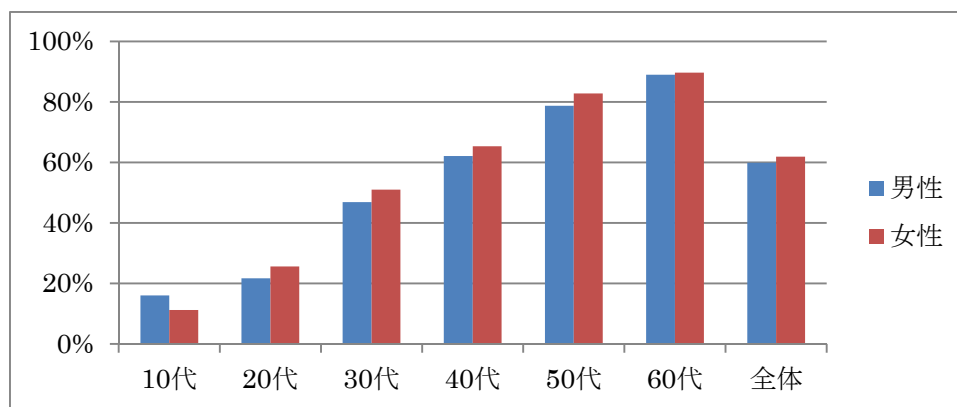
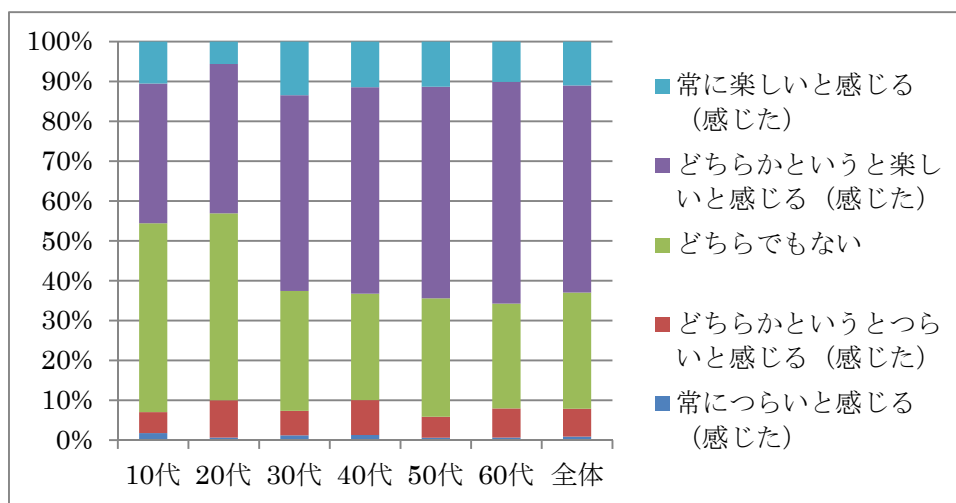


図 26 性・年代別の子育ての経験

①男性



②女性

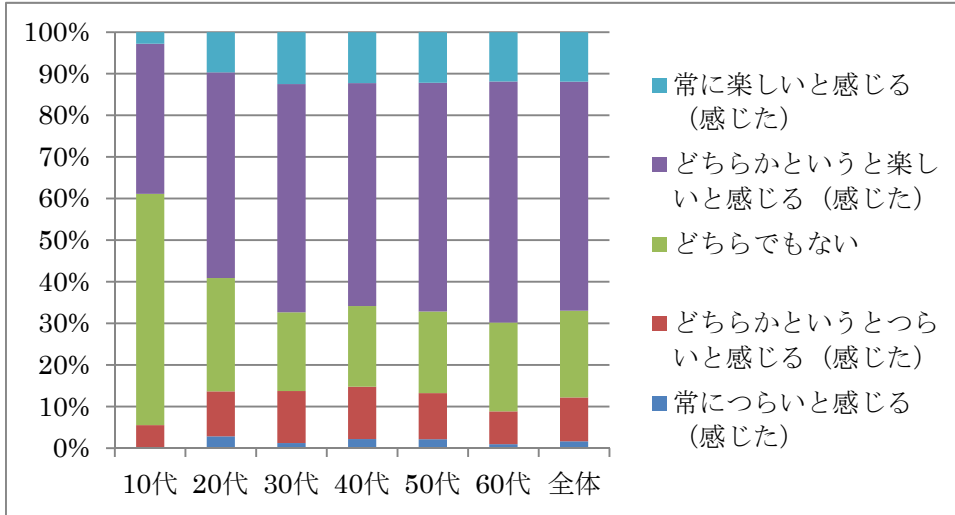
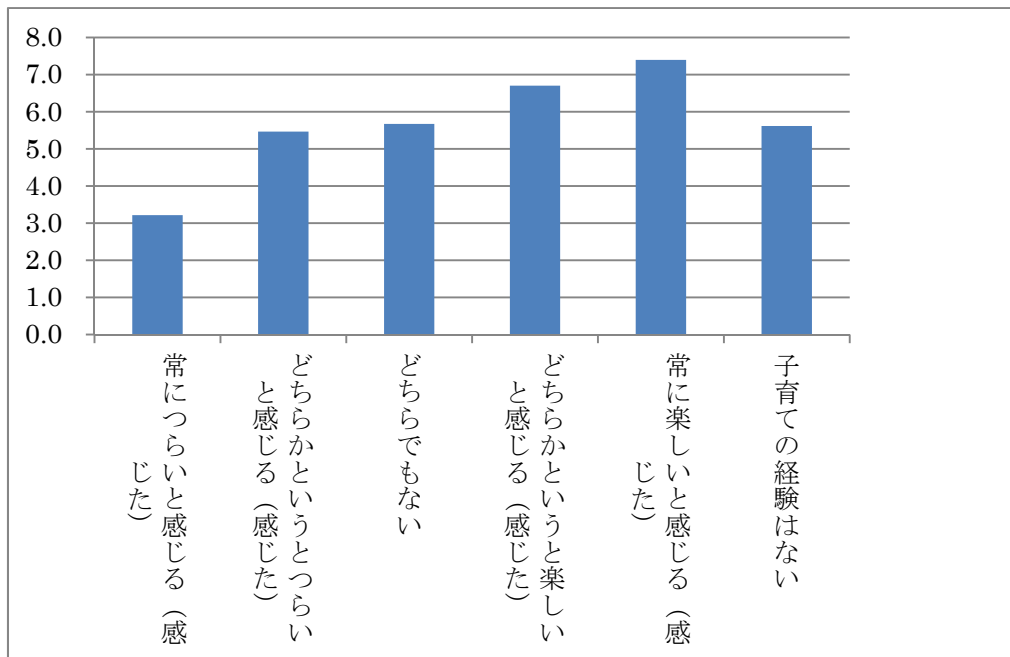


図 27 子育て満足感と現在の幸福感



⑮組織への信頼

中央政府、地方公共団体などの組織への信頼感を聞いたところ、中央政府、議会、報道関係に対しては過半数の人が信頼していないという回答となった(表 22)。年代別にみるために、全く信頼していないを1、どちらかという信頼していないを2、どちらでもないを3、どちらかという信頼しているを4、非常に信頼しているを5として指数化し、グラフにしたものが図 28 であるが、これによると、組織への信頼感は 30 代、40 代で低い U 字形になっている。組織への信頼度別に現在の幸福感を見ると、組織への信頼度の高い人の幸福感が高いことが分かる(図 29)。現在の幸福感との相関係数をみると、中央政府:0.1488、地方公共団体:0.1848、議会:0.1436、司法制度:0.1978、報道関係:0.1268、企業:0.2081 となっており、それぞれ1%水準で有意である。

表 22 組織への信頼 (%)

	全く信頼していない	どちらかという信頼していない	どちらでもない	どちらかという信頼している	非常に信頼している	信頼していない	信頼している
中央政府	26.1	36.9	29.5	7.1	0.4	63.0	7.5
地方公共団体	14.9	33.9	37.5	13.1	0.6	48.8	13.7
議会	24.8	37.1	32.7	5.1	0.4	61.9	5.4
司法制度	11.8	25.6	40.4	20.6	1.6	37.4	22.2
報道関係	21.3	31.8	36.3	10.1	0.5	53.0	10.7
企業	8.6	22.8	51.6	16.3	0.8	31.4	17.1

図 28 年代別の制度への信頼

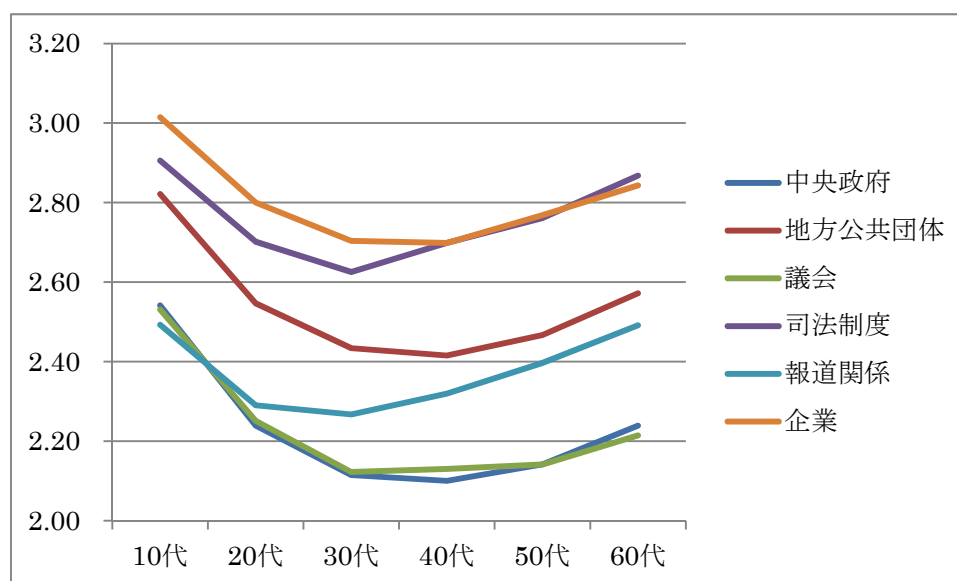
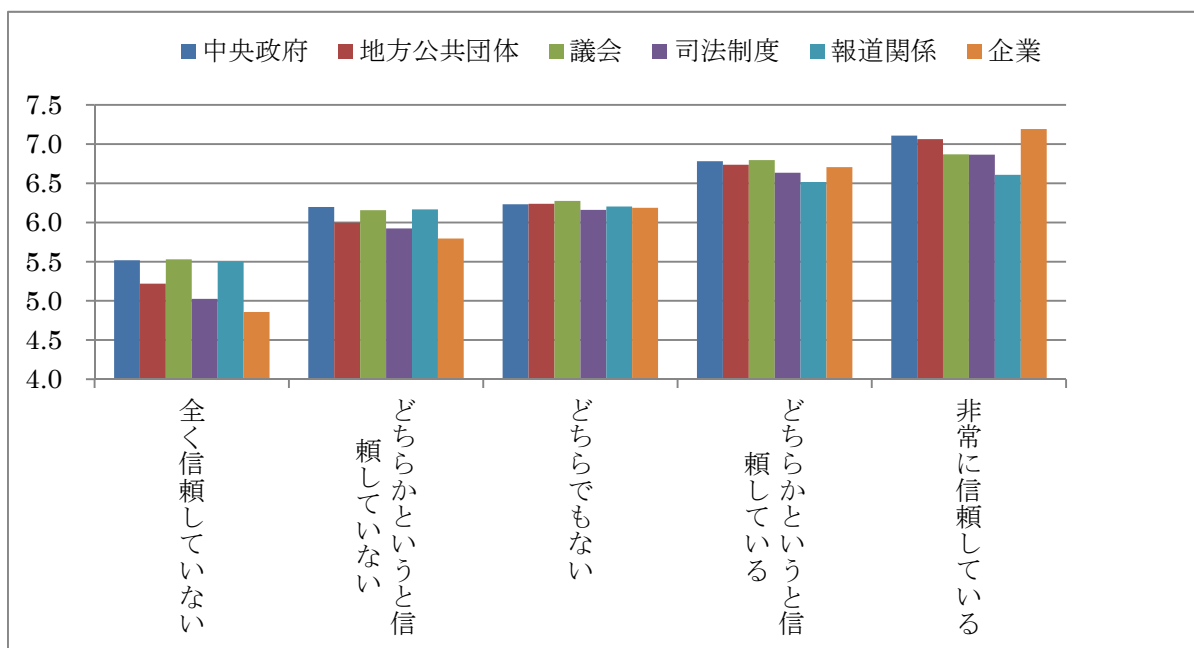


図 29 組織への信頼と現在の幸福感



⑩社会への信頼

世の中一般への信頼感を複数の質問により聞いたところ、「ほとんどの人は基本的に正直である」については、そう思うと回答した人の割合より、そう思わないと回答した人の割合の方が大きいという結果となった(表 23)。一方、「善良で親切である」と思う人の割合は、そうでない人より多い。自分自身については、人を信頼する方であると回答した人が半数を超えている。信頼された場合、同じように相手を信頼すると思うと回答した人も半数を超えている。

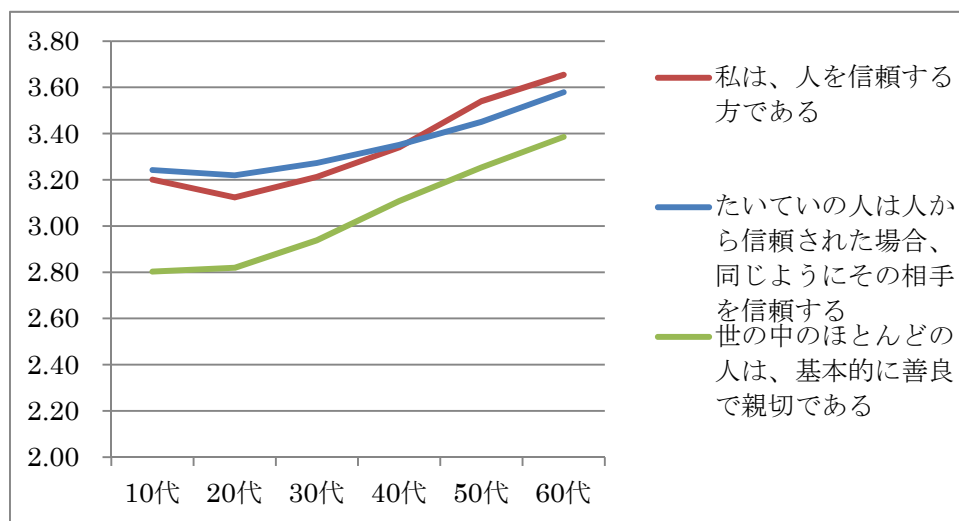
表 23 社会への信頼

	全くそうは思わない	どちらかといえばそう思わない	どちらともいえない	どちらかといえばそうだと思う	非常にそのとおりだと思う	そう思わない	そう思う
世の中のほとんどの人は、基本的に正直である	10.0	25.2	33.7	29.9	1.2	35.2	31.1
私は人を信頼する方である	4.6	12.8	28.5	48.2	6.0	17.3	54.2
世の中のほとんどの人は、基本的に善良で親切である	6.4	17.4	37.5	36.9	1.8	23.8	38.7
世の中のほとんどの人は、他人を信頼している	6.5	22.8	43.9	25.8	1.1	29.3	26.9
世の中のほとんどの人は、信用できる	10.2	25.0	41.7	22.0	1.0	35.2	23.1
たいていの人は人から信頼された場合、同じようにその相手を信頼する	4.2	11.1	33.1	45.8	5.8	15.3	51.6
世の中には偽善者が多い	2.3	15.0	49.3	24.7	8.8	17.3	33.5

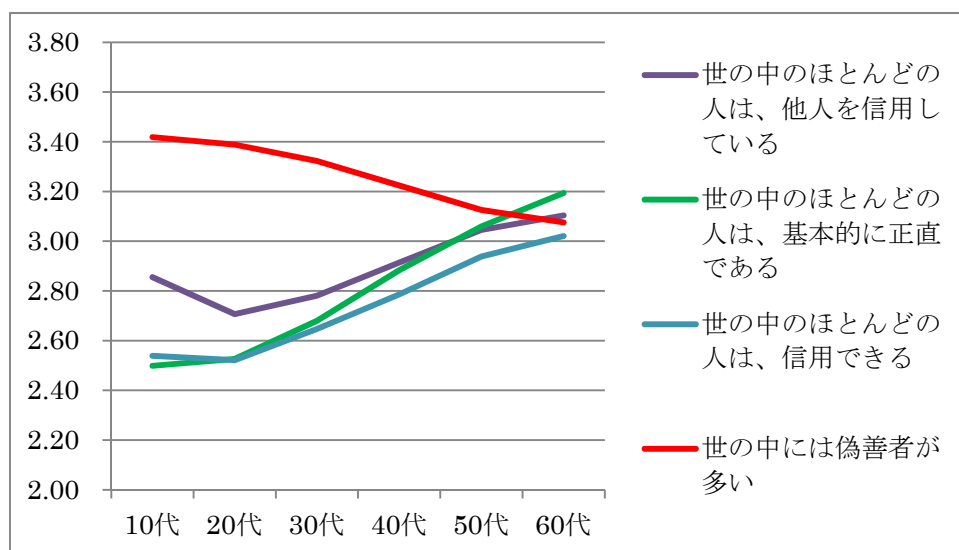
年代別にみるために、全くそうは思わないを1、どちらかといえばそう思わないを2、どちらともいえないを3、どちらかといえばそうだと思うを4、非常にそのとおりだと思うを5として指数化したところ、世の中には偽善者が多いという反対向きに質問以外は、おおむね年代とともに社会への信頼感が上昇している。

図 30 年代別の信頼尺度の推移

①得点上位3項目

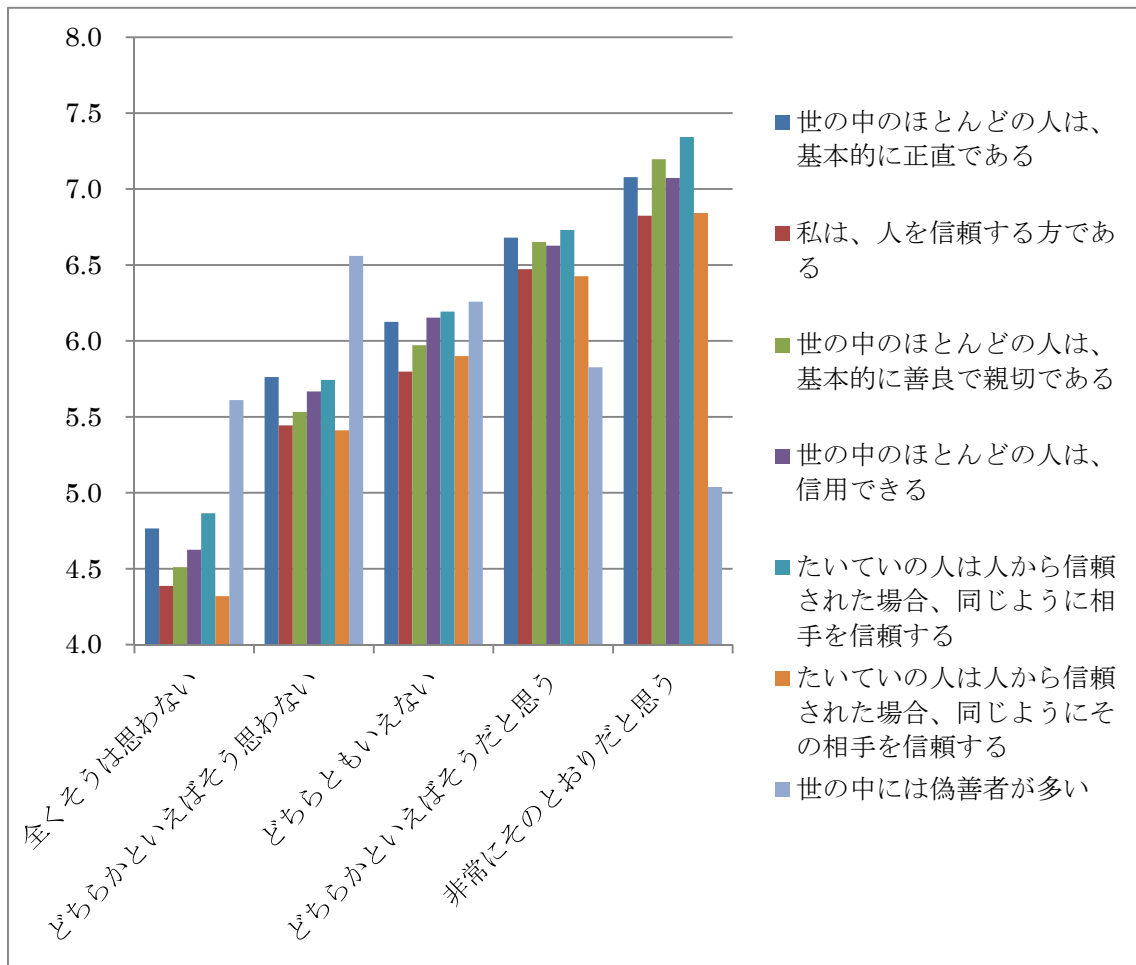


②得点下位4項目



他人への信頼度別に現在の幸福感を見たところ、「世の中には偽善者が多い」という設問への回答を除き、信頼度と幸福感の間に相関関係がグラフでも簡単に見てとれる(図 31)。現在の幸福感との相関係数は、すべての項目で有意(1%水準)であり、「世の中には偽善者が多い」を除き、0.23-0.27 という値であった。「世の中には偽善者が多い」の相関係数は、-0.15 となった。

図 31 他人への信頼感と現在の幸福感



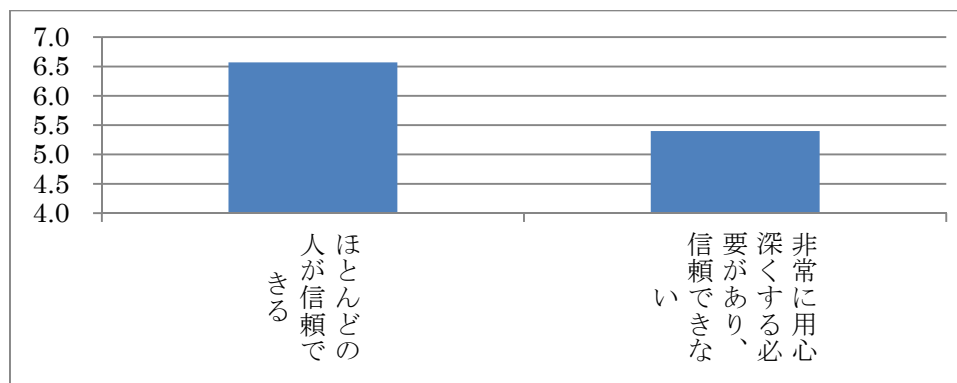
⑰人とつきあう上での信頼感

さらに、人と付き合う上で、ほとんどの人が信頼できるか、それとも非常に用心する必要があると思うかを2択で聞いたところ、信頼できるという回答の割合が、信頼できないという回答をやや上回った(表 24)。幸福感との関係を見ると、ほとんどの人が信頼できると回答した人の方が、現在の幸福感は高い。幸福感を従属変数に性別 x 年代 x 信頼の有無での分散分析を行ったところ(添付資料の 15)、信頼の有無の主効果は有意であった(1%水準)。この効果は年代と性別によらず見られた。

表 24 人と付き合う上での信頼感

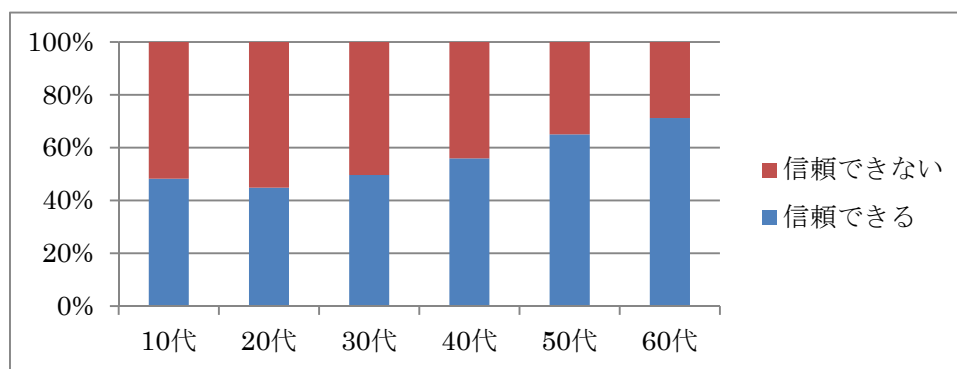
	男性	女性	全体
ほとんどの人が信頼できる	55.3%	60.5%	57.7%
非常に用心深くする必要があり、信頼できない	44.7%	39.5%	42.3%

図 32 人と付き合う上での信頼と現在の幸福感



年齢別に、対人関係における信頼への回答シェアの推移をみると、年齢が上がるにつて、信頼できるとする回答の割合が高まることが分かる(図 33)。

図 33 人と付き合う上での信頼感の年齢別推移



⑱ 自己有用感

「誰かに関心を持たれていると感じる」、「自分が役に立っていると感じる」、「自分の役割があると感じる」など、自己有用感・居場所感について、自身の状況や考え方に近いものを聞いたところ、「誰かに関心を持たれていると感じる」という問を除いて、「当てはまる」とする回答が、「当てはまらない」とする回答を上回った(表 25)。特に「自分の役割があると感じる」に対して、過半数の人が「当てはまる」と回答している。

表 25 自己有用感の分布 (%)

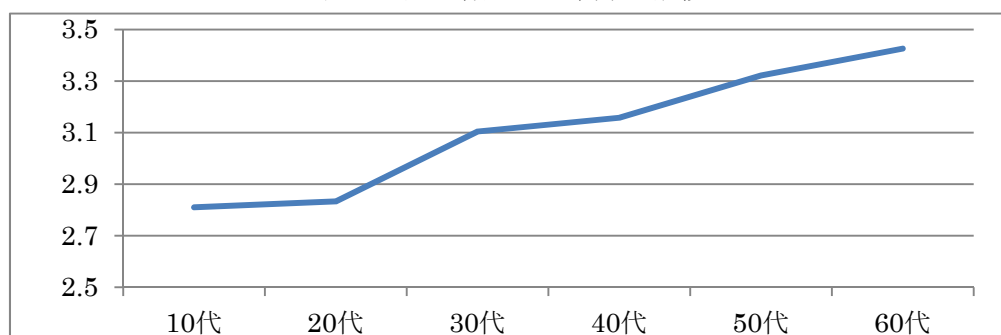
	全く当てはまらない	どちらかという当てはまらない	どちらでもない	どちらかといえば当てはまる	非常に当てはまる	当てはまらない	当てはまる
誰かに関心を持たれていると感じる	9.5	22.5	39.3	25.8	2.9	32.0	28.7
私がないと誰かがさびしいと感じる	10.3	17.7	31.8	32.5	7.7	28.0	40.2
自分が必要とされていると感じる	8.0	14.5	31.4	37.6	8.6	22.5	46.2
自分が役に立っていると感じる	8.2	14.9	33.6	36.8	6.4	23.1	43.2
自分の役割があると感じる	7.2	11.9	27.3	43.7	9.9	19.1	53.6
私がないと誰かが困ると感じる	8.9	14.8	30.3	35.7	10.4	23.7	46.1
自分の存在が認められていると感じる	8.3	14.3	37.4	33.4	6.6	22.6	40.0

自己有用感全体を示す指数として、「全く当てはまらない」を1点、「どちらかという当てはまらない」を2点、「どちらでもない」を3点、「どちらかといえば当てはまる」を4点、「非常に当てはまる」を5点として、上記の設問への平均点を計算したところ、男女別には、女性が高く、年齢別には、自己有用感は年齢とともに上昇していた。

表 26 自己有用感

男性	3.0
女性	3.3
全体	3.2

図 34 自己有用感の年齢別推移



就業状態別には、若年無職等、完全失業者、専業主夫、学生で低く、就業者、専業主婦で高い。

表 27 就業状態別自己有用感	男性	回答者数	女性	回答者数	全体	回答者数
失業者	2.5	92	2.7	45	2.6	137
専業主婦・主夫	2.6	25	3.5	858	3.5	883
学生	2.8	279	2.9	188	2.8	467
無職等(定年退職者含む)	3.0	473	3.0	125	3.0	598
30代以下	1.9	32	2.1	24	2.0	56
40代以上	3.1	441	3.2	101	3.1	542
就業者	3.1	4292	3.3	2590	3.2	6882
全体(分類不能を含む)	3.1	5161	3.3	3806	3.2	8967

自己有用感の水準ごとに現在の幸福感を見ると(図 35)、自己有用感の強さが幸福感の強さと明確に相関していることが分かる。年代別に相関係数をみると、20代、30代で相関係数が0.5程度と特に強い(図 36)。

図 35 自己有用感の水準ごとの現在の幸福感

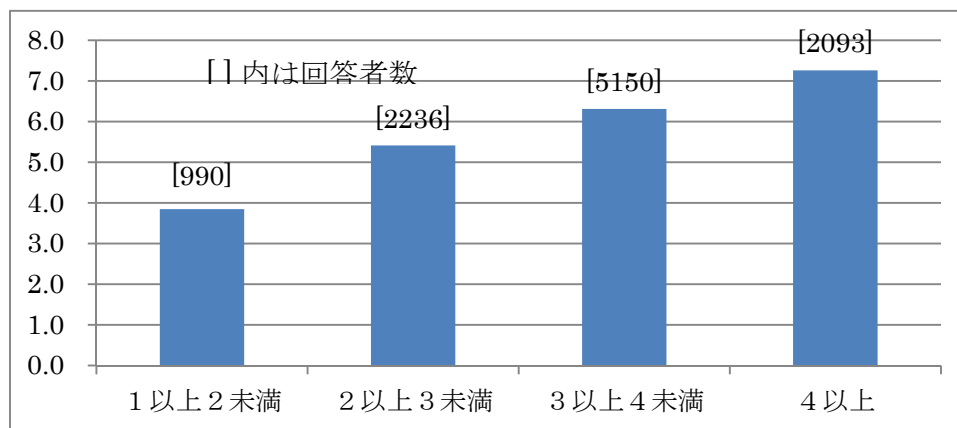
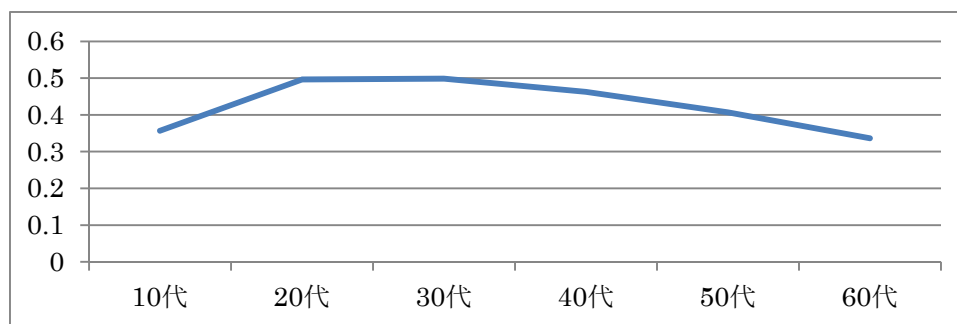


図 36 幸福感と自己有用感の年代別相関係数



⑱身の周りから受ける援助への期待

身近な人から様々な場面で援助を得ることができるかどうかについて、場面ごとに聞いたところ、「落ち込んでいると、元気づけてくれる」、「何かうれしいことが起きたとき、それを我が事のように喜んでくれる」、「良いところも悪いところもすべて含めて、あなたの存在を認めてくれる」の三項目で、過半数の人が、「そうだ」と回答した(表 28)。

表 28 場面ごとの身近な人が援助してくれることへの期待についての回答者割合 (%)

	絶対 違う	たぶん 違う	どちら でもない	たぶん そうだ	きっと そうだ	違う	そうだ
落ち込んでいると、元気づけてくれる	3.4	9.6	27.1	43.7	16.2	13.0	59.9
何かうれしいことが起きたとき、それを我が事のように喜んでくれる	3.2	8.9	29.2	43.3	15.5	12.0	58.8
どうにもならない状況に陥っても何とかしてくれる	5.0	13.5	38.2	34.4	8.9	18.5	43.3
元気がないとき、すぐに気付いて気遣ってくれる	5.2	14.0	35.9	35.1	9.8	19.2	45.0
普段からあなたの気持ちをよく理解してくれる	5.6	13.5	37.3	33.8	9.8	19.1	43.6
良いところも悪いところもすべて含めて、あなたの存在を認めてくれる	3.9	8.3	31.1	41.0	15.8	12.2	56.7

身近な人からの援助への期待感を示す指数(一般的サポート尺度)として、上記の質問への回答に対し「絶対違う」を1点、「たぶん違う」を2点、「どちらでもない」を3点、「たぶんそうだ」を4点、「きっとそうだ」を5点として、平均点を計算したうえで、この一般的サポート尺度を従属変数とし、調査形態 x 性別 x 年代での分散分析を行ったところ(添付資料の16)、調査形態の主効果が見られ、訪問留置法における回答結果と比較すると、インターネット調査においては、「そうだ」という回答がすべての項目で低く、援助への期待は低い傾向にある(表 29)。

表 29 訪問留置法とインターネット調査における回答の比較 (%)

	インターネット調査		訪問留置法	
	違う	そうだ	違う	そうだ
落ち込んでいると、元気づけてくれる	13.0	59.9	7.0	65.8
何かうれしいことが起きたとき、それを我が事のように喜んでくれる	12.0	58.8	6.8	67.3
どうにもならない状況に陥っても何とかしてくれる	18.5	43.3	14.2	49.8
元気がないとき、すぐに気付いて気遣ってくれる	19.2	45.0	11.6	55.3
普段からあなたの気持ちをよく理解している	19.1	43.6	12.0	54.0
良いところも悪いところもすべて含めて、あなたの存在を認めてくれる	12.2	56.7	7.9	65.4

男女別には、女性が高く、その傾向が訪問留置法と同様であった(性別 x 調査形態の交互作用は有意でなかった)(表 30)。年齢別には、インターネット調査では支援への期待は年齢とともにやや増加する関係にある一方、訪問留置法調査で 60 代を底とする J 字形となっており、大きな違いがある。年代 x 調査形態の交互作用が有意であった(図 37)。年代別の現在の幸福感の相関係数を見ると(図 38)、全て有意だが、若干違いがあり、訪問留置法の方ではあまり係数に差がない一方、インターネット調査では、30 代にはっきりとしたピークが見える。

表 30 一般的サポート尺度

	男性	女性	全体
訪問留置法	3.5	3.8	3.7
インターネット調査	3.3	3.6	3.4

図 37 年齢別一般的サポート尺度

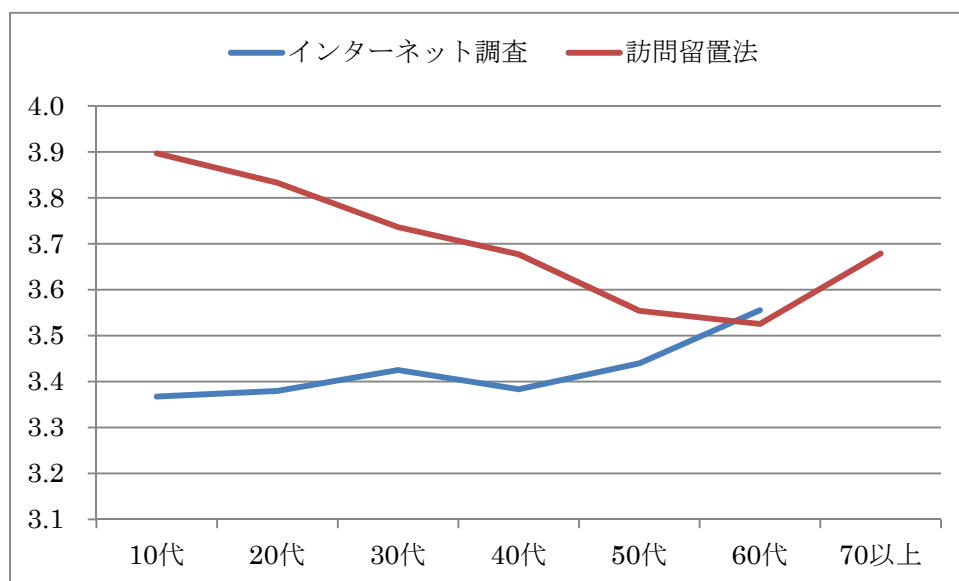
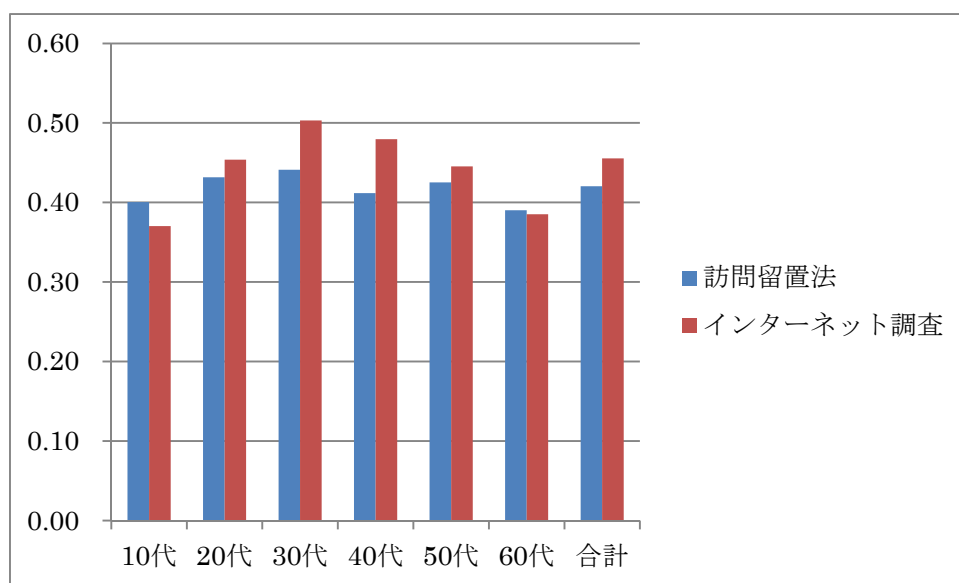


図 38 調査形態別、年代別現在の幸福感と一般的サポート尺度の相関係数



⑳ニート・ひきこもり

ニートやひきこもりの心理的傾向を捉えるために、フリーター生活志向性、自己効能感の低さ、将来に対する不明瞭な目標という項目からなる合計 28 の質問群について、回答してもらったところ、回答結果は以下の通りであった。

表 31 ニート・ひきこもり尺度質問項目への回答割合

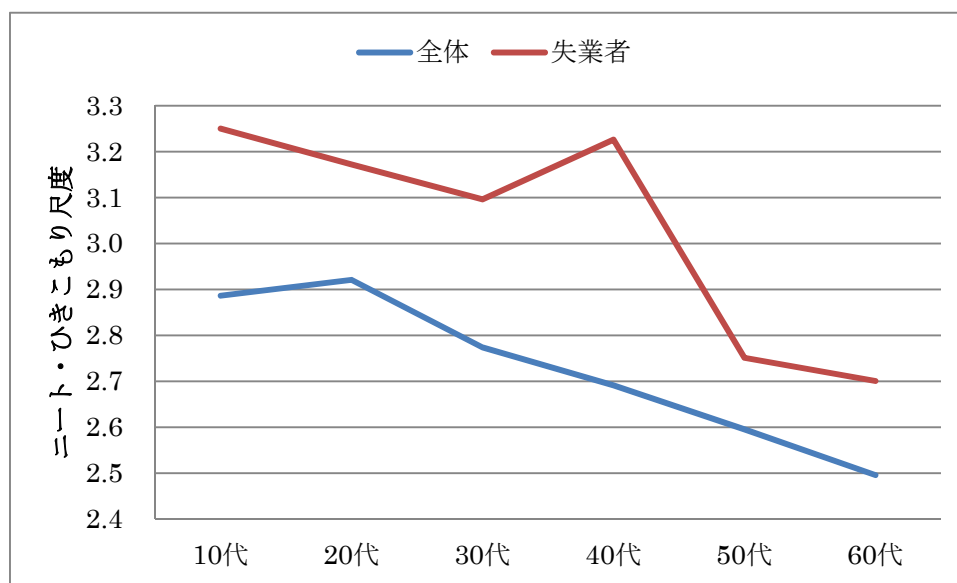
	全くそ う思わ ない	そう思 わない	どちら でもな い	そう 思う	常に そう 思う
働かない人間は怠け者になってしまうのではと思う	3.2	11.4	23.3	44.9	17.2
急いで仕事に就く必要はないと思う	10.1	32.1	36.4	18.9	2.4
責任を伴う仕事がしたい	6.2	13.9	40.3	32.8	6.8
働くことは社会への義務なのではないかと思う	3.9	12.2	34.2	39.6	10.1
堅苦しい仕事につくことは避けたいと思う	5.4	21.0	44.2	22.9	6.4
働くことの意味がなかなか見い出せないと感じる	11.9	34.6	37.2	12.7	3.6
私生活を犠牲にしてまで仕事に打ち込む必要はないと思う	3.1	15.7	39.9	31.3	10.1
自分の才能を十分に発揮させるには仕事を持つことが必要だ	2.5	9.1	39.5	39.7	9.3
将来何をしたいのかよくわからない	8.6	22.4	39.6	20.9	8.6
好みの生活スタイルを優先したいので、フリーター生活の方がいいのではないかと思う	28.4	32.6	31.0	6.6	1.5
生活の基本は親に頼ることができるので、いろいろ楽しみたい	45.0	27.0	21.3	5.8	0.9
安定的な身分・所得をえることはそれほど重要ではない	24.3	41.5	26.6	6.3	1.4
正社員の仕事はキツくて、辛そうという印象がある	19.4	34.9	30.0	12.7	3.1
自分は知識・技能が低いと思う	10.0	29.5	39.2	16.0	5.4
自分は人と同じくらいのことができ、社会で役に立つと思う	3.8	12.2	40.8	37.7	5.6
嫌いな人、苦手な人とも、うまく付き合う努力をしている	4.7	14.8	35.1	40.5	5.0
困ったことが起きた時、相談できる人がいる	5.3	11.8	32.6	40.7	9.6
勉強しておくことは将来就職した後のためにも、必要だと思う	1.3	3.3	20.5	49.3	25.5
社交性が低く、対人関係が苦手である	8.7	25.3	34.8	21.5	9.7
自分はどこかに所属していると感じる	7.6	17.9	46.3	24.5	3.6
コミュニケーションをとるのがどうしても難しく感じる	7.8	30.0	35.7	19.8	6.7
人付き合いはしんどいと感じる	5.3	23.5	35.6	27.6	8.1
自分に自信が持てない	6.5	26.3	35.4	21.5	10.3
将来についての見通しがたたないと感じる	5.0	21.2	36.6	26.8	10.4
普段一緒に遊んだり連絡する友人はあまりいない	9.5	27.7	31.4	23.1	8.4
自分は社会に必要とされていないのではないかと思うときがある	9.0	29.7	39.9	15.7	5.7
自分は基礎学力が低いと思う	13.3	34.0	32.8	14.3	5.7
夜更かしをし起きるのも昼、食事も不規則という昼夜逆転の生活をしてしまう	38.5	22.7	26.1	8.9	3.9

「全くそう思う」を1、「そう「思わない」を2、「どちらでもない」を3、「そう思う」を4、「常にそう思う」を5として指標化し、いくつかの項目⁵⁾については逆転した上で、平均をとり、ニート・ひきこもり尺度として計算したところ、男女別の平均値は表 32 の通りであり、性別は影響を与えない。年齢別には図 39 の通りであり、年齢に応じて低下する傾向がある。失業者のニート・ひきこもり尺度は全体に高いが、年齢に応じて低下する。なお、失業者のサンプル数は全体で 137 しかなく、このデータの解釈には注意が必要である。

表 32 男女別ニート・ひきこもり尺度

	平均	標準偏差	回答者数
男性	2.7	0.5	5576
女性	2.7	0.5	4893
全体	2.7	0.5	10469

図 39 年齢別ニート・ひきこもり尺度



また、現在の幸福感との関係を見ると(図 40)、ニート・ひきこもり指標の高さと現在の幸福感の間に、相関関係が存在することが分かる。ニート引きこもり尺度が 4 以上の場合、現在の幸福感は、4

⁵⁾ 「働かない人間は怠け者になってしまうと思う」、「責任を伴う仕事がしたい」、「働くことは社会への義務なのではないかと思う」、「自分の才能を十分に発揮させるには、仕事を持つことが必要だ」、「自分は人と同じくらいのことができ、社会で役に立つと思う」、「嫌いな人、苦手な人も、うまく付き合う努力をしている」、「困ったことが起きた時、相談できる人がいる」、「勉強しておくことは将来就職した後のためにも、必要だと思う」、「自分はどこかに所属していると感じる」という 9 の項目

を下回る。但し、4以上の回答者数は76と少ない。

図 40 ニート・ひきこもり尺度と現在の幸福感

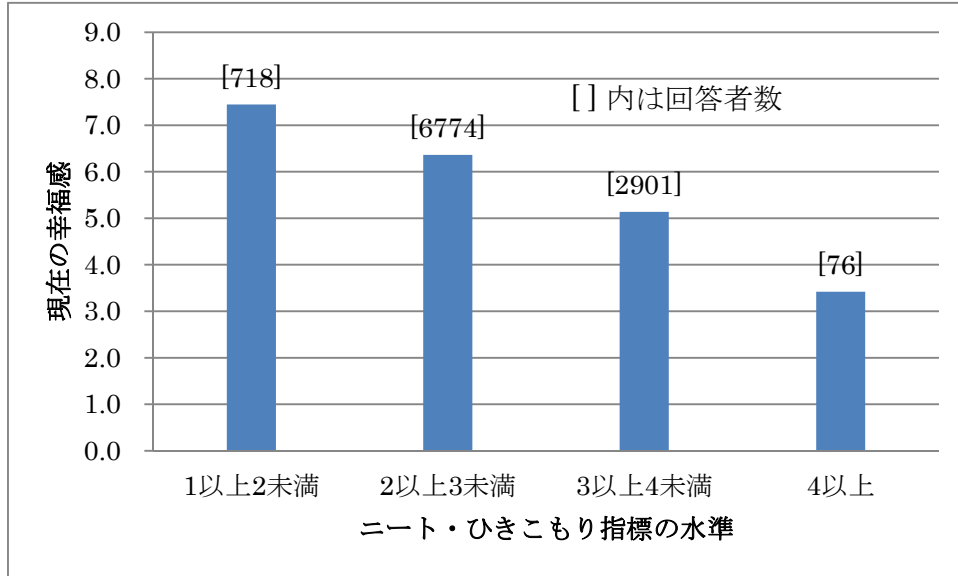
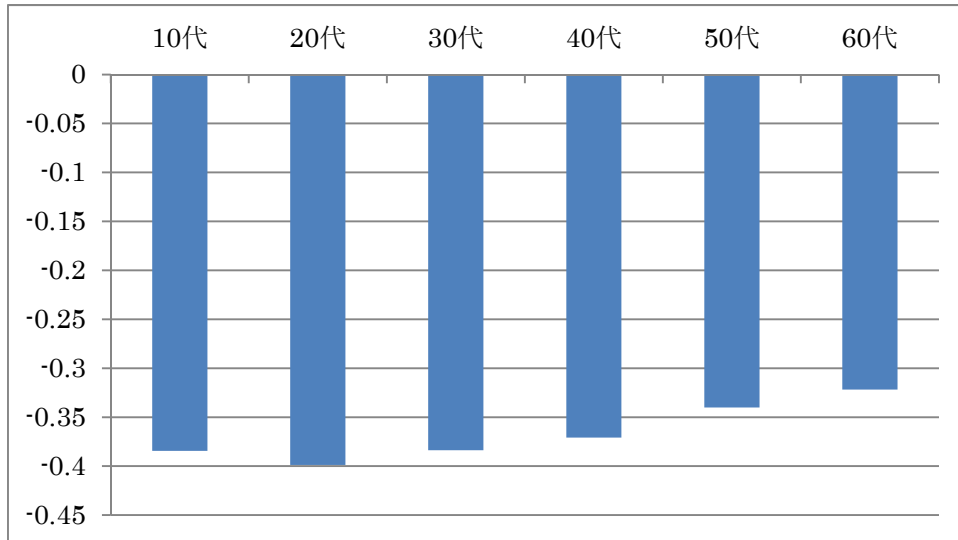


図 41 年代別の現在の幸福感とニート・ひきこもり尺度の相関係数



②①こころの健康

「神経過敏に感じましたか」、「絶望的に感じましたか」など、過去30日間における心の健康(不健康)状態について質問した(表33)。これらはK6尺度と呼ばれる心理的ストレス反応を測定するための尺度に基づいた質問であり、本質問への回答を回答者ごとに「全くない」を0点、「少しだけ」を1点、「ときどき」を2点、「たいてい」を3点、「いつも」を4点として、計算した合計得点が回答者のK6尺度である。K6の得点は、5点以上で心理的ストレス相当、10点以上で気分不安障害相当、13点以上で重症精神障害相当という研究結果がある。本インターネット調査では、5点以上が約半数と2010年に行われた国民生活基礎調査の際のデータと比較し、全般的に得点が高くなっており、調査手法やサンプリング、さらには設問の順番などの違いによるバイアスが大きく出ている可能性が高く、解釈に注意が必要である(表34)。本調査では、男性の方がK6の得点が高い回答者の割合が大きい、国民生活基礎調査では女性の方が大きいという結果になっている。年齢別には、K6は、年齢が上昇するにつれ低下している(図42)。さらにK6の得点と現在の幸福感の関係をみると、K6の高い回答の幸福感は低いことが明確に分かる(図43)。年齢別に幸福感とK6の相関関係をみると、負の相関係数は40代が最も大きい。

表33 心の健康状態の回答割合 (%)

	全くない	少しだけ	ときどき	たいてい	いつも
神経過敏に感じましたか	39.9	28.6	23.3	5.6	2.7
絶望的に感じましたか	53.2	22.9	16.7	4.5	2.7
そわそわしたり、落ち着かなく感じましたか	41.2	30.2	21.5	5.1	2.0
気分が沈み込んで、何が起こっても気が晴れないように感じましたか	36.4	31.0	22.5	6.6	3.6
何をすることも骨折りだと感じましたか	44.0	28.7	20.1	4.9	2.3
自分は価値のない人間だと思いましたか	53.6	21.5	16.5	4.7	3.7

表 34 国民生活基礎調査(2010)との結果の比較

	K6 得点	2010年国民生活基礎調査	本調査
総数	総数	100.0%	100.0%
	0～4点	58.8%	50.4%
	5～9	15.3%	26.2%
	10～14	6.1%	17.0%
	15点以上	2.3%	6.4%
	不詳	17.4%	
男	総数	100.0%	100.0%
	0～4点	61.3%	48.4%
	5～9	14.1%	25.4%
	10～14	5.6%	19.5%
	15点以上	2.1%	6.7%
	不詳	17.0%	
女	総数	100.0%	100.0%
	0～4点	56.6%	52.6%
	5～9	16.4%	27.1%
	10～14	6.6%	14.1%
	15点以上	2.5%	6.2%
	不詳	17.8%	

図 42 年齢別の K6 の推移

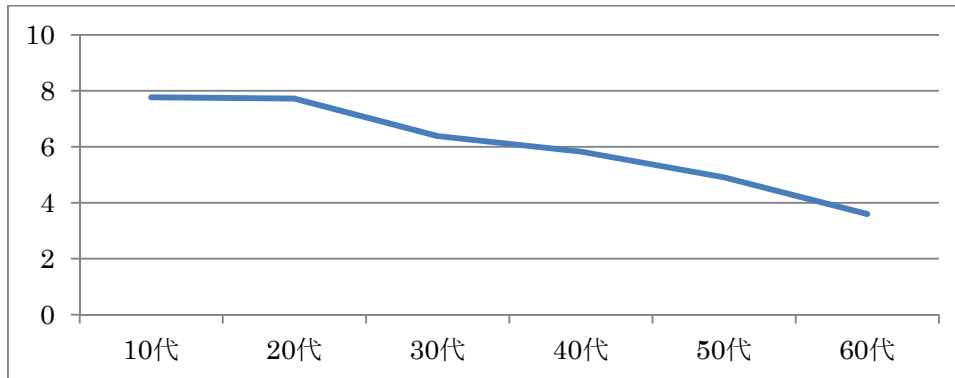


図 43 K6 得点別の現在の幸福感

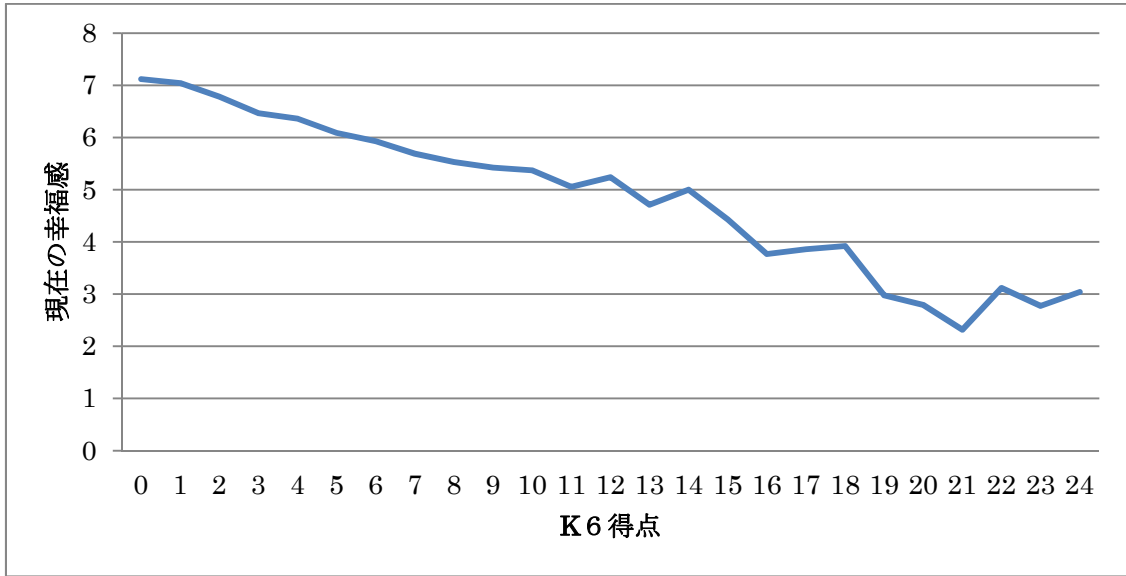
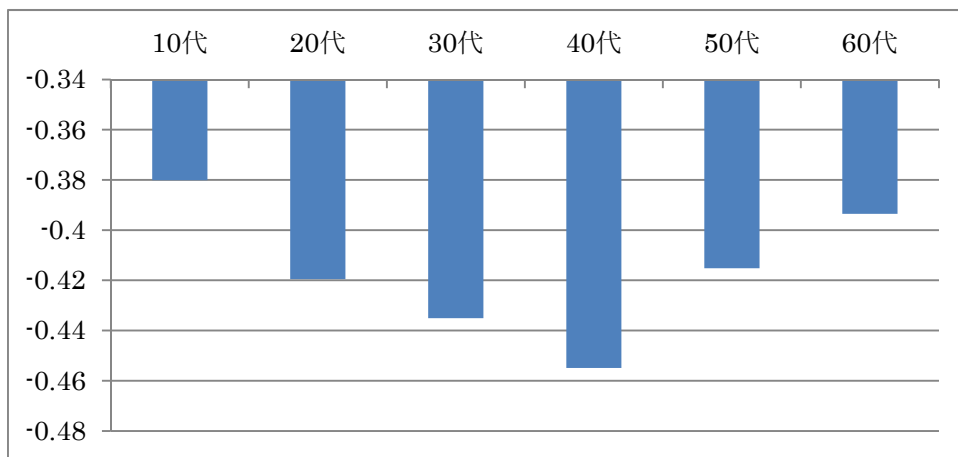


図 44 年代別の現在の幸福感と K6 の相関係数



②自己申告の健康状態

自身の健康状態をどのように感じているか、「健康ではない」から、「健康である」まで、5段階で聞いたところ、「健康である」と「どちらかといえば健康である」とする回答者の割合が半数を超えた(表 35)。

表 35 自己申告の健康の回答者の分布 (%)

	インターネット調査	訪問留置法
健康ではない	5.2	5.8
どちらかといえば健康ではない	17.1	15.3
どちらともいえない	21.1	18.9
どちらかといえば健康である	43.0	40.9
健康である	13.7	19.0
無回答	0.0	0.1

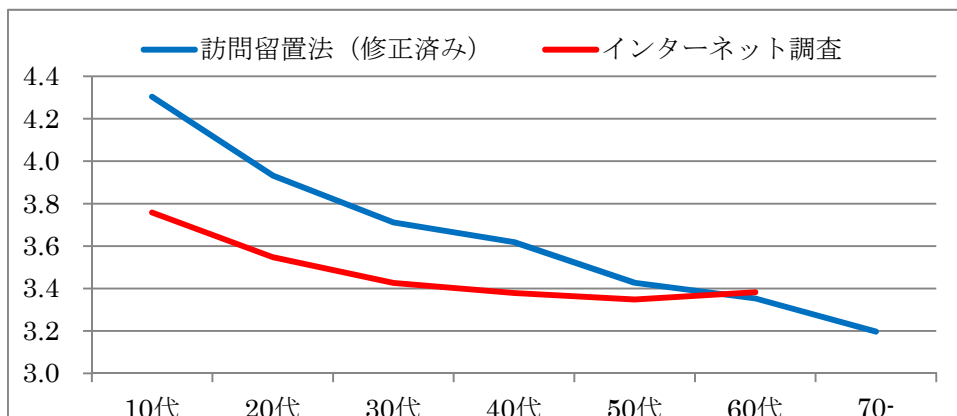
「健康ではない」を1点、「どちらかといえば健康ではない」を2点、「どちらともいえない」を3点、「どちらかといえば健康である」を4点、「健康である」を5点として、健康観を指数化し、健康状態を従属変数とし、調査形態 x 性別 x 年代での分散分析を行ったところ(添付資料の17)、調査形態の主効果が有意であり、インターネット調査では訪問留置法と比較すると、「健康である」という回答が少ない。性別の主効果もみられ、女性の方が男性より健康状態がよいことが示されたが、調査形態との交互作用はみられなかった(表 36)。

表 36 男女別の健康状態平均点

	インターネット調査	訪問留置法
男性	3.4	3.5
女性	3.5	3.6
全体	3.4	3.5

年齢別には、年齢があがるにつれ下がるという年代の主効果がみられるが、調査形態との交互作用がみられ、インターネット調査では、50代から60代にかけては、わずかながら上昇し、訪問留置法と比較すると、若年層で、インターネット調査における回答の方が低くでている(図 30)。しかしこれはインターネット調査のサンプリングバイアスによるものである可能性があり、今後のさらなる検証が必要である。

図 45 年齢別自己申告の健康状態



健康状態別に現在の幸福感を見ると、健康状態が良い方が幸福感が高くなっており、主観的幸福感に対し、健康状態が関連しているといえる(表 37)。相関係数はインターネット調査では 40 代でピークの逆 U 字形となっており、訪問留置法調査では 50 代がピークとなっていた。いずれの調査でも、健康問題が重要となる 60 代、70 代で特に健康と幸福感で相関係数が特に高いわけではなかった。

表 37 自己申告の健康状態と現在の幸福感

	現在の幸福感	平均年齢	回答者数
健康ではない	4.5	45.4	539
どちらかといえば健康ではない	5.3	45.5	1790
どちらともいえない	5.6	44.6	2204
どちらかといえば健康である	6.5	45.3	4499
健康である	7.2	39.5	1437
全体	6.1	44.4	10469

図 46 調査形態別自己申告の健康と幸福感の関係

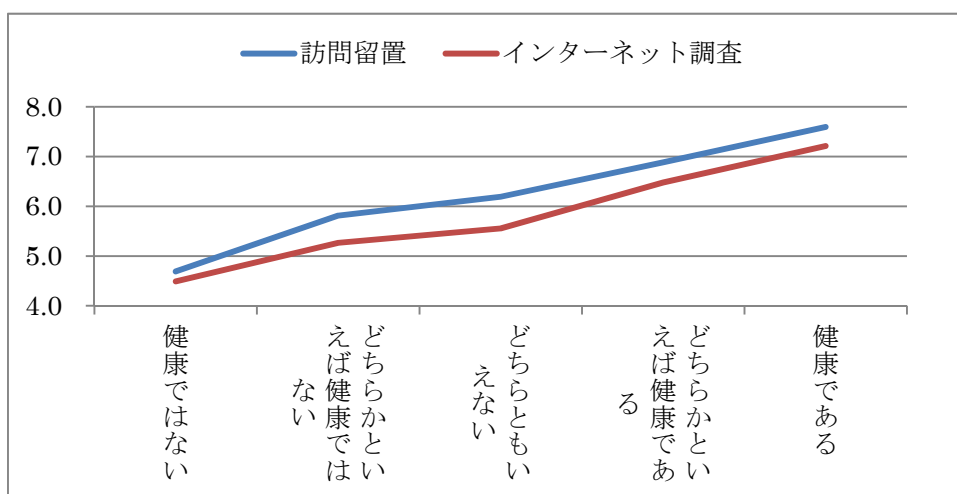
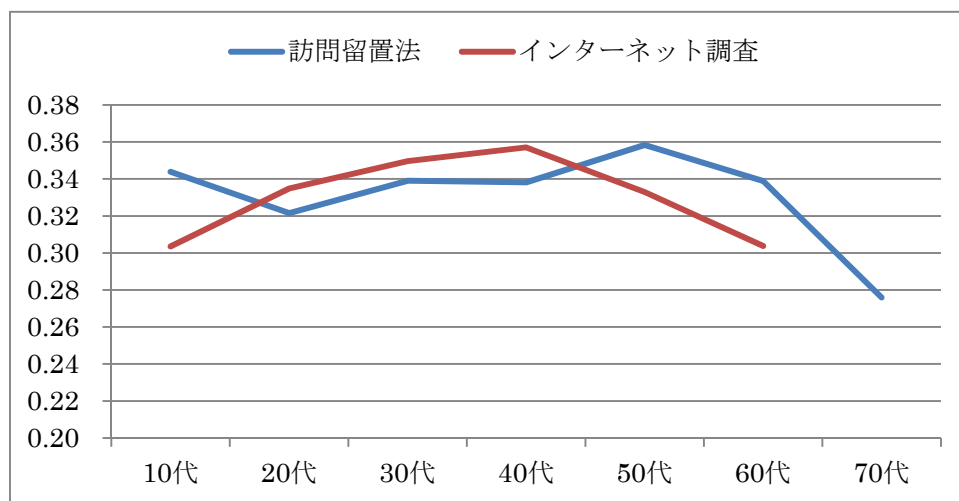


図 47 年齢別主観的健康と現在の幸福感の相関係数



②配偶状況

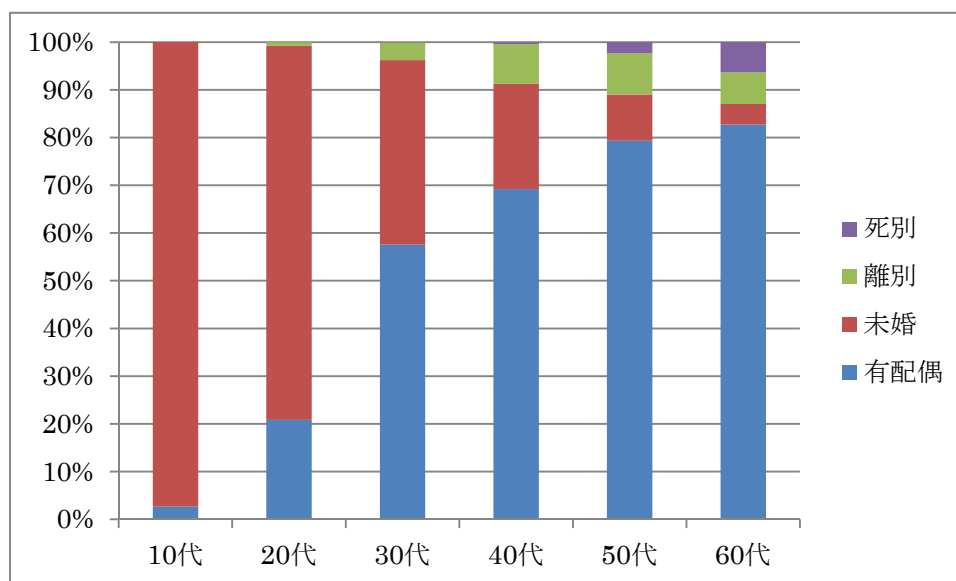
配偶状態について聞いたところ、本インターネット調査においては、6割の回答者が配偶者ありと回答し、3割の回答者が未婚と回答した。訪問留置法と違い、70代以上がないため、死別の割合が著しく小さい(表 38)。

表 38 配偶の状況

	回答者数	比率(%)	訪問留置法の比率(%)
有配偶	6,375	60.9	59.3
未婚	3,313	31.7	22.5
離婚	579	5.5	7.3
死別	202	1.9	10.9

年齢別の配偶状態の推移は図 48 の通りであり、年齢を追うごとに上昇するが、40代でも配偶者のいる人の割合は7割程度となっている。別途分析をおこなったが、インターネット調査では、国勢調査等と比較し、有配偶率は若年層では低めに、高齢層では高めに出る傾向がある。

図 48 年齢別の配偶状態の推移



配偶状態別、年齢別、性別の現在の幸福度の推移をみると、男女とも、配偶者の有無が、大きく幸福度に影響している様子がうかがえる。死別への反応に男女差があり、女性の場合、60代で死別と回答した人(回答者数は103名)の幸福度は、配偶者ありと回答した人の幸福度と変わらない。

図 49-1 男性の年齢別、配偶状態別の現在の幸福感

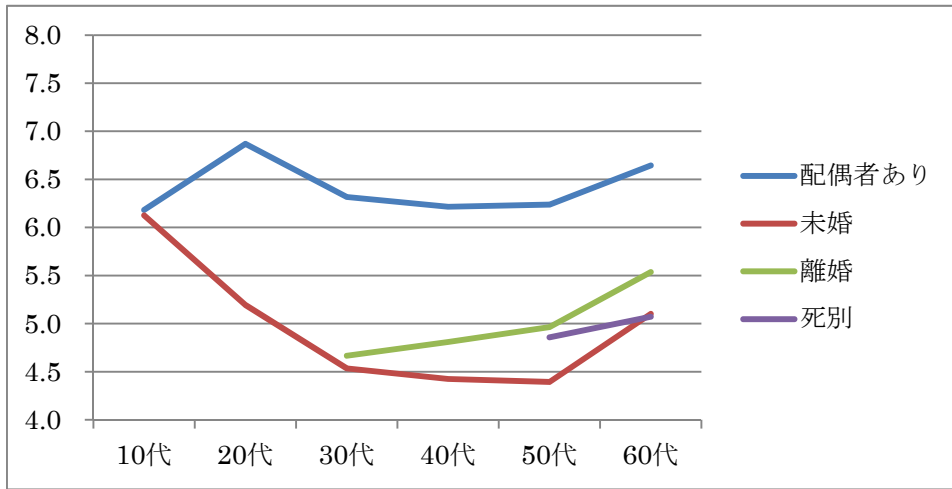
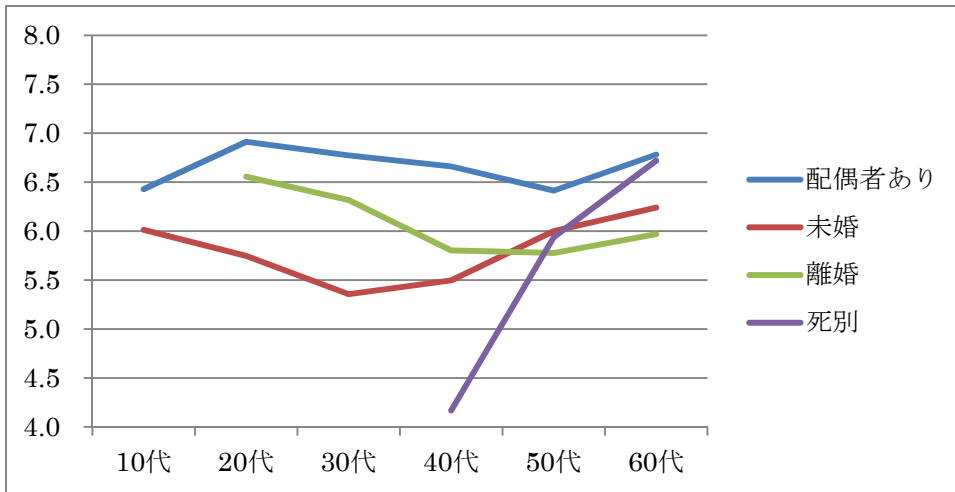
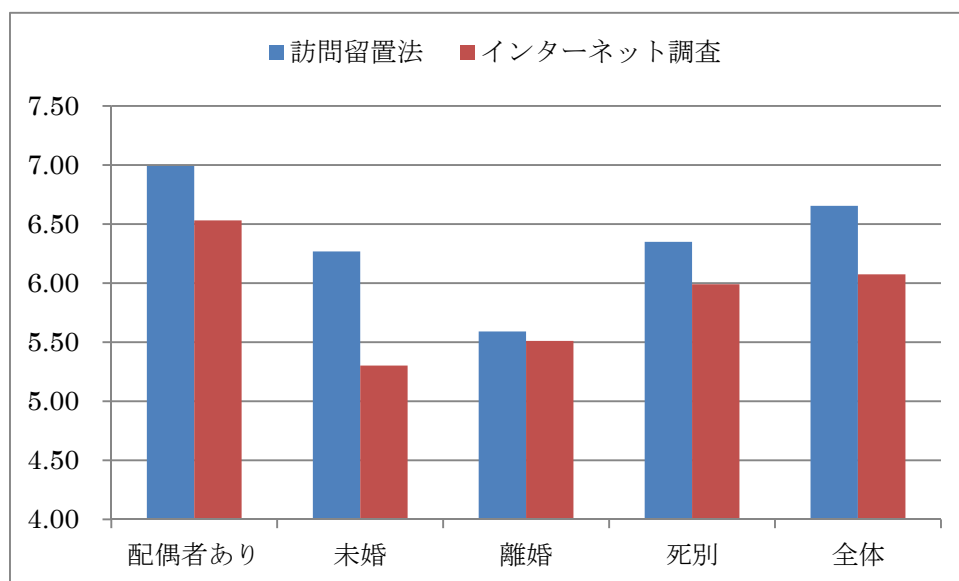


図 49-2 女性の年齢別、配偶状態別の現在の幸福感



訪問留置法と比較すると、インターネット調査では、未婚の人の幸福感が全体の傾向よりさらに低く出ている(図 50)。

図 50 調査形態別の配偶状態と幸福感



④子どもの数

別居、同居を問わず、年齢別に子どもの数を聞いたところ、表 39 のような回答となった。50 代以上回答者が全体の 4 割を超えていることから、子どもがいると回答した人のうち、20 歳を超える子どもがいるという回答が、最も多かった。

表 39 子どもの年齢と数 (%)

	いない	1 人	2 人	3 人以上
20 歳以上の子どもがいる	65.5	8.6	19.0	6.9
中学を卒業し 20 歳未満の子どもがいる	90.8	6.8	2.1	0.3
小学生または中学生の子どもがいる	86.7	8.3	4.3	0.7
6 歳未満の子どもがいる	89.4	7.6	2.6	0.4

子どもの年齢・数別、回答者の年代別に現在の幸福感を見ると(回答者数が10に満たないセルのデータは除いた)、子どもの有無は、全ての世代で幸福と明確に関係するが、親の年代と子供の年齢にも明確な関係があり、20 歳以上の子どもがいる場合、60 代で幸福が最大となっている。小学生または中学生の子どもがいる 30 代、40 代は、子どものいない同世代より、幸福であり、6 歳未満の子どもがいる親は、世代を問わず、かなり幸福である。

表 40 子どもの年齢・数、親の年代別の、親の現在の幸福感

子どもの年齢	子どもの数	親の年代					
		10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代
20 歳以上の子どもがいる	0	6.1	5.7	5.9	6.0	5.7	6.2
	1				6.1	6.0	6.4
	2				6.0	6.4	6.7
	3				5.7	6.4	6.7
中学を卒業し 20 歳未満の子どもがいる	0	6.1	5.7	5.9	5.9	6.1	6.6
	1	6.5		5.7	6.3	6.1	6.6
	2				6.0	5.8	
	3					6.4	
小学生または中学生の子どもがいる	0	6.1	5.7	5.7	5.7	6.1	6.6
	1		5.7	6.4	6.3	6.0	6.8
	2			6.5	6.5	6.4	
	3			6.2	6.6		
6 歳未満の子どもがいる	0	6.1	5.5	5.5	5.9	6.1	6.6
	1		7.2	6.6	6.9	7.2	
	2		7.3	6.7	6.6		
	3			7.4			

②社会的接触頻度(直接会う場合)

親しい人々と直接会う頻度を聞いたところ、配偶者とはほとんどの人々が同居中か、該当者がいなかった。配偶者以外は、同居していない両親・兄弟姉妹との接触頻度は、年数回が最も多かった。友人との接触頻度は月1, 2回が最も多かった。1割以上の回答者が友人の選択肢で、「該当者がいない」と回答している。

表 41 両親、子ども、兄弟姉妹、親族、友人と直接会う回数 (%)

	同居中	毎日	2, 3日に一回	最低週に1回	月1, 2回	年数回	それ以下	音信不通で所在不明	該当者がいない	無回答
配偶者	59.3	0.2	0.1	0.2	0.4	0.4	0.2	0.0		39.1
あなたの子ども	38.7	1.1	0.9	1.6	4.7	7.2	1.7	0.3		43.7
あなたの両親	30.2	2.9	2.6	5.7	13.5	17.6	6.0	0.3	21.2	
あなたの配偶者の両親	3.3	1.6	0.9	2.4	10.0	17.2	8.6	0.4	24.0	31.6
あなたの兄弟姉妹	13.0	1.9	1.3	3.6	14.1	35.2	17.1	1.0	12.9	
あなたの配偶者の兄弟姉妹	0.2	1.0	0.3	1.2	6.8	25.8	20.5	0.7	11.7	31.6
その他の親族	3.4	1.1	0.5	1.0	5.3	30.6	45.1	0.8	12.3	
友人	0.9	4.9	6.4	10.8	26.8	26.0	12.3	0.7	11.3	

さらに、対象者と年代別にみると、配偶者の場合、ほとんどすべての年代で、該当者がいる場合には、同居中であった。

表 42 ①配偶者との接触頻度

	同居中	毎日	2, 3日に一回	最低週に1回	月1, 2回	年数回	それ以下	音信不通で所在不明	該当者がいない・無回答
10代	2%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	97%
20代	20%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	79%
30代	57%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	42%
40代	67%	0%	0%	0%	1%	1%	0%	0%	31%
50代	77%	0%	0%	0%	1%	1%	0%	0%	21%
60代	81%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	17%

子どもとの接触頻度は、30代以降、該当者がいる場合、同居以外の回答が年代を追うごとに増えているが、60代でも35%の回答者が同居中と回答している。同居以外の場合は、年数回が多い。

表 42 ②あなたの子どもとの接触頻度

	同居中	毎日	2, 3 日に一回	最低週に1回	月1, 2回	年数回	それ以下	音信不通で所在不明	該当者がいない・無回答
10代	2%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	97%
20代	12%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	87%
30代	42%	0%	0%	0%	0%	0%	1%	0%	57%
40代	56%	0%	0%	0%	1%	3%	1%	0%	39%
50代	53%	2%	1%	2%	7%	11%	2%	0%	22%
60代	35%	3%	3%	5%	15%	21%	5%	0%	12%

両親と接触頻度は、10代では90%以上が同居しているものの、年代を追うごとに同居は急激に低下する。同居以外では、年数回が多い。

表 42③あなたの両親

	同居中	毎日	2, 3 日に一回	最低週に1回	月1, 2回	年数回	それ以下	音信不通で所在不明	該当者がいない
10代	93%	0%	0%	0%	1%	4%	0%	0%	1%
20代	58%	2%	1%	3%	12%	17%	3%	0%	3%
30代	32%	3%	4%	8%	19%	23%	6%	0%	3%
40代	24%	4%	3%	8%	20%	24%	9%	1%	7%
50代	18%	4%	3%	7%	14%	19%	9%	0%	24%
60代	9%	2%	2%	3%	7%	9%	5%	0%	64%

配偶者の両親との接触頻度は該当者いる場合でも年数回が最も多い。無回答が多くなっているが、これは、本調査で配偶者がいないと回答した人を自動的に無回答に割り振ったためであり、無回答なのか、該当者がいないのかは、厳密には分からない。

表 42④あなたの配偶者の両親

	同居中	毎日	2, 3 日に一回	最低週に1回	月1, 2回	年数回	それ以下	音信不通で所在不明	該当者がいない	無回答
10代	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	1%	97%
20代	1%	0%	0%	1%	7%	8%	2%	0%	2%	78%
30代	3%	1%	1%	4%	17%	24%	6%	0%	5%	39%
40代	5%	2%	1%	3%	13%	26%	13%	1%	14%	22%
50代	6%	3%	1%	3%	10%	20%	15%	0%	32%	10%
60代	3%	1%	0%	1%	5%	12%	8%	0%	64%	4%

兄弟姉妹との接触頻度も同居中は年代を追うごとに急速に低下し、同居以外では、年数回の接触頻度という回答が最も多い。

表 42⑤あなたの兄弟姉妹

	同居中	毎日	2, 3 日に一回	最低週に1回	月1, 2回	年数回	それ以下	音信不通で所在不明	該当者がいない
10代	71%	1%	0%	1%	3%	8%	1%	0%	14%
20代	34%	1%	1%	3%	13%	28%	6%	1%	13%
30代	11%	2%	2%	5%	17%	39%	13%	1%	11%
40代	5%	2%	1%	4%	16%	39%	19%	1%	14%
50代	3%	2%	1%	3%	14%	41%	22%	1%	13%
60代	1%	2%	2%	3%	14%	36%	26%	1%	14%

配偶者の兄弟姉妹との接触頻度は、年数回、もしくはそれ以下という回答が多い。

表 42⑥あなたの配偶者の兄弟姉妹

	同居中	毎日	2, 3 日に一回	最低週に1回	月1, 2回	年数回	それ以下	音信不通で所在不明	該当者がいない	無回答
10代	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	2%	97%
20代	0%	0%	0%	1%	3%	10%	4%	0%	3%	78%
30代	0%	0%	0%	2%	9%	28%	14%	1%	8%	39%
40代	0%	1%	0%	1%	7%	30%	23%	1%	14%	22%
50代	0%	2%	0%	1%	7%	31%	31%	1%	16%	10%
60代	0%	1%	0%	2%	8%	33%	32%	1%	18%	4%

その他の親族との接触頻度も、年数回、もしくはそれ以下が多い。祖父母も含まれることから、10代では同居中も13%という回答になっている。

表 42⑦その他の親族(祖父母も含まれる)

	同居中	毎日	2, 3 日に一回	最低週に1回	月1, 2回	年数回	それ以下	音信不通で所在不明	該当者がいない
10代	13%	2%	1%	3%	12%	32%	11%	0%	26%
20代	10%	1%	1%	1%	8%	36%	27%	1%	15%
30代	3%	1%	1%	1%	5%	36%	44%	1%	10%
40代	1%	1%	0%	1%	4%	30%	51%	1%	10%
50代	1%	2%	0%	1%	5%	27%	55%	1%	9%
60代	1%	1%	0%	1%	4%	26%	53%	1%	13%

友人との接触頻度は、10代では、毎日という回答が27%と他の年代と比較して、非常に多い。しかし、一方で、該当者がいないという回答も10代では29%と非常に高くなっている。30代、40代では年数回が最も多く、50代、60代では月1, 2回が多い。

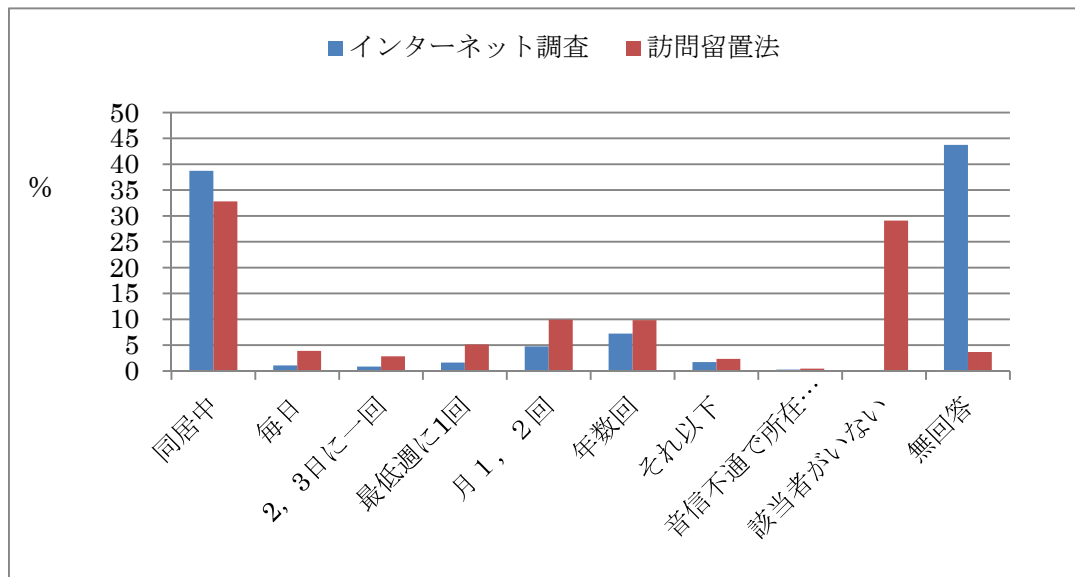
表 42⑧友人

	同居中	毎日	2, 3 日に一回	最低週に1回	月1, 2回	年数回	それ以下	音信不通で所在不明	該当者がいない
10代	1%	27%	14%	9%	11%	4%	4%	0%	29%
20代	2%	4%	8%	10%	29%	22%	8%	1%	17%
30代	1%	2%	4%	10%	27%	33%	13%	1%	9%
40代	1%	3%	5%	9%	27%	29%	15%	1%	9%
50代	1%	4%	5%	12%	28%	26%	16%	0%	8%
60代	0%	3%	8%	14%	29%	26%	11%	0%	9%

子どもと友人との接触頻度について、訪問留置法とインターネット調査で回答の違いを調べたところ、子どもについてはインターネット調査の方が同居とする回答が多く、訪問留置法の方が、頻度の回答にばらつきがあるという違いがある(図 51)。また、該当者不在と無回答については扱ひ方が訪問留置法とインターネット調査で異なることから、厳密な比較ができない⁶。

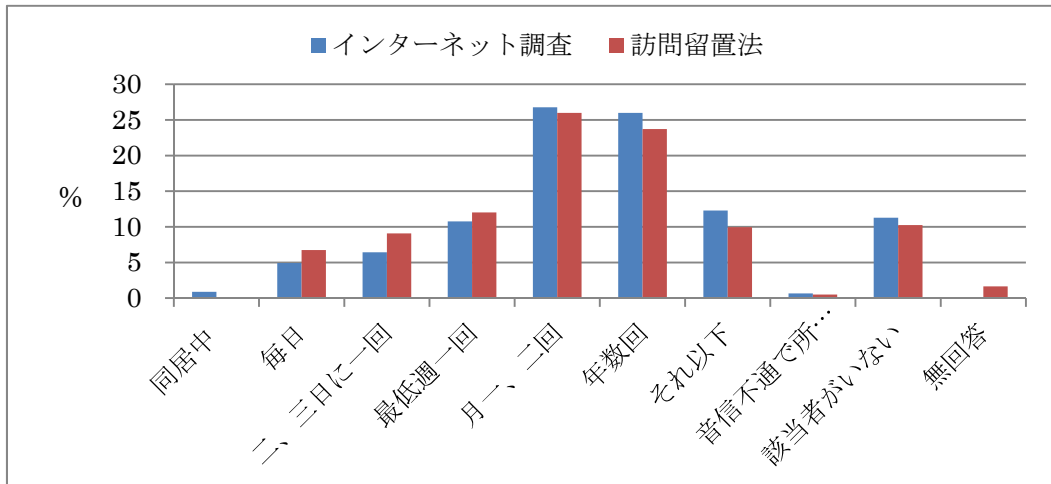
一方、友人との接触頻度については、訪問留置法の回答者の方が、やや接触頻度が高い回答が多かったが、全体としての傾向に違いは見当たらない。

図 51① 直接会う回数のインターネット調査と訪問留置法の違い: 子ども



⁶ インターネット調査では、問の 24 で子どもがいると回答した人だけに質問を聞くことが可能であったため、「該当者がいない」を選択肢から外したためである。

図 51② 直接会う回数のインターネット調査と訪問留置法の違い:友人



接触頻度ごとの現在の幸福感を見ると、同居、毎日会うという間柄が必ずしも現在の幸福感につながっているわけではなく、2, 3日に一回程度で、ピークにくる対人関係が多い(図 52)。訪問留置法では、自身の子どもの接触頻度が多ければ多いほど、幸福感が高かったが、インターネット調査では、そのような関係になっていない。

図 52① 接触頻度と現在の幸福感:配偶者、子ども、両親

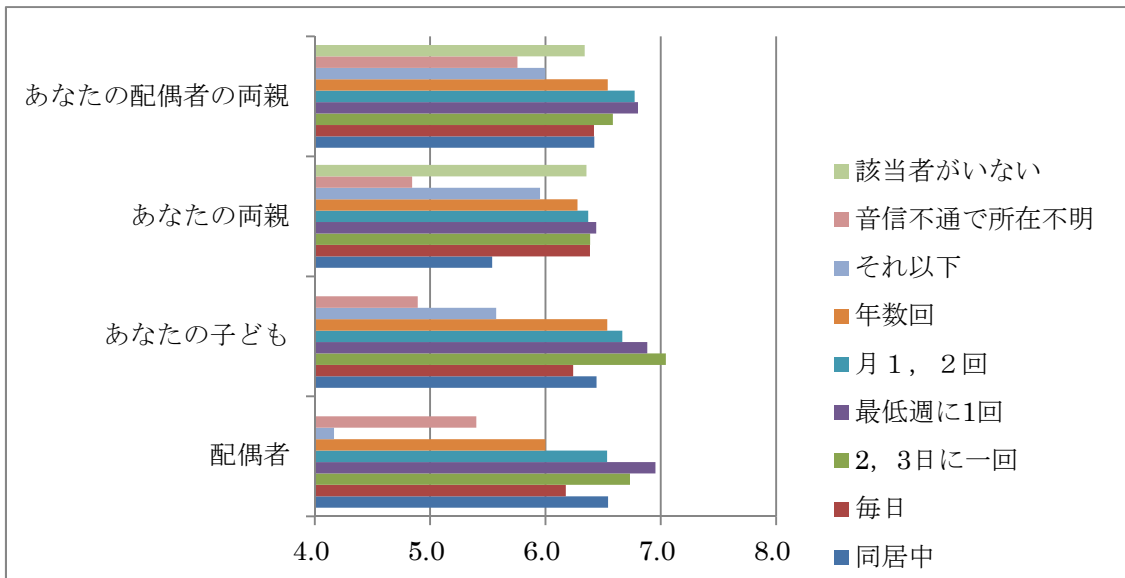
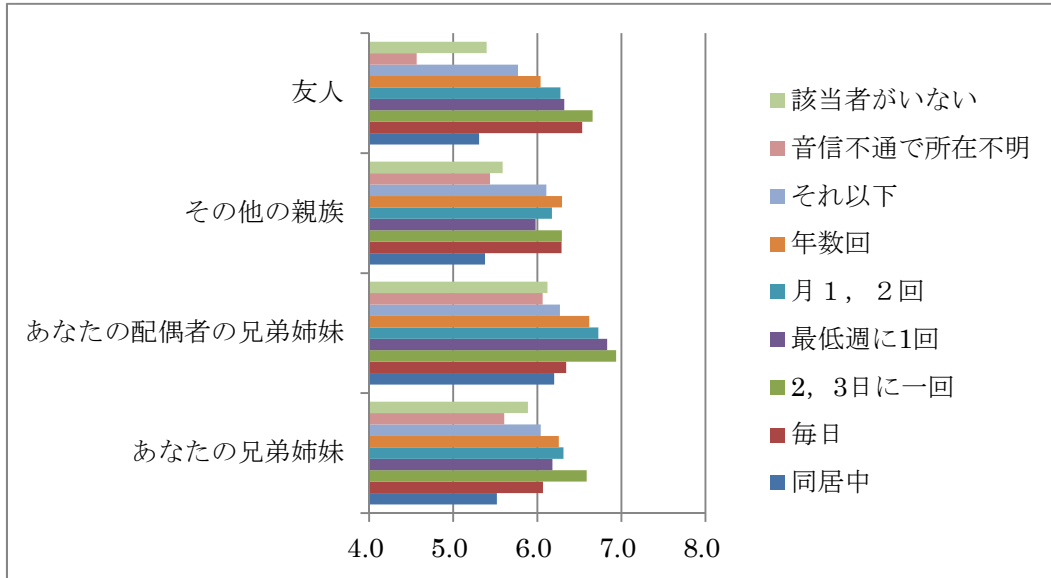


図 52② 接触頻度と現在の幸福感: 兄弟姉妹、親族、友人



②⑥ 社会的接触頻度(電話、電子メール、手紙)

同居していない人との電話や、電子メール、手紙を通じた接触頻度について、聞いてみたところ、配偶者との間では、「毎日」という回答が最も多かった(表 43)。訪問留置法と異なり、インターネット調査では、前問で既に確認できている「同居中」、「音信不通」、「該当者なし」については、敢えて繰り返していない。このため、回答者総数が、配偶者の場合特に大きく減少していることに留意が必要である。接触頻度については、子ども、両親とも「月に1, 2回」という回答が多かった。兄弟姉妹とは「年数回」という回答が最も多く、配偶者の両親、配偶者の兄弟姉妹、その他の親族とは「やり取りをしていない」という回答が最も多かった。

表 43 電話、電子メール、手紙による接触頻度 (%)

	毎日	2, 3 日に 一回	最低 週に1 回	月1, 2回	年数 回	それ 以下	やり 取り をし てい ない	回答 者総 数
配偶者	28.4	15.4	20.4	14.2	7.4	3.7	10.5	162
あなたの子ども	8.5	14.7	21.1	33.3	15.2	2.9	4.3	1809
あなたの両親	4.5	9.6	17.2	32.4	16.3	5.7	14.3	5061
あなたの配偶者の両親	1.5	2.2	5.9	21.0	25.1	14.8	29.6	4259
あなたの兄弟姉妹	1.2	3.5	7.1	25.9	34.8	14.9	12.7	7651
あなたの配偶者の兄弟姉妹	0.4	0.6	1.8	10.4	30.5	24.9	31.4	5831
その他の親族	0.4	0.6	1.6	7.0	24.5	31.9	34.1	8733
友人	5.3	11.8	16.4	30.1	21.2	9.5	5.7	9128

直接会う場合と比較しやすいように、同居中のデータ並びに該当者がいない、無回答を加え、年代別に整理したのが、以下の表 44 である。配偶者と接触頻度は、同居が多いため、直接会う場合と電話等でほとんど変わらない。子どもとの接触頻度は、50代、60代で毎日、2, 3日に一回、最低週に一回の接触頻度が電話等の方が多くなっている。両親や兄弟姉妹との接触頻度は、20代、30代、40代、50代で、2, 3日に一回、最低週に一回、月に1, 2回の接触頻度が多くなっている。配偶者の両親、配偶者の兄弟姉妹、その他の親族との接触頻度は電話等の方がむしろ少ない。友人との接触頻度も、10代が毎日会うケースを除いて、接触頻度が、電話等の方が多い。

表 44①配偶者との電話、電子メール、手紙による接触頻度

	同居中	毎日	2, 3 日に一回	最低週に1回	月1, 2回	年数回	それ以下	やり取りをしていない	該当者がいない・無回答
10代	2%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	97%
20代	20%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	79%
30代	57%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	43%
40代	67%	1%	1%	1%	0%	0%	0%	0%	31%
50代	77%	1%	0%	0%	1%	0%	0%	0%	21%
60代	81%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	17%

構成比の差(電話等一直接会う)

	同居中	毎日	2, 3 日に一回	最低週に1回	月1, 2回	年数回	それ以下	やり取りをしていない	該当者がいない・無回答
10代	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
20代	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
30代	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
40代	0%	0%	0%	0%	-1%	0%	0%	0%	0%
50代	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
60代	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%

表 44②あなたの子どもの電話、電子メール、手紙による接触頻度

	同居中	毎日	2, 3 日に一回	最低週に1回	月1, 2回	年数回	それ以下	やり取りをしていない	該当者がいない・無回答
10代	2%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	97%
20代	12%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	87%
30代	42%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	57%
40代	56%	0%	1%	1%	1%	1%	0%	0%	39%
50代	53%	2%	3%	6%	8%	3%	1%	1%	22%
60代	35%	4%	8%	11%	18%	9%	1%	2%	13%

構成比の差(電話等一直接会う)

	同居中	毎日	2, 3 日に一回	最低週に1回	月1, 2回	年数回	それ以下	やり取りをしていない	該当者がいない・無回答
10代	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
20代	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
30代	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
40代	0%	0%	1%	1%	0%	-2%	0%	0%	0%
50代	0%	1%	2%	4%	2%	-8%	-2%	1%	0%
60代	0%	1%	5%	5%	3%	-12%	-3%	1%	0%

表 44③あなたの両親との電話、電子メール、手紙による接触頻度

	同居中	毎日	2, 3 日に一回	最低週に1回	月1, 2回	年数回	それ以下	やり取りをしていない	該当者がいない・無回答
10代	93%	1%	1%	1%	3%	0%	0%	0%	1%
20代	58%	3%	5%	9%	15%	5%	1%	1%	3%
30代	32%	4%	7%	12%	24%	10%	3%	4%	4%
40代	24%	2%	6%	11%	23%	11%	4%	11%	8%
50代	18%	3%	5%	9%	16%	9%	4%	12%	25%
60代	9%	1%	2%	3%	6%	5%	3%	7%	64%

構成比の差(電話等—直接会う)

	同居中	毎日	2, 3 日に一回	最低週に1回	月1, 2回	年数回	それ以下	やり取りをしていない	該当者がいない・無回答
10代	0%	0%	1%	0%	2%	-4%	0%	0%	0%
20代	0%	1%	4%	6%	3%	-12%	-2%	1%	0%
30代	0%	0%	3%	4%	5%	-13%	-3%	4%	0%
40代	0%	-2%	3%	3%	3%	-13%	-5%	10%	1%
50代	0%	-2%	2%	2%	1%	-10%	-5%	11%	0%
60代	0%	-1%	0%	0%	-1%	-4%	-2%	7%	0%

表 44④あなたの配偶者の両親との電話、電子メール、手紙による接触頻度

	同居中	毎日	2, 3 日に一回	最低週に1回	月1, 2回	年数回	それ以下	やり取りをしていない	該当者がいない・無回答
10代	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	99%
20代	1%	0%	1%	2%	6%	4%	2%	4%	80%
30代	3%	1%	1%	4%	13%	14%	7%	14%	44%
40代	5%	0%	1%	3%	12%	15%	9%	18%	37%
50代	6%	1%	1%	3%	9%	13%	8%	17%	42%
60代	3%	1%	0%	1%	5%	7%	5%	9%	69%

構成比の差(電話等—直接会う)

	同居中	毎日	2, 3 日に一回	最低週に1回	月1, 2回	年数回	それ以下	やり取りをしていない	該当者がいない・無回答
10代	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
20代	0%	0%	0%	0%	-1%	-4%	0%	4%	0%
30代	0%	0%	0%	0%	-4%	-9%	0%	14%	0%
40代	0%	-2%	0%	0%	-1%	-11%	-4%	17%	1%
50代	0%	-2%	0%	0%	-1%	-8%	-6%	16%	0%
60代	0%	-1%	0%	0%	0%	-5%	-3%	9%	0%

表 44⑤あなたの兄弟姉妹との電話、電子メール、手紙による接触頻度

	同居中	毎日	2, 3 日に一回	最低週に1回	月1, 2回	年数回	それ以下	やり取りをしていない	該当者がいない・無回答
10代	71%	0%	1%	3%	5%	2%	1%	3%	15%
20代	34%	1%	3%	6%	16%	16%	6%	6%	13%
30代	11%	1%	3%	6%	22%	24%	11%	11%	11%
40代	5%	1%	2%	5%	19%	27%	14%	13%	15%
50代	3%	1%	3%	5%	20%	32%	13%	11%	14%
60代	1%	1%	3%	5%	21%	32%	13%	8%	15%

構成比の差(電話等一直接会う)

	同居中	毎日	2, 3 日に一回	最低週に1回	月1, 2回	年数回	それ以下	やり取りをしていない	該当者がいない・無回答
10代	0%	-1%	0%	2%	2%	-5%	0%	2%	0%
20代	0%	0%	1%	2%	3%	-12%	0%	5%	1%
30代	0%	-1%	2%	1%	4%	-14%	-2%	10%	1%
40代	0%	-2%	1%	1%	3%	-12%	-5%	12%	1%
50代	0%	-2%	1%	2%	6%	-10%	-9%	10%	1%
60代	0%	-1%	1%	2%	7%	-4%	-13%	7%	1%

表 44⑥あなたの配偶者の兄弟姉妹との電話、電子メール、手紙による接触頻度

	同居中	毎日	2, 3 日に一回	最低週に1回	月1, 2回	年数回	それ以下	やり取りをしていない	該当者がいない・無回答
10代	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	99%
20代	0%	0%	0%	0%	3%	4%	3%	8%	82%
30代	0%	0%	0%	1%	5%	13%	12%	21%	47%
40代	0%	0%	0%	1%	5%	17%	17%	23%	37%
50代	0%	0%	0%	2%	7%	22%	18%	22%	27%
60代	0%	0%	1%	2%	10%	28%	20%	16%	23%

構成比の差(電話等一直接会う)

	同居中	毎日	2, 3 日に一回	最低週に1回	月1, 2回	年数回	それ以下	やり取りをしていない	該当者がいない・無回答
10代	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
20代	0%	0%	0%	0%	-1%	-5%	-1%	8%	0%
30代	0%	0%	0%	-1%	-4%	-14%	-2%	21%	1%
40代	0%	-1%	0%	0%	-3%	-13%	-6%	22%	1%
50代	0%	-1%	0%	0%	0%	-9%	-12%	21%	1%
60代	0%	-1%	0%	0%	2%	-5%	-12%	15%	1%

表 44⑦その他の親族(祖父母を含む)との電話、電子メール、手紙による接触頻度

	同居中	毎日	2, 3 日に一回	最低週に1回	月1, 2回	年数回	それ以下	やり取りをしていない	該当者がいない・無回答
10代	13%	1%	2%	4%	11%	14%	8%	21%	27%
20代	10%	1%	1%	2%	8%	17%	16%	29%	16%
30代	3%	0%	0%	1%	5%	19%	25%	36%	11%
40代	1%	0%	0%	1%	4%	18%	30%	33%	11%
50代	1%	0%	0%	1%	5%	23%	31%	29%	10%
60代	1%	0%	0%	1%	5%	25%	33%	19%	14%

構成比の差(電話等一直接会う)

	同居中	毎日	2, 3 日に一回	最低週に1回	月1, 2回	年数回	それ以下	やり取りをしていない	該当者がいない・無回答
10代	0%	-1%	1%	1%	0%	-18%	-4%	20%	0%
20代	0%	-1%	0%	0%	0%	-19%	-11%	29%	1%
30代	0%	0%	0%	0%	0%	-17%	-19%	35%	1%
40代	0%	-1%	0%	0%	0%	-11%	-22%	32%	1%
50代	0%	-1%	0%	0%	0%	-4%	-24%	28%	1%
60代	0%	-1%	0%	0%	2%	-1%	-20%	18%	1%

表 44⑧友人との電話、電子メール、手紙による接触頻度

	同居中	毎日	2, 3 日に一回	最低週に1回	月1, 2回	年数回	それ以下	やり取りをしていない	該当者がいない・無回答
10代	1%	15%	21%	15%	11%	3%	2%	2%	29%
20代	2%	6%	10%	16%	27%	14%	4%	4%	17%
30代	1%	4%	10%	14%	28%	21%	8%	5%	10%
40代	1%	4%	9%	15%	25%	20%	11%	6%	10%
50代	1%	4%	9%	13%	27%	20%	11%	7%	9%
60代	0%	3%	10%	14%	30%	21%	9%	4%	9%

構成比の差(電話等一直接会う)

	同居中	毎日	2, 3 日に一回	最低週に1回	月1, 2回	年数回	それ以下	やり取りをしていない	該当者がいない・無回答
10代	0%	-13%	7%	6%	0%	-1%	-2%	2%	0%
20代	0%	2%	3%	6%	-2%	-8%	-4%	3%	1%
30代	0%	2%	6%	4%	1%	-12%	-5%	4%	1%
40代	0%	1%	4%	6%	-2%	-10%	-5%	5%	1%
50代	0%	0%	4%	1%	-1%	-5%	-4%	6%	0%
60代	0%	0%	2%	1%	1%	-5%	-2%	4%	0%

現在の幸福感との関係を見ると、「配偶者の両親」、「その他親族」を除くと接触頻度の多さと現在の幸福感に相関関係が窺える(図 53)。

図 53① 電話やメールを通じた接触頻度と現在の幸福感:配偶者、子ども両親他

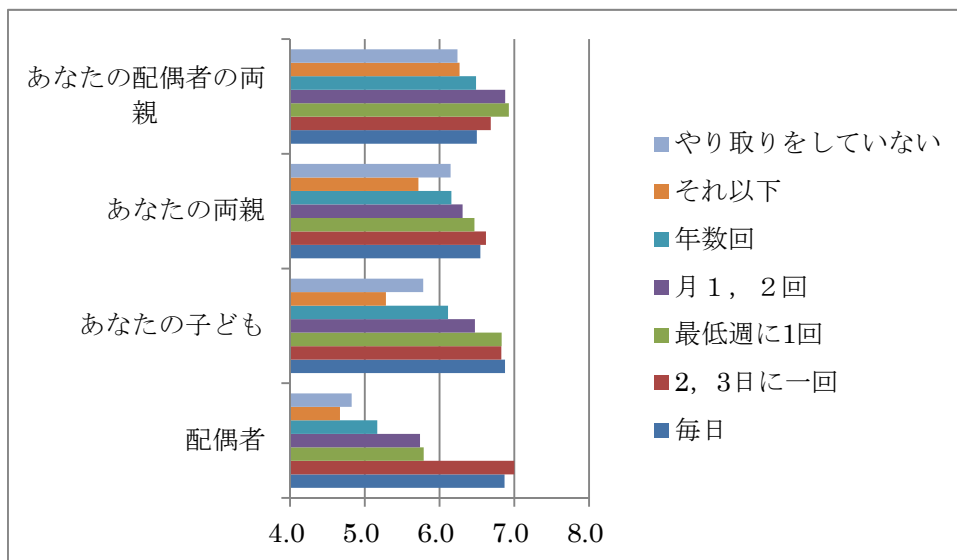
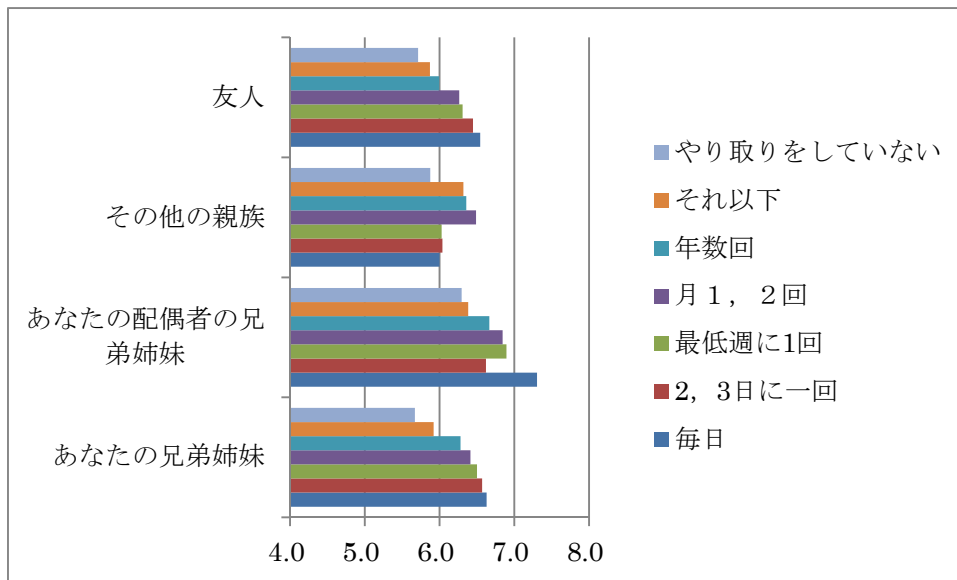


図 53② 電話やメールを通じた接触頻度と現在の幸福感:配偶者、子ども両親他



②別居している子どもの居住地

別居している子ども居住地について聞いたところ、半数近くの回答者が、別の都道府県あるいは国外と回答した。なお、子どもと同居している回答者数(問 25 から)は、4054 であった。

表 45 別居している子どもの居住地

	回答者数	比率(%)
同じ敷地内	56	3.1
同じ市区町村内	457	25.3
同じ都道府県内	444	24.5
別の都道府県あるいは国外	852	47.1
全体	1,809	100

同居も含め、親の年代別の子どもの居住地は以下の表 46 の通りであり、40 代までは、ほとんど同居している。10 代はサンプル数が少ないので掲載していない。

表 46 親の年代別の子どもの居住地

	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代
同居	97%	97%	92%	68%	41%
同じ敷地内	2%	0%	0%	1%	2%
同じ市区町村内	0%	0%	2%	7%	17%
同じ都道府県内	1%	1%	2%	9%	14%
別の都道府県あるいは国外	1%	1%	5%	16%	27%
全体	100%	100%	100%	100%	100%

子どもの居住地と親の現在の幸福感を見ると、40 代では、同居以外では幸福感が著しく低いが、50 代以降は、このような傾向はなくなる。なお、サンプル数が少ないセルのデータを除いているため、データ数があまり多くない。

表 47 子どもの居住地別親の現在の幸福感

	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代
同居	7.0	6.6	6.4	6.2	6.5
同じ敷地内					6.8
同じ市区町村内			5.3	6.3	6.8
同じ都道府県内			5.3	6.2	6.6
別の都道府県あるいは国外		4.2	5.8	6.4	6.7
全体	7.0	6.5	6.3	6.2	6.6

㊸別居している親の居住地

別居している親の居住地について聞いたところ、回答者の4割が、別の都道府県あるいは国外と回答した(表48)。なお、親と同居している回答者数(問25から)は、3160であった。

表48 別居している親の居住地

	回答者数	比率(%)
同じ敷地内	187	3.7
同じ市区町村内	1,431	28.3
同じ都道府県内	1,393	27.5
別の都道府県あるいは国外	2,023	40.0
両親はいない	27	0.5
全体	5,061	100

問25を用いて、同居のケース、及び該当者がいない、もしくは音信不通も加えて年代別に整理したのが、以下の表49である。

表49 年代別親の居住地(比率)

	10代	20代	30代	40代	50代	60代
同居	93%	58%	32%	24%	18%	9%
同じ敷地内	0%	1%	1%	3%	3%	1%
同じ市区町村内	0%	7%	20%	22%	16%	7%
同じ都道府県内	1%	10%	17%	19%	16%	8%
別の都道府県あるいは国外	4%	20%	25%	24%	22%	12%
該当者がいない、音信不通	1%	4%	4%	8%	25%	65%
全体	100%	100%	100%	100%	100%	100%

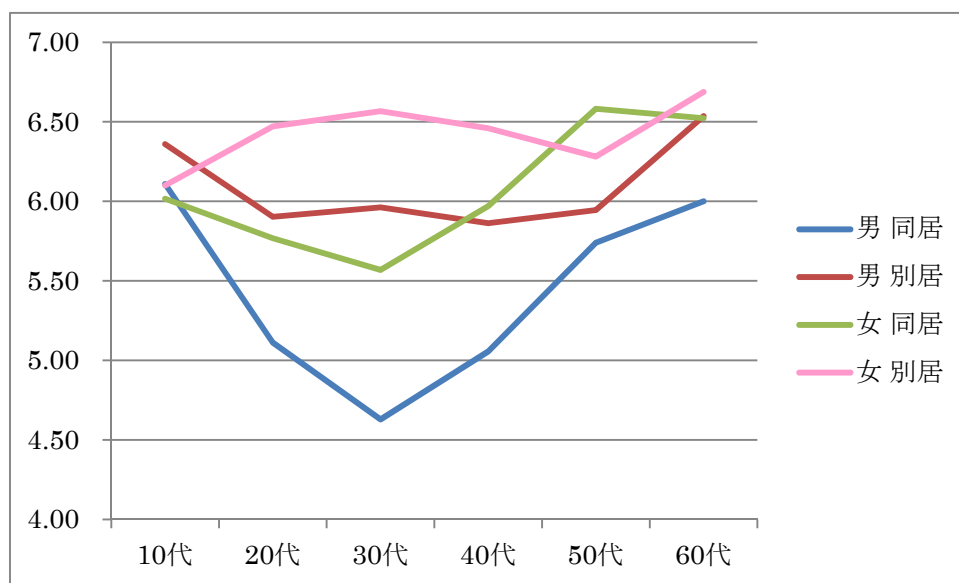
現在の幸福感との関係を見ると、20代以上では、親と同居すると回答した人の幸福感は同年代全体の平均より低い。なお、サンプル数が10以下のセルの値については掲載していない。

表50 親の居住地と現在の幸福感

	10代	20代	30代	40代	50代	60代
同居	6.1	5.4	4.9	5.4	5.9	6.2
同じ敷地内		7.3	6.5	6.2	6.3	6.0
同じ市区町村内		6.4	6.3	6.2	6.1	6.6
同じ都道府県内	5.7	6.2	6.4	6.3	6.0	6.6
別の都道府県あるいは国外	6.2	6.2	6.3	6.3	6.3	6.6
該当者がいない、音信不通		5.5	5.3	5.4	6.0	6.6
全体	6.1	5.7	5.9	6.0	6.1	6.6

親の同居と現在の幸福感の関係は、男女別にも、傾向に違いがあると思われるところ、同居・別居別、年代別、性別で現在の幸福感をグラフ化したのが、以下の図 54 である。男性・同居・30代の現在の幸福感が著しく低い。

図 54 性・年代・親との同居・別居の現在の幸福感



⑳両親も子どももない方にとって、最も交流のある親族の居住地

両親も子どももない方に、最も交流のある親族の居住地を聞いたところ、回答者の総数は 332 人であり、そのうち、「別の都道府県あるいは国外」、「誰とも交流していない」と回答した人が 4 割いた(表 51)。

表 51 親族の居住地

	回答者数	比率(%)
同じ敷地内	19	5.7
同じ市区町村内	96	28.9
同じ都道府県内	78	23.5
別の都道府県あるいは国外	110	33.1
誰とも交流していない	29	8.7
全体	332	100

⑩困難時助けてくれる人の数

病気や災害にあった際に助けてくれる家族・親類、友人、隣人の数を聞いたところ、8割以上の人が、「あなた・配偶者の両親」、「両親以外の家族・親類」、「友人」に助けてくれる人がいるとそれぞれに回答している(表 52)。一方、隣人については半数の人が「全くいない」と回答している。なお、これまでの回答において、両親がいない、もしくは親族がいないなど、明らかに本問の回答がクリアになっている方々には敢えて聞いていないため、回答者総数が調査の全体数に一致しない。また、訪問留置法では、このような条件付けは不可能であること、及び無回答者が存在することなどから、比較が困難となっている。

表 52 困難な時に助けてくれる人の数 (%)

	全くいない	1人	2人	3人	4人	5人	6人以上	回答者総数
あなた・配偶者の両親	14.1	22.2	40.7	10.7	12.4			8917
両親以外の家族・親族	15.2	13.2	22.0	11.4	8.4	4.3	25.5	10148
友人	18.5	11.1	18.7	15.0	6.0	5.9	24.8	9219
隣人	50.0	9.1	15.6	7.9	3.7	2.2	11.5	10469
その他	66.4	5.9	7.9	4.4	1.5	1.5	12.5	10469

年代別にみると、60代を除くと両親は助けてくれると考えている人が多い。また、両親以外の親族・友人も、助けてくれると考えている人が多い。20代、30代で特に隣人が助けてくれないと考えている人が多い。

表 53 年代別の困難な時に助けてくれる人の数:①あなた・配偶者の両親

	10代	20代	30代	40代	50代	60代
全くいない	11%	10%	8%	11%	18%	31%
1人	11%	12%	12%	20%	34%	44%
2人	66%	61%	45%	37%	29%	19%
3人	6%	6%	12%	16%	12%	5%
4人	5%	11%	23%	16%	7%	2%
5人						
6人以上						
合計	100%	100%	100%	100%	100%	100%

表 53 年代別の困難な時に助けてくれる人の数:②両親以外の家族・親族

	10代	20代	30代	40代	50代	60代
全くいない	14%	18%	18%	19%	14%	9%
1人	14%	15%	16%	14%	12%	10%
2人	22%	24%	24%	21%	23%	20%
3人	11%	11%	10%	9%	12%	15%
4人	11%	8%	7%	8%	8%	10%
5人	3%	3%	3%	4%	4%	7%
6人以上	25%	20%	23%	26%	27%	29%
合計	100%	100%	100%	100%	100%	100%

表 53 年代別の困難な時に助けてくれる人の数:③友人

	10代	20代	30代	40代	50代	60代
全くいない	17%	21%	19%	19%	18%	17%
1人	7%	10%	11%	11%	12%	12%
2人	12%	15%	19%	19%	20%	21%
3人	12%	15%	15%	15%	15%	16%
4人	7%	6%	6%	6%	5%	6%
5人	6%	6%	5%	5%	7%	7%
6人以上	39%	27%	26%	25%	23%	21%
合計	100%	100%	100%	100%	100%	100%

表 53 年代別の困難な時に助けてくれる人の数:④隣人

	10代	20代	30代	40代	50代	60代
全くいない	57%	72%	60%	50%	42%	33%
1人	7%	5%	8%	8%	11%	12%
2人	9%	10%	13%	15%	18%	22%
3人	8%	4%	6%	8%	10%	11%
4人	5%	2%	3%	4%	4%	5%
5人	2%	1%	1%	2%	2%	3%
6人以上	12%	5%	9%	13%	13%	14%
合計	100%	100%	100%	100%	100%	100%

表 53 年代別の困難な時に助けてくれる人の数:⑤その他

	10代	20代	30代	40代	50代	60代
全くいない	67%	74%	72%	67%	62%	60%
1人	6%	7%	5%	5%	6%	7%
2人	5%	5%	6%	8%	9%	11%
3人	5%	3%	3%	4%	6%	5%
4人	2%	1%	1%	1%	2%	2%
5人	2%	1%	1%	1%	2%	2%
6人以上	13%	8%	11%	13%	15%	13%
合計	100%	100%	100%	100%	100%	100%

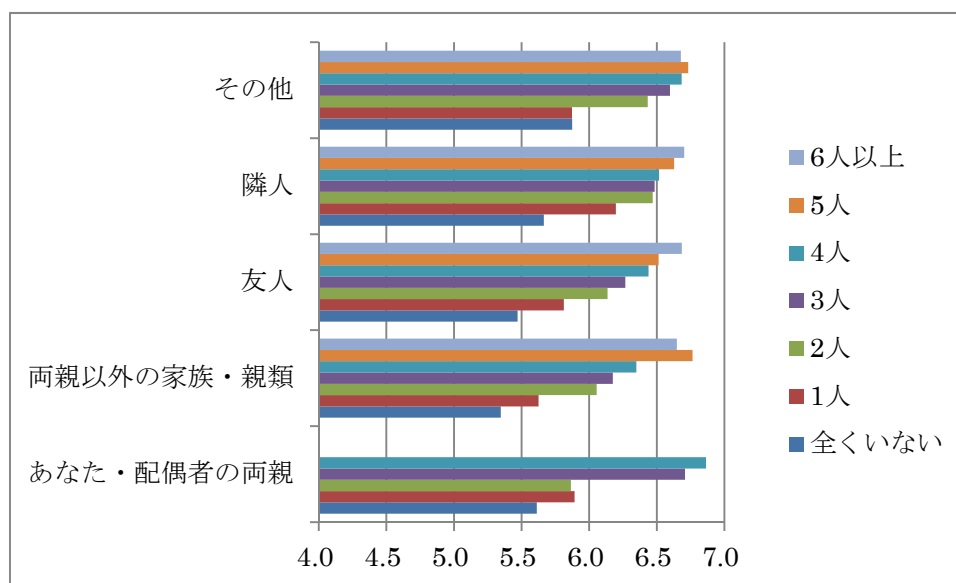
敢えて「全くいない」と回答した割合について比較したところ、あなた・配偶者の両親については、インターネット調査において割合が小さく、それ以外ではインターネット調査の方が割合が大きい（表 54）。

表 54 調査別の助けてくれる人がいないと回答した人の割合(%)

	インターネット調査	訪問留置法
あなた・配偶者の両親	14.1	37.9
両親以外の家族・親類	15.2	9.6
友人	18.5	17.5
隣人	50.0	36.0
その他	66.4	55.2

困難な時に助けてくれる人の数別に、現在の幸福感を見ると、それぞれのカテゴリーで助けてくれる人の数が多いと幸福感が高く、少ないと低いという関係が見て取れる。

図 55 助けてくれる人の数別の現在の幸福感



⑩介護等

家族・親族に要介護認定を受けた方や寝たきり状態の方、病気療養中の方がいるかどうか聞いたところ、要介護認定を受けた方がいる回答者は、約 18%であった(表 55)。訪問留置法と結果を比較すると、「要介護認定を受けられた方」を除くと、インターネット調査の方が「いない」とする回答の割合が高いが、訪問留置法においても無回答を加えると、数値に大きな違いはない(表 56)。

表 55 要介護認定、寝たきりの家族・親族がいると回答した人の割合(%)

	いない	同居の家族・親族にいる	別居の家族・親族にいる
要介護認定を受けられた方	81.8	4.4	13.8
寝たきり状態の方	94.5	1.2	4.4
病気療養中の方	86.0	5.0	9.0
障がい認定を受けられた方	85.7	5.6	8.7

表 56 (参考 訪問留置法における回答割合、%)

	いない	同居の家族・親族にいる	別居の家族・親族にいる	無回答
要介護認定を受けられた方	80.9	5.8	12.0	1.3
寝たきり状態の方	91.4	2.0	4.6	2.0
病気療養中の方	81.9	6.1	10.0	2.0
障がい認定を受けられた方	82.6	6.4	8.9	2.1

年代別にみると、要介護認定を受けられた方の比率は、50代、60代で高くなるが、それ以外には、年代による大きな違いは見当たらない。

表 57 年代別の世話をしている方の有無

①要介護認定を受けられた方

	10代	20代	30代	40代	50代	60代
いない	91%	89%	87%	86%	73%	73%
同居の家族・親族にいる	4%	2%	2%	3%	7%	6%
別居の家族・親族にいる	6%	9%	11%	11%	19%	20%
合計	100%	100%	100%	100%	100%	100%

②寝たきりの状態の方

	10代	20代	30代	40代	50代	60代
いない	94%	95%	95%	95%	94%	93%
同居の家族・親族にいる	3%	1%	1%	1%	1%	1%
別居の家族・親族にいる	3%	4%	4%	3%	5%	6%
合計	100%	100%	100%	100%	100%	100%

③病気療養中の方

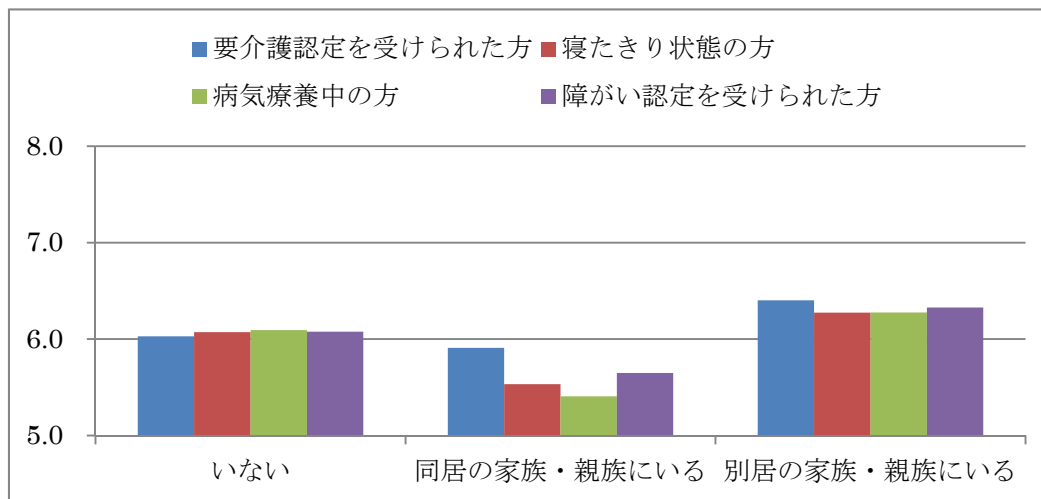
	10代	20代	30代	40代	50代	60代
いない	87%	88%	88%	86%	83%	85%
同居の家族・親族にいる	8%	5%	4%	5%	6%	5%
別居の家族・親族にいる	6%	7%	8%	9%	11%	10%
合計	100%	100%	100%	100%	100%	100%

④障がい認定を受けられた方

	10代	20代	30代	40代	50代	60代
いない	87%	89%	88%	84%	82%	86%
同居の家族・親族にいる	7%	4%	4%	6%	7%	6%
別居の家族・親族にいる	6%	7%	8%	10%	11%	8%
合計	100%	100%	100%	100%	100%	100%

一方、現在の幸福感との関係を見ると、訪問留置法における結果と同様、要介護認定等を受けた方が同居中の家族・親族にいる回答者の幸福感はやや低く、別居している場合は、やや高いという結果となった。

図 56 要介護認定等を受けた家族の・親族がいる人別の現在の幸福感



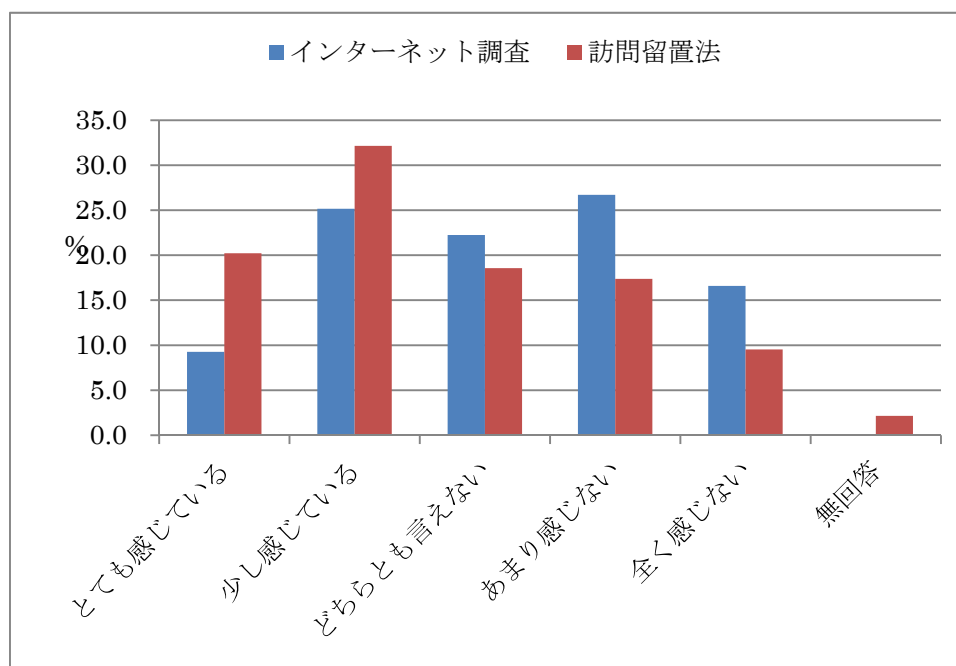
⑫介護等の負担感

家族・親族の中で寝たきり等の状態にあり、自分または同居の誰かが世話をしている人がいると答えた人に、負担感を聞いたところ、負担感を感じている人は負担感を感じていない人よりやや少ないという結果になった(表 58)。訪問留置法の結果を比較すると、負担感を感じている人の割合が小さい(図 57)。

表 58 介護等の負担感

	回答者数	比率(%)
該当数(総数)	3,182	100.0
とても感じている	295	9.3
少し感じている	801	25.2
どちらとも言えない	708	22.3
あまり感じない	850	26.7
全く感じない	528	16.6
感じている	1096	34.4
感じていない	1378	43.3

図 57 調査による負担感の違い



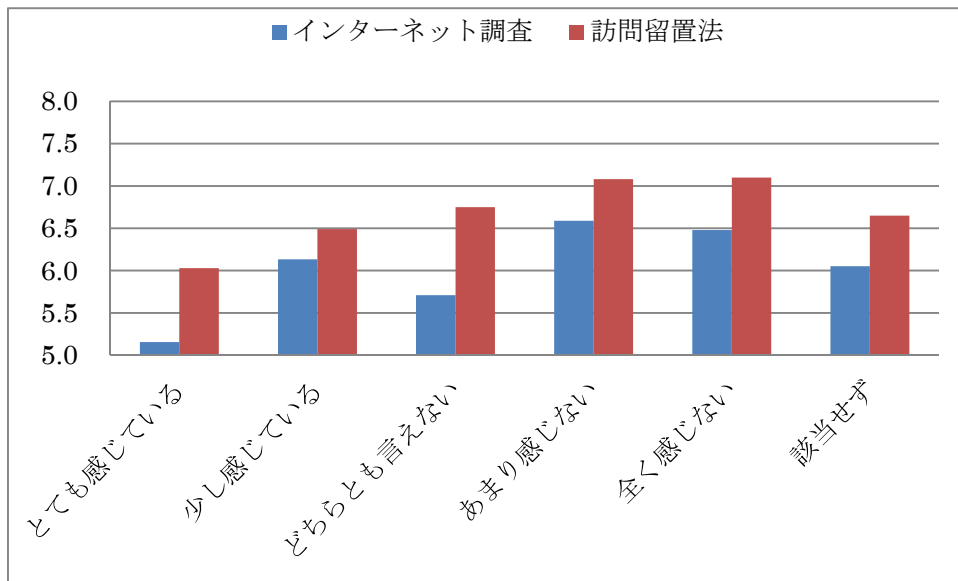
年代別の負担感をみると、年代が上がるにつて、負担感が強まっていることが分かる。

表 59 年代別の負担感

	10代	20代	30代	40代	50代	60代
とても感じている	5%	6%	6%	9%	10%	13%
少し感じている	15%	20%	15%	24%	32%	30%
どちらとも言えない	26%	20%	25%	23%	22%	20%
あまり感じない	21%	28%	30%	26%	25%	27%
全く感じない	34%	28%	23%	18%	11%	10%
合計	100%	100%	100%	100%	100%	100%

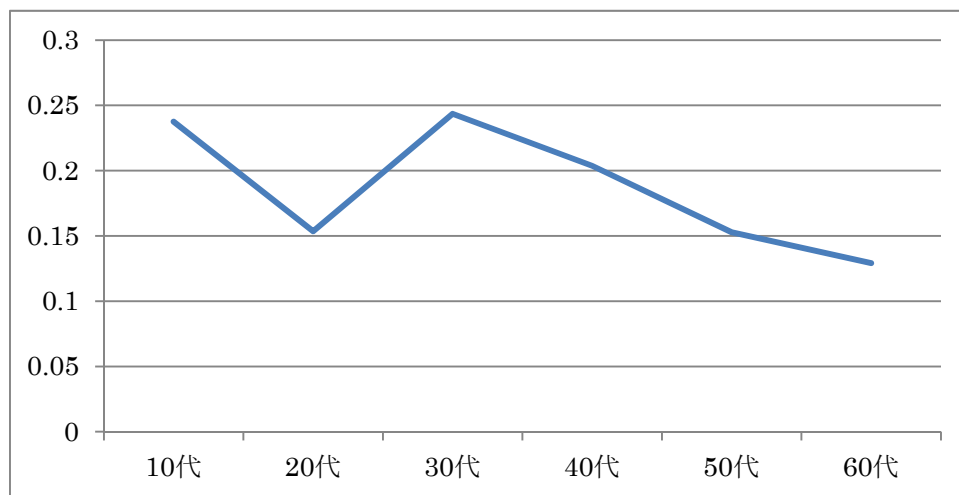
介護等の負担感と現在の幸福感の関係を見ると、負担をとて感じていると回答した人の幸福感が低い。また、負担を感じていない人の幸福感が該当しない人よりも高い。この二点では、訪問留置法の結果と一致している。一方、どちらとも言えないと回答した人の幸福感が、少し感じている人より低くなっており、この点は、訪問留置法の結果と異なる。

図 58 介護の負担感別の現在の幸福感：調査による違い



年代別に介護の負担感と現在の幸福感の相関係数を見ると、全ての年代で1%水準で相関係数が有意であり、介護負担感が弱いほど幸福であったが、10代で強く、20代一旦関係が弱まるが、30代で再び強まり、その後低下している(図 59)。

図 59 年代別介護負担感と幸福感(介護負担感が弱いほど幸福)



③抑うつ尺度

「気分が沈んで憂うつだ」、「朝方が一番気分がいい」など、抑うつ気分を測定するツング式自己評価式抑うつ尺度(Self-rating Depression Scale, 以下 SDS)⁷にある質問項目につき、聞いたところ、回答結果は、表 60 の通り。食欲と仕事に関する問を除き、肯定的、否定的な気分にかかわらず、「ないか、たまに」、「時々」という選択肢が最も多く選ばれていた。

表 60 自己評価式抑うつ尺度にある質問項目への回答(%)

		ない か、た まに	時々	しばし ば	いつも
否定的	気分が沈んで憂うつだ	51.7	33.8	10.1	4.4
肯定的	朝方が一番気分がいい	44.6	29.6	16.5	9.2
否定的	些細なことで泣いたり、泣きたくなる	65.0	24.6	7.9	2.5
否定的	夜、よく眠れない	55.3	28.1	11.2	5.4
肯定的	食欲は普通にある	8.2	9.1	16.0	66.7
肯定的	性欲は普通にある(異性の友人と付き合ってみたい)	32.4	25.4	19.1	23.1
否定的	最近やせてきたことに気付く	79.6	13.1	5.1	2.2
否定的	便秘している	62.5	22.7	8.6	6.2
否定的	普段より動悸がする	70.9	21.5	6.1	1.5
否定的	なんとなく疲れやすい	31.9	39.2	18.8	10.2
肯定的	気持ちはいつもさっぱりしている	24.1	32.2	26.8	17.0
肯定的	いつもと変わりなく仕事(身のまわりのこと)ができる	11.7	19.2	28.8	40.3
否定的	おちつかず、じっとしてられない	62.2	27.5	7.9	2.4
肯定的	将来に希望(楽しみ)がある	31.1	35.3	21.9	11.8
否定的	いつもよりイライラする	41.6	40.2	13.6	4.6
肯定的	迷わず物事を決めることができる	19.0	35.6	29.7	15.7
肯定的	役に立つ人間だと思う	26.5	42.4	22.3	8.8
肯定的	今の生活は充実していると思う(今の生活に張りがある)	25.2	33.8	28.0	13.0
否定的	自分が死んだ方が、他の人は楽に暮らせると思う	73.1	17.9	5.2	3.8
肯定的	今の生活に満足している	22.5	30.2	29.7	17.6

⁷抑うつ気分とは、うつ病の基本的な症状の一つで、「憂うつだ」、「気がめいる」、「気がしずむ」などの気分の落ち込みを表す症状のことである。自己評価式抑うつ尺度は、米国デューク大学のツング博士により考案された抑うつ傾向を評価する質問紙で、20項目の質問からなり、4段階で自己評定する。うつ病・うつ状態のスクリーニングや、うつ病の治療効果測定などの目的に使用される。質問内容は、感情・生理・心理面の症状についての項目で構成され、20項目のうち半分の10項目が逆転項目となっており、被検者にパターンがわかりにくいよう配列されている。

「肯定的」とある質問項目については、「ないか、たまに」を4、「時々」を3、「しばしば」を2、「いつも」を1、「否定的」とある質問項目については、逆に「ないか、たまに」を1、「時々」を2、「しばしば」を3、「いつも」を4として回答への回答を指数化し、得点を合計したものが SDS と呼ばれるものであり、41 点以上 49 点未満の場合、ストレス症状とうつ病の境界域、50 点以上の場合、うつ病の疑いがあるとされている。

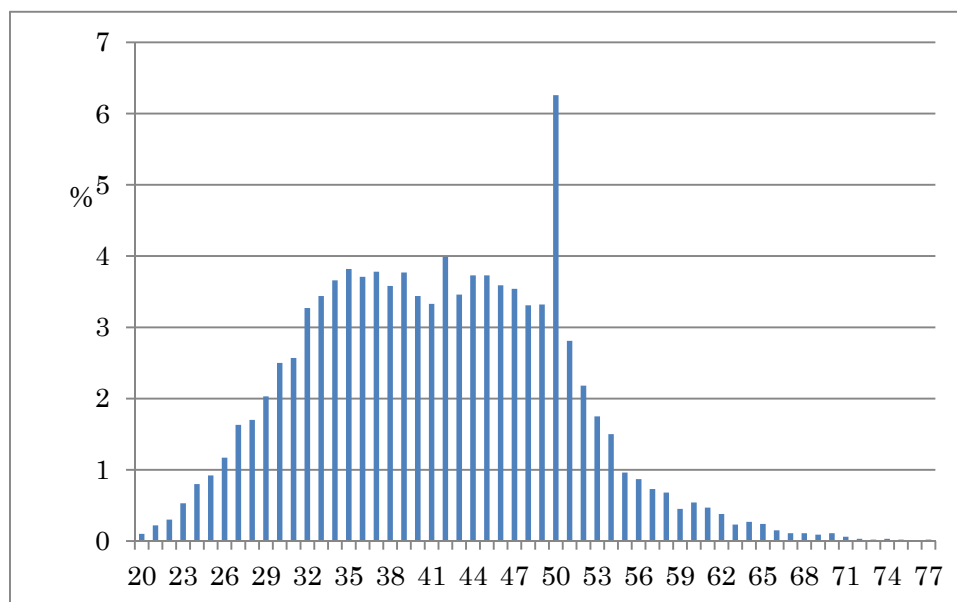
しかし、肯定的経験について、非常に低い回答が多い結果、SDS は、平均で41.5点と、境界値を超えてしまっており、調査方法の影響などが疑われ、データの解釈には注意が必要である(表 61)。

表 61 男女別の SDS

	平均	標準偏差	回答者数
男性	41.3	9.1	5576
女性	41.6	9.1	4893
全体	41.5	9.1	10469

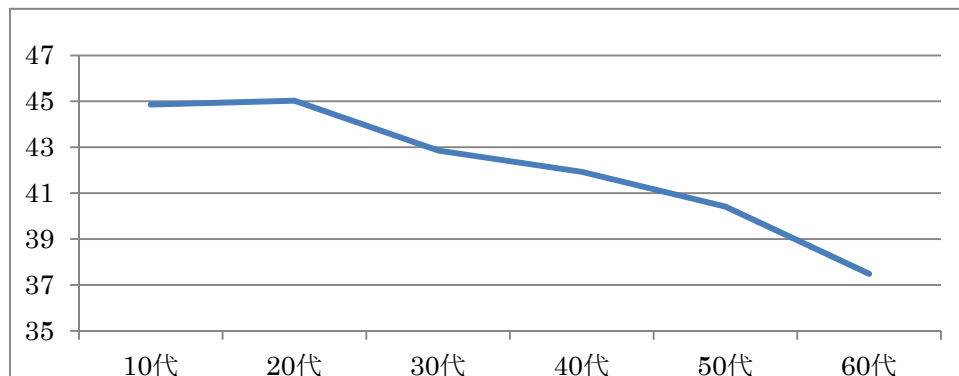
SDS の得点の分布は図 60 の通りであり、50 点のところ突出している。

図 60 SDS の得点分布(横軸が SDS、縦軸は該当の得点の回答者比率)



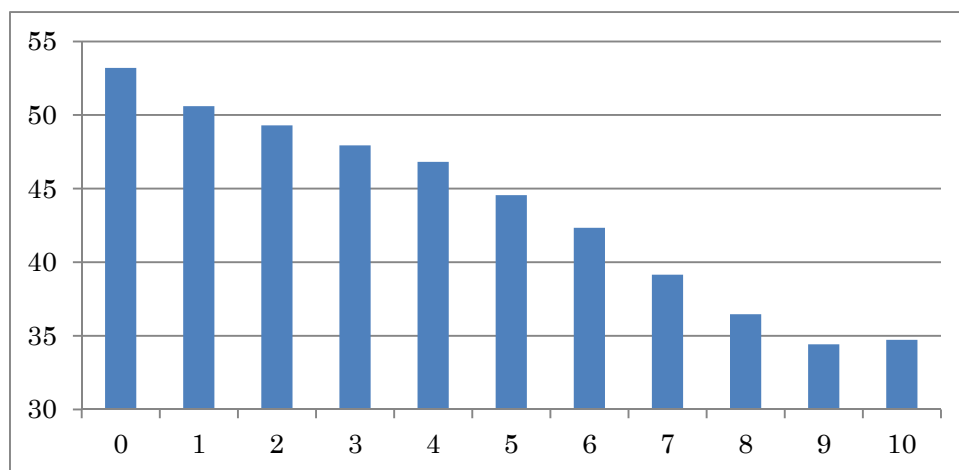
年齢別に SDS の推移をみると、若年層で SDS が高く、年齢に応じて低下している(図 61)。

図 61 年齢別の SDS



SDS と現在の幸福感をみるため、他の指標とは逆に、幸福感別の SDS の平均点を見ると、明確に相関していることが分かる。相関係数は年代別には、10代:-0.47、20代:-0.54、30代:-0.56、40代:-0.55、50代:-0.51、60代:-0.46 となっている。また、SDS の平均点は、現在の幸福感が7を超えると、40 点を下回っていることが分かる(図 62)。

図 62 現在の幸福感別の SDS(縦軸が SDS,横軸が現在の幸福感)



④ 希死念慮

「あなたは、今まで死のうとした、または本気で死のうと思ったことはありますか」と聞いたところ、「死のうとしたことがある」と回答した人が、9.7%、「本気で死のうと思ったことがある」と回答した人が13.5%という結果になった(表 62)。平成 24 年 1 月に内閣府が別途実施した「自殺対策に関する意識調査」における「あなたは、これまでの人生のなかで、本気で自殺したいと考えたことがありますか」との問いへの回答で、23.4%の人が、「自殺したいと思ったことがある」と回答しているところ、本調査における「死のうとしたことがある」と「本気で死のうと思ったことがある」を加えた数字である 23.2%という数字は、これとほとんど一致する。

表 62 希死念慮

	回答者数	比率(%)
死のうとしたことがある	1,018	9.7
本気で死のうと思ったことがある	1,409	13.5
どちらもない	7,290	69.6
答えたくない	752	7.2

年代別には、20 代で希死念慮が特に強いが、全ての年代で希死念慮が明確に存在する(表 63)。

表 63 年代別希死念慮

	10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代
死のうとしたことがある	13.9%	14.0%	11.7%	9.8%	8.1%	5.3%
本気で死のうと思ったことがある	14.3%	16.9%	15.3%	15.6%	12.8%	8.0%
どちらもない	61.7%	60.3%	66.1%	68.2%	71.5%	80.7%
答えたくない	10.2%	8.8%	6.8%	6.5%	7.6%	5.9%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

さらに、「死のうとしたことがある」、または「本気で死のうと思ったことがある」と回答した人に「具体的にいつ頃ですか」と聞いたところ、今現在、3 か月以内も合わせると 1 年以内という回答が 21%となった。「自殺対策に関する意識調査」においても「1 年以内に自殺したいと思ったことがありますか」という問があるが、その答えで、22.7%が「はい」と回答しているところ、この数字も本調査の数字とほぼ一致している。1 年以内に「死のうとしたことがある」、「本気で死のうと思った」と回答した人は、調査対象全体の 4.9%に該当する(表 64)。

表 64 希死念慮を持った時期(%)

	回答者数	比率(%)
いま現在	135	5.6
3か月以内	139	5.7
1年以内	236	9.7
5年以内	524	21.6
10年以内	414	17.1
10年よりも前	853	35.2
答えたくない	126	5.2

回答者の状況を現在の幸福感別にみると、幸福感が低いほど、希死念慮があるとする回答者の割合が高まり、現在の幸福感が0点の場合、半数以上が希死念慮を訴えている(表 65)。死のうとしたことがある、もしくは本気で死のうと思ったことがあると回答したことをダミー変数として、現在の幸福感と相関係数を取ると、 -0.1737 と1%水準で有意であった。

表 65 幸福感の水準別の希死念慮についての回答者割合

現在の幸福感	死のうとしたことがある	本気で死のうと思ったことがある	どちらもない	答えたくない
0	30.6%	22.4%	33.9%	13.1%
1	15.1%	28.5%	49.7%	6.7%
2	18.7%	23.9%	49.0%	8.5%
3	14.3%	19.6%	53.8%	12.3%
4	12.2%	18.4%	57.2%	12.1%
5	9.3%	13.7%	68.6%	8.4%
6	8.2%	12.9%	70.9%	7.9%
7	8.3%	11.2%	75.6%	4.8%
8	6.1%	10.2%	78.4%	5.3%
9	8.1%	8.1%	80.4%	3.4%
10	10.0%	9.4%	75.7%	4.9%

希死念慮をもった時期と、現在の幸福感、K6(こころの健康尺度)、SDS(自己評価式抑うつ尺度)の関係をみると、調査時期に近いほど、現在の幸福感は低く、心の健康は悪く、抑うつ度が高いことがはっきりと見て取れる(表 66)。

表 66 希死念慮と幸福感、K6、SDS の関係

	現在の幸福感	K6	SDS
いま現在	3.0	15.3	56.3
3か月以内	4.3	12.5	52.8
1年以内	4.5	10.8	50.4
5年以内	5.4	9.2	46.6
10年以内	5.7	7.4	44.6
10年よりも前	6.1	5.8	41.2
答えたくない	4.5	10.8	51.1

さらに、実際の自殺率との関係を見るために、都道府県別に集計した自殺率(平成 23 年、年齢調整済)と、都道府県別に集計したインターネット調査の次の各変数:死のうとしたことがある(ダミー変数)、本気で死のうと思ったことがある(ダミー変数)、現在の幸福感、K6、SDS、所得指数の間で相関係数を計算したところ、死のうとしたことがある(0.41)、K6(0.39)、所得指数(-0.51)が1%水準で有意、現在の幸福感(-0.31)が5%水準で有意となった。